

一般国道8号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書X

小峯遺跡

2015

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書X

小峯遺跡

2015

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育委員会は、国道建設などの道路事業に伴う発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。本書は一般国道8号柏崎バイパス建設に伴い実施した、柏崎市小峯遺跡の発掘調査報告書です。

一般国道8号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都に至る総距離561.2kmの主要幹線道路です。新潟県と北陸地方および京阪地方を結び、新潟県の産業・経済・文化の交流と発展に大きな役割を果たしています。

しかし、現在の柏崎市域では市街化の進展及び交通需要の増加に伴い、慢性的な交通混雑を引き起こしているのが現状です。柏崎バイパス建設事業は、このような問題を解決し、広域地域との交流促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画されました。

小峯遺跡は平安時代から鎌倉・室町時代を中心とする遺跡で、発掘調査の結果、掘立柱建物や井戸、水田・水路・畑作溝などが検出され、当時の集落や農地の開発の様子の一端が明らかとなりました。

今回の報告書が、地域の歴史を解明する資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と知識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を頂いた、柏崎市教育委員会ならびに地元住民の方々、発掘調査報告書から報告書刊行に至るまで格別の配慮を賜りました国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2015年3月

新潟県教育委員会

教育長 高井盛雄

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県柏崎市半田3丁目10番地10ほかに所在する小峯遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本発掘調査は、一般国道8号柏崎バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 本発掘調査は県教委が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し、1998（平成10）～1999（平成11）年度に実施した。
- 4 埋文事業団は、掘削作業などを、株式会社帆船組に委託し、発掘調査を実施した。
- 5 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、県教委が埋文事業団に委託し、主に2014（平成26）年度に実施した。
- 6 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 7 遺物の注記は、「コミネ」とし、調査年度（西暦下二桁）・出土地点・層位などを併記した。
- 8 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 9 遺物番号は通し番号とした。本文及び挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 10 引用文献は著者および発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第VI章については章末に掲載した。
- 11 各種図版・挿図作成や本文編集は、有限会社不二出版に委託した。
- 12 土壌の分析（プラントオバール分析・花粉分析）は株式会社パレオ・ラボ（鈴木 茂）に委託した。
- 13 本書はの作成は、「第VI章 自然科学分析」が鈴木 茂（パレオ・ラボ）、ほかは春日真実（埋文事業団 講長代理）がこれにあたり、編集は春日が担当した。ただし、「第IV章 道構」については、渡辺尚紀・和泉宏行・坂上法子・海津 知・尾崎高宏・白井利夫・片岡千恵の作成した道構カードを基に春日が加筆編集した。
- 14 図版中の網掛けは、各図版に凡例を示した。また、断面黒塗りの土器実測図は古代の須恵器を表す。
- 15 調査成果の一部は現地説明会資料〔1998〕、埋蔵文化財事業団 年報平成10・11年〔1999・2000〕、埋文にいたる第24・26号〔1998・1999〕などで公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。
- 16 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く感謝申し上げます。（敬称略　五十音順）

伊藤啓雄　上越市教育委員会　新潟市教育委員会　妙高市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	2
3 調査体制	3
A 試掘確認調査	3
B 本発掘調査	3
4 整理作業	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
A 柏崎周辺の古代・中世概観	7
B 小峯遺跡周辺の遺跡	9
C 柏崎平野周辺の古代遺跡	11
第Ⅲ章 遺 跡	15
1 グリッドの設定と地区名	15
2 基本層序	16
第Ⅳ章 遺 構	18
1 概 要	18
2 各 説	18
第Ⅴ章 遺 物	24
1 概 要	24
2 土器・陶磁器	24
A 土器陶磁器の概要	24
B 各 説	27
3 土製品・石製品・金属製品・木製品	29
4 試掘確認調査出土遺物	29

第VI章 自然科学分析	31
1 プラント・オパール分析	31
2 花粉分析	36
3 小峯遺跡の植生変遷	39
第VII章 まとめ	42
1 土器・陶磁器	42
2 遺構	42
 《引用・参考文献》	46
《観察表》	49
遺構	49
土器・陶磁器	51
土製品・石製品・金属製品・木製品	54

挿図目次

第 1 図 柏崎バイパスの法線と遺跡の位置	1	第 12 図 土器・陶磁器の分類	25
第 2 図 試掘確認調査トレンチ位置と地区名称	2	第 13 図 試掘確認調査 31 トレンチの位置と 出上遺物	30
第 3 図 小峯遺跡の位置	6	第 14 図 試料採取地点	32
第 4 図 刈羽郡域の莊・保と主な城館	8	第 15 図 プラント・オパール分布図 1	34
第 5 図 小峯遺跡周辺の遺跡	10	第 16 図 プラント・オパール分布図 2	35
第 6 図 柏崎地域の主要遺跡の沿長	12	第 17 図 花粉化石分布図	37
第 7 図 遺跡分布図	13	第 18 図 小峯遺跡のプラント・オパール	41
第 8 図 各地域の時期別遺跡数	14	第 19 図 土器・陶磁器の変遷	43
第 9 図 グリッドの設定と地区の呼称	15	第 20 図 遺構の変遷 1	44
第 10 図 基本層序	17	第 21 図 遺構の変遷 2	45
第 11 図 遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類	18		

表目次

第 1 表 須恵器胎土の分類	24	第 3 表 試料 1gあたりのプラント・オパール個数	33
第 2 表 古代・中世の土器陶磁器	26	第 4 表 産出花粉化石一覧表	38

图 版 目 次

【圖面図版】

- 図版 1 調査区位置図
図版 2 全体図
図版 3 分割図 1 (A・B・C1・D1・D2 区)
図版 4 分割図 2 (A 区)
図版 5 分割図 3 (B 区・D1 区)
図版 6 分割図 4 (B 区・C1 区・D2 区)
図版 7 分割図 5・個別図 1
図版 8 分割図 6
図版 9 個別図 2
図版 10 分割図 7
図版 11 個別図 3
図版 12 分割図 8
図版 13 個別図 4
図版 14 分割図 9
図版 15 個別図 5
図版 16 分割図 10
図版 17 個別図 6
図版 18 土器・陶磁器 1
図版 19 土器・陶磁器 2
図版 20 土器・陶磁器 3
図版 21 土器・陶磁器 4、土製品、石製品、金属製品、木製品

【写真図版】

- 図版 22 調査区近景・A 区全景
図版 23 基本順序
図版 24 SK1・2・3
図版 25 18E4 土器出土状況、SD4・6・10・12・13
図版 26 SD7・9・11・36、畦畔 14・18・19
図版 27 SD8、P16・20・21・25・26
図版 28 D1・2 区近景、D1 区完掘
図版 29 SD83、畦畔 84、杭検出状況、D1 区遺物出土状況、作業風景
図版 30 B 区近景、SK42、SE46・48
図版 31 SK50、P52、SB86、9・10JKL 造構検出状況・完掘
図版 32 9・10JKL 造構完掘、SD41・43・44・45・47
図版 33 SD40・75・77・78、畦畔 49、C2 区完掘
図版 34 D2 区造構検出状況・完掘、SD40・41・100・101、SK105
図版 35 C2 区完掘、7KL・8JKL 造構検出状況・完掘
図版 36 8JKL 造構検出状況・完掘、SD40・201・202、畦畔 49・226、SK220
図版 37 SD200・201・203・204・207・212・214・215・219・221
図版 38 土器・陶磁器 1
図版 39 土器・陶磁器 2
図版 40 土器・陶磁器 3、土製品、石製品
図版 41 金属製品、木製品、試掘確認調査出土遺物

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道8号柏崎バイパスは、柏崎市長崎を起点に、同市鰐波に至る延長11.0kmの幹線道路である。交通混雑の解消、広域地域との交流促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画され、1987（昭和62）年に事業化された。1991（平成3）年度から用地買収、1993（平成5）年度から工事着手して整備が進められている。これを受け、建設省（現国土交通省、以下、国交省）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

柏崎市茨目（国道252号）～柏崎市城東1丁目（国道353号）間のバイパス法線予定地の分布調査は、県教委から依頼を受けた財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下埋文事業団）が1994（平成6）年3月16・17日に実施した。分布調査の結果を受け、県教委は、周知の箕輪遺跡の範囲が拡大する可能性が高く、他にも未周知の遺跡が存在する可能性が高いことから、80,000m²の試掘確認調査が必要であることを国交省に報告している。1995（平成7）年2月に実施した国交省・県教委・事業団三者による埋蔵文化財の取り扱いに関する調整会議では、1995（平成7）年度に試掘確認調査を実施し、本発掘調査が必要な場合は1996（平成8）年度以降に実施することで合意した。

埋文事業団は県教委の依頼を受け、1995（平成7）年10月13日～10月27日に試掘確認調査を実施した。調査対象面積は10,000m²で、本発掘調査面積は9,000m²と回答している。小峯遺跡は、この試掘確認調査で新たに発見された遺跡である。

協議の結果、小峯遺跡の本発掘調査は1998（平成10）年から1999（平成11）年にかけて実施することとなった。



第1図 柏崎バイパスの法線と遺跡の位置
(国土地理院発行「柏崎」「向野町」1:50,000を縮小)

2 調査経過

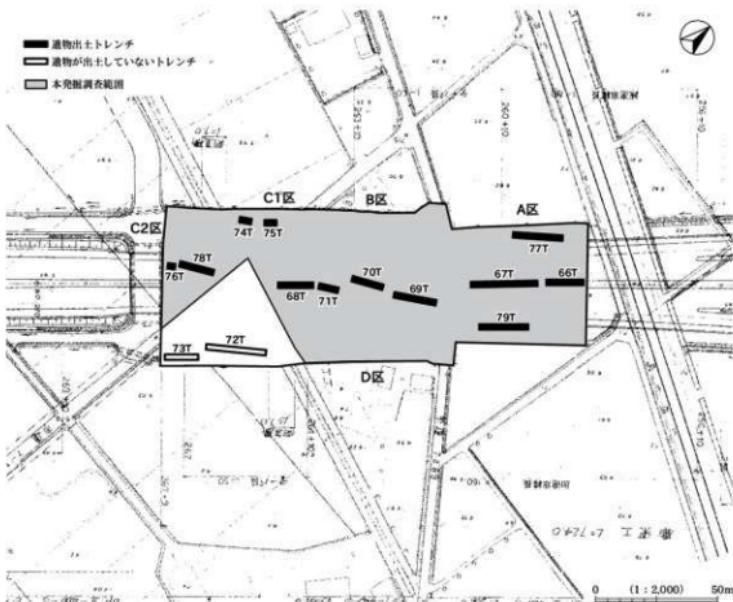
A 試掘確認調査

試掘確認調査は1995(平成7)年10月13日から10月27日にかけて実施した。調査対象面積は、10,000m²、調査面積は400m²で試掘確認率は4%である。調査の方法は、事業用地内にトレーニングを任意に設定し、掘削用重機および人力で掘削・精査を行い、土層堆積状況、遺構・遺物の検出状況、トレーニングの位置などを図面・写真に記録するものである。

調査の結果、66～71・74～79トレーニングから古代・中世の土器・陶磁器が出土し、66～69・71トレーニングから溝などの遺構を検出した。小峠遺跡は古代から中世の遺跡で9,000m²の本発掘調査が必要と判断した。

B 本発掘調査

1998(平成10)年6月10日から開始し、冬期の中止期間を挟んで1999(平成11)年8月3日に終了した。2年間の調査面積の合計は9,000m²である。



第2図 試掘確認調査トレーニング位置と地区名称
(国土交通省北陸地方整備局長岡開拓事務所作成した地図を使用)

1998(平成10)年度 A区・B区の調査を実施した。調査期間は6月10日から12月16日である。
基本層序のI～IIb層(第Ⅱ章2参照)を掘削用重機で掘削し、IIIa・IIIb層は人力で掘削し遺構・遺物の検出に努めた。8月27日に柏崎市教育委員会職員15名が遺跡の見学を行った。また、11月14日には現地説明会を行い176名の参加があった。航空写真撮影は11月5日に実施した。

1999(平成11)年 C・D区の調査を実施した。調査期間は4月19日～8月3日である。1988(平成10)年度と同様、I～IIb層を掘削用重機で掘削し、IIIa・IIIb層は人力で掘削し遺構・遺物の検出に努めた。昨年度の調査成果から、遺物包含層・遺構が削平されていると判断したD区微高地部(12～14JK付近)は調査を実施しなかった。またC2区は沼地状の土層堆積がみられ、遺構は検出されなかった。航空写真撮影は8月3日に実施した。

3 調 査 体 制

A 試掘確認調査

調査期間 1995(平成7)年10月13日～10月27日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 木間栄三郎)

調 査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

總 括 藍原直木(事務局長)

管 理 山上利雄(総務課長)

庶 務 泉田 誠(総務課主事)

調査總括 亀井 功(調査課長)

調査指導 寺崎裕助(調査課調査第二係長)

調査担当 中澤 賢(調査課主任調査員)

調査職員 大滝正人(調査課文化財調査員)

B 本発掘調査

1998(平成10)年度

調査期間 1998年6月10日から12月16日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 野本憲雄)

調 査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

總 括 須田益輝(事務局長)

管 理 若槻勝利(総務課長)

庶 務 椎谷久雄(総務課主任)

調査總括 本間信昭(調査課長)

調査指導 高橋 保(調査課調査第二係長)

調査担当 渡辺尚紀(調査課文化財調査員)

調査職員 和泉宏行(調査課主任調査員)

坂上法子(調査課文化財調査員)

海津 知(調査課嘱託員)

1999（平成11）年度

調査期間 1999年4月19日から8月3日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 野本憲雄）

調査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 須田益輝（専務理事・事務局長）

管理 若槻勝利（総務課長）

庶務 椎谷久雄（総務課主任）

調査統括 本間信昭（調査課長）

調査指導 高橋 保（調査課調査第二係長）

調査担当 尾崎高宏（調査課文化財調査員）

調査職員 坂上法子（調査課文化財調査員）

白井利夫（調査課嘱託員）

片岡千恵（調査課嘱託員）

4 整理作業

遺物の水洗・註記は可能な限り現地で実施した。1998（平成10）・1999（平成11）年度の冬期間は本格的な整理作業に向けての基礎整理（造構図面修正・造構カード作成・各種台帳作成など）を実施した。本報告作成のための本格的な作業は、2014（平成26）年度に新潟県埋蔵文化財センターにおいて実施し、印刷・刊行した。整理の体制は以下のとおり。

整理期間 2014（平成26）年4月1日～2015（平成27）年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）

整理実施機関 公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 土肥 茂（事務局長）

管理 熊倉宏二（総務課長）

庶務 仲川国博（総務課 班長）

整理総括 高橋 保（調査課長）

整理担当 春日真実（調査課 課長代理）

整理 田辺恵美子・伏見敦子

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

位置

小峯遺跡は、柏崎市半田3丁目10番地10ほかに所在し、北緯37度21分36秒、東経138度34分38秒に所在する。柏崎市は、新潟県の海岸部中央やや南西よりに位置し、2005年5月1日に刈羽郡西山町・高柳町と合併し、現在の市域が形成された。市の北西は日本海に面し、北東を三島郡出雲崎町、東を長岡市、南を十日町市、南西を上越市と接する。江戸時代は、北国街道と長岡街道（北国街道と魚沼街道を結ぶ街道）の分岐点があり、現在も国道8号から分岐する国道116号、JR信越本線から分岐するJR越後線の起点であり、陸上交通の要衝となっている。また、日本海が東西日本をつなぐ重要な通路であることはいうまでもない。

地勢

小峯遺跡の所在する柏崎平野は、鶴川と鮒石川、鮒石川の支流である別山川によって形成された幅約7km、長さ約18kmの沖積平野である。その東・西・南の三方は、東頸城丘陵、刈羽・三島丘陵と刈羽三山と呼ばれる米山（標高992.6m）、黒姫山（標高889.5m）、八石山（標高518m）などに代表される山地に囲まれている。こうした、山地・丘陵の縁辺には沖積地や一部日本海に面し段丘面が局地的な広がりを見せる。また、海岸部には砂丘（荒浜砂丘）が発達し、標高が70mを超える地点も存在する。砂丘の内陸には湿地性の沖積地が展開する〔鈴木1988・1989〕。

柏崎平野周辺の地形的特徴は、平野を北流する鶴川・鮒石川によって東部・中央部・西部に三区分できる。東部は鮒石川以東の地域で、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯、八石山から続く山地（三島山地）、別山川・長鳥川流域の沖積地、日本海沿岸の砂丘地が北北東ー南南西に向にのびる。

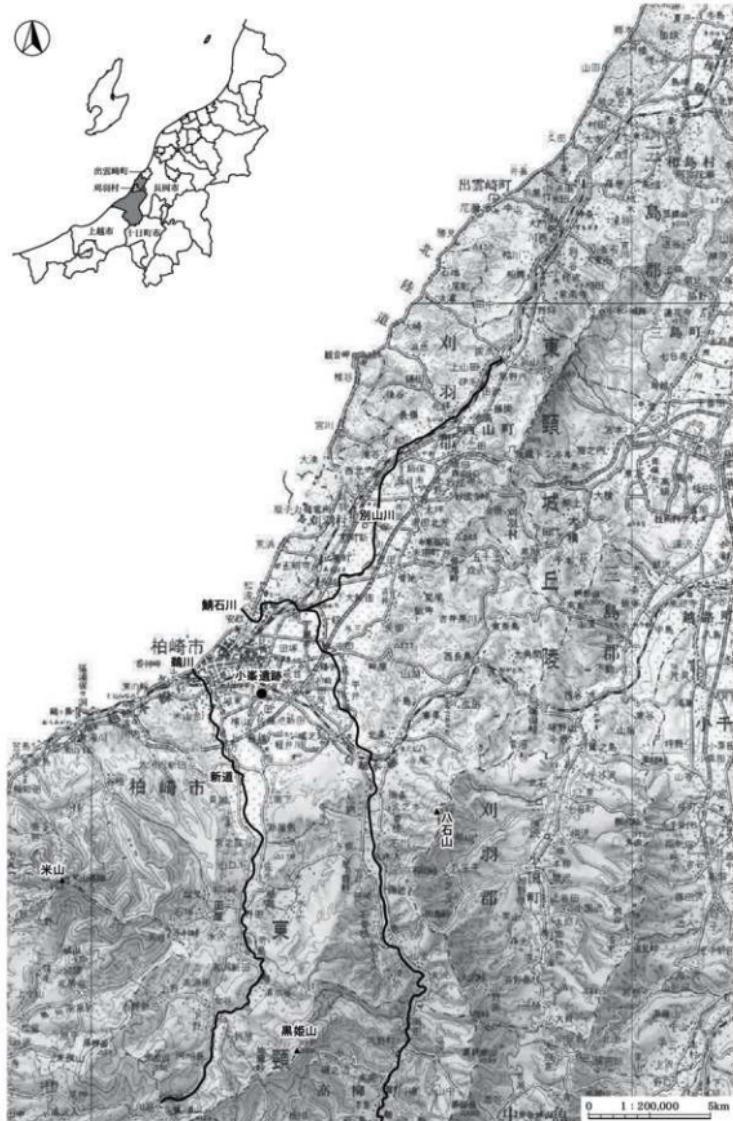
中央部は鮒石川・鶴川に沿って黒姫山から続く山地（黒姫山地）や丘陵が南ー北方向にのび、その縁辺では段丘面の発達が比較的顕著である。段丘は樹枝状に開析され、縁辺は沖積地に接している。

西部は鶴川左岸一帯で、砂丘や沖積地は少なく、米山から続く山地（米山山地）が発達する。米山山地の西部は海岸に達し断崖をなすが、東部では小さな段丘面が確認できる。平野や砂丘が比較的広範囲に展開する東部・中央部とは対照的な地勢である〔大野・徳間1990〕。

小峯遺跡周辺の地形

小峯遺跡は柏崎平野の西部、丘陵先端付近の沖積地に位置し、上記の3区分では「中央部」に所在する。標高約8.3～6.1m、西方約2.5kmに鶴川、東方約3kmには鮒石川が北流する。海岸線からは約3km内陸である。また、周辺に小規模な独立丘陵が点在する。

北側には柏崎の市街地が広がる。市街地と小峯遺跡の間には「鏡の池」と呼ばれる湖沼がかつて存在したとされる。南側は丘陵である。遺跡と丘陵の間には源田川、横山川が流れる。これら2つの河川はいずれも鶴川の支流の小河川で、源田川は鮒石川の左岸地域へ、横山川は南側の丘陵に存在する藤橋東遺跡群や軽井川南遺跡群などの製鉄遺跡へつながっている。



第3図 小峯遺跡の位置

(国土地理院発行「長岡」「高田」1:200,000)

2 歴史的環境

A 柏崎周辺の古代・中世概観

1) 古代

越後国

越後国などの北陸道の諸国は、越国を分割することにより成立した。分割の時期は不明であるが、天武一二年から一四年（683～685）に行われた国境策定作業時と推測されている〔鐘ヶ江 1993〕。成立当初の越後国は、阿賀野川以北の地域であり、箕輪遺跡の所在する柏崎平野は越中国に属していた。柏崎平野周辺が越後国に含まれるようになるのは、大宝二年（702）に越中国の四郡（頸城郡・魚沼郡・蒲原郡・苗原郡）が越後国に編入されてからである〔米沢 1980〕。

三嶋郡

柏崎平野周辺は当初古志郡に属していた。古志郡は現在の柏崎市・刈羽村・長岡市の大半と見附市の南部に及ぶ広大な範囲を有していたと推定できる。柏崎平野周辺は9世紀前半頃に三嶋郡として分立する。三嶋郡における郷名としては10世紀に成立したとされる『倭名類聚録』に「三嶋」・「高家」・「多岐」の三郷が記され、地名や式内社やその論社などの検討から、三嶋郷が鶴川流域、高家郷が鮒石川・長鳥川流域、多岐郷が別山川流域と推測している〔金子 1990〕。この指摘に従えば、小峯遺跡は三嶋郷に所在した遺跡と推定できる。

『延喜式』に記された北陸道の駅家のうち、「三嶋」と「多太」は三嶋郷に存在した駅家と考えられる。小峯遺跡の南西約1kmに所在する箕輪遺跡（第5図6）は、一般国道8号柏崎バイパスに伴い1996（平成8）年～2000（平成12）年に発掘調査が行われ、「上殿」と記された墨書土器、「駅家村」と記された木簡、黒色塗りの鏡などが出土しており〔春日・坂上ほか2015〕、近隣に古代三嶋郷衙・三嶋駅が存在した可能性が高い。

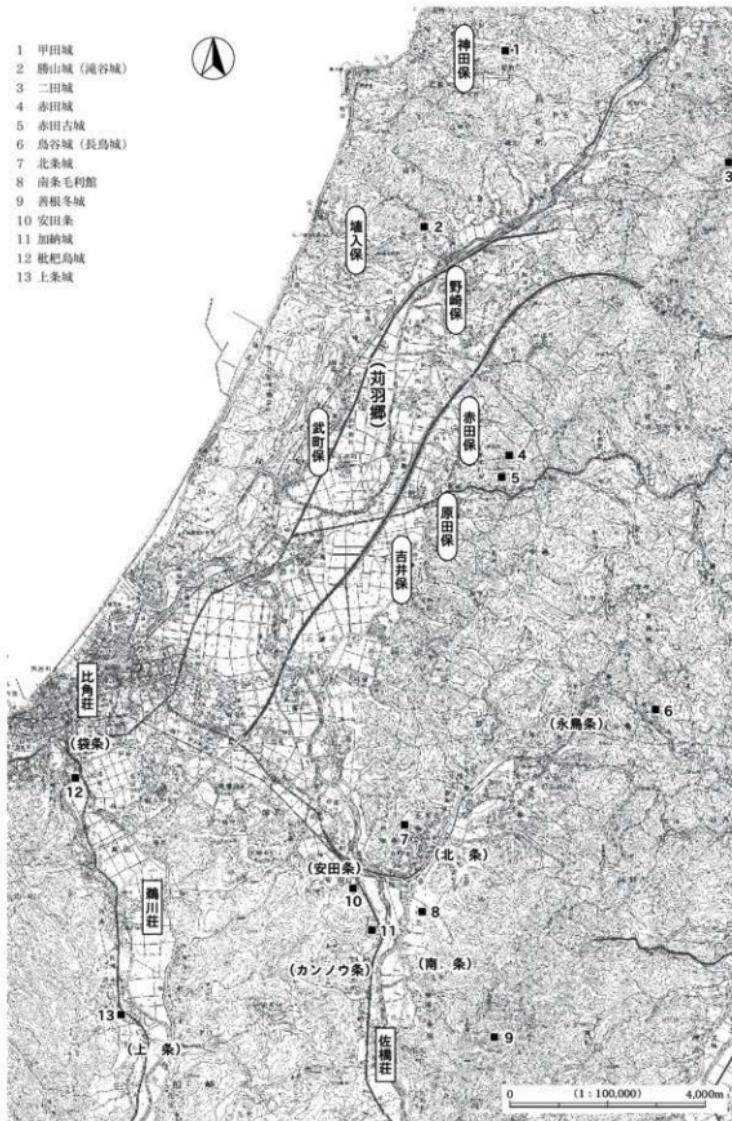
延喜式内社

延喜式神名帳には三嶋郷の神社として御嶋石部神社・物部神社・鶴川神社・多岐神社・三嶋神社・石井神社の六座が記されている。鶴川神社は小峯遺跡の西側約2.1kmに所在する宮場の鶴川神社（第5図B）、鶴川の対岸にある剣野町の三島神社（同A）は、北西約2.5kmに所在する西本町の石井神社（同C）は延喜式内社の論社となっている〔花ヶ前 2002〕。

2) 中世（第3図）

柏崎地域の荘・保

『吾妻鏡』文治二年（1186）三月一二日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に所在する莊園として「宇河莊」「佐橋莊」「比角莊」があり、これらの莊園は寄進地系莊園として11世紀末から12世紀中頃に成立したと考えられる〔荻野 1986〕。宇河莊は鶴川流域のほか鮒石川左岸の安田周辺も莊域としており、比角莊とは「鏡の沖」と呼ばれる湖沼により隔てられていたと推測される。中世の箕輪遺跡は宇河莊に所在していた可能性が高い。比角莊は現在の柏崎市市街地を中心とする地域に所在した莊園と推測できる莊園であるが、貞治三年（1364）以降史料上で確認できなくなる。佐橋莊は鮒石川上・中流域と長鳥川流域に所在した莊園である。



第4図 戸羽郡の荘・保と主な城館

([品川, 2012] をもとに作成。地図は国土地理院発行「船岡」「岡野町」1:50,000を縮小)

別山川流域や北東の岸部には中世の荘園は無く中世後期から江戸時代の史料では「野崎保」・「原田保」・「赤田保」・「埴生保」などの名称が見え、また『明月記』正治元年（1199）正月廿二日条、正和二年（1313）の「源光広和与状写」には「菊羽郷」の記載があり、国衙領となっていたものと考える【品田 1996】。

中世後期の諸勢力

越後毛利氏は宇河莊安田条（柏崎市安田周辺）と佐橋莊の領主であった。越後毛利氏は長島川流域の佐橋莊北条の領主である北条氏、宇河莊安田条の領主である毛利安田氏などに分派し、柏崎地域における最大の勢力を誇っていた。また、安田条には15世紀に毛利安田氏と土地争論を起こした「不退寺」・「普躰寺」と史料に記される寺院勢力が存在した。小峯遺跡の所在する柏崎市半田周辺は鶴川莊安田条に属していた可能性が高い【品田 1996】。刈羽村赤田周辺に存在した赤田保の領主は斎藤氏である。北条氏・毛利安田氏・斎藤氏は、上杉・長尾政権下で重臣として活躍した一族である。

鶴川上流域の宇河莊上条は、上杉氏一門の上条上杉氏の拠点であった。鶴川下流域、箕輪遺跡北西約1kmには琵琶島城がある。上杉氏の被官である宇佐美氏が配置されたとする意見があるが⁴、宇佐美氏は16世紀前半には小野要害（上越市柿崎区）に所在している【県史 164・3212】。なお、建治元年（1275）年の「六条八幡宮造営注文」に越後國御家人として「宇佐美平太跡」の記載があり、南北朝期以降の史料にみられる宇佐美氏はこの末裔と考えられる【高橋 1997】。

港町柏崎

「梅花無尽藏 続群十二下」には長享二年（1488）に柏崎を訪れた僧万里集九が「柏崎市場之面三千余家、其外深巷凡五六千戸」と柏崎の繁栄ぶりを記している。永正二～九年（1505～1512）に成立した連歌師宗長の句集「壁草」には柏崎を歌った句があり、連歌会が町人主催で催されていた可能性が指摘されている【矢田 1999】。

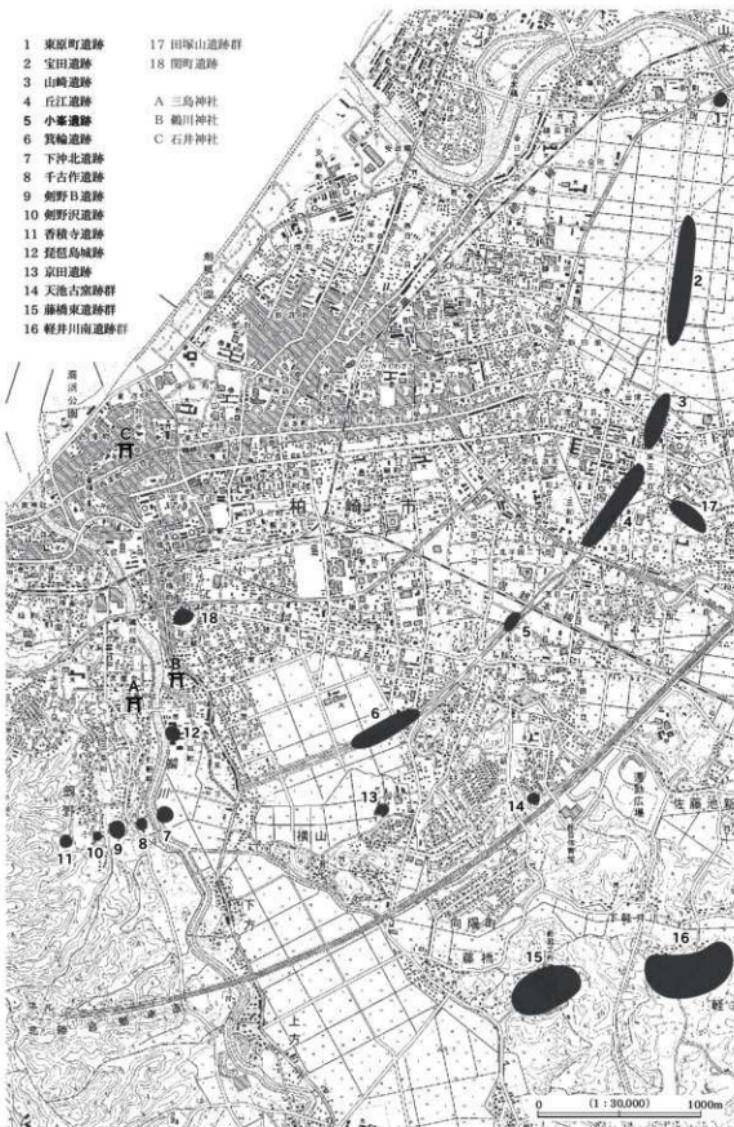
永禄七年（1564）上杉輝虎（謙信）は、戦乱により荒廃した柏崎港を復興するため柏崎の長役荒浜屋宗九郎に制札を発し、新役の停止と町人の帰還を命じ、同九年（1566）には再度諸税の免除と町屋の再建を促している【県史 266・588】。また天正八年（1580）に上杉景勝は「御館の乱」で戦禍を受けた柏崎の諸商業の復興のために七カ条の制札を発している【県史 2279】。

「梅花無尽藏」の記述は誇張が含まれているとしても、15世紀には柏崎が港町として発展しており、16世紀前半には連歌会が催され、16世紀後半には上杉氏にとって重要な港であったことが確認できる。

B 小峯遺跡周辺の遺跡

小峯遺跡周辺は、道路・工業団地・学校建設などの開発事業に先立つ試掘確認調査などによって近年多くの遺跡が存在することが明らかとなっている（第5図）。

平野部の微高地や丘陵裾付近には古代から中世の集落遺跡（官衙関連遺跡や中世の館の可能性があるもの含む）が多く確認できる。東原町遺跡（1）は中世前期の遺跡で、鉄製の小札、多量の埋納銭や土師質土器皿などが出土しており【山崎ほか 2005】、地域の中核的な遺跡の可能性が高い。宝田遺跡（2）では古代から中世の水田が検出されている【飯坂 2014】、山崎遺跡（3）・丘江遺跡（4）は中世後期の大規模遺跡であることが明らかになりつつある【国土交通省長岡地域整備局ほか 2014】。田塚山遺跡群（17）は独立丘陵上に立地する遺跡で中世前期の仏堂や墓地などを検出した。上述の「不退寺」・「普躰寺」と関連する遺跡とする意見がある【品田ほか 1996】。箕輪遺跡（6）は古代の三嶋郡衙・三嶋駅に関連した遺跡である【春日・坂上ほか 2015】。下沖北遺跡は古代から中世前期の遺跡で、中世前期では掘立柱建物とこれを区画す



第5図 小峯遺跡周辺の遺跡

(国土地理院発行「相模」1:25,000)

る溝を検出した。土師器皿が多く出土しており、東原町遺跡同様地域の中核的な遺跡の可能性が高い〔山本ほか2003〕。閑門遺跡(18)も中世前期の遺跡であり、比較的多くの土師質土器皿が出土している〔中島2012〕。

南側の丘陵には須恵器窯や製鉄遺跡などの、火(薪や炭)と土を扱う生産遺跡が存在する。天池古窯跡(14)は9世紀の須恵器窯で双耳瓶を生産している越後では珍しい須恵器窯である〔品田ほか2000〕。藤橋東遺跡群(15)・輕井川遺跡群(16)は製鉄遺跡で、輕井川南遺跡群は9世紀後半から12世紀の大規模な製鉄遺跡と推測されている〔平吹ほか2010〕。

C 柏崎平野周辺の古代遺跡

古代遺跡の分布

第7図に柏崎平野周辺の古代遺跡を示した。①柏崎平野北東の海岸部、②別山川上・中流域、③別山川左岸の丘陵裾付近、④鯖石川・別山川の合流点付近、⑤鯖石川の上流域および長鳥川の流域、⑥鶴川の中・上流域、⑦鶴川の下流域などに遺跡分布のまとまりがみられる。上述の郷域の想定が正しいとするならば①・②・③は多岐郷、④・⑤は高家郷、⑥・⑦は三嶋郷となる。

古代遺跡の存続期間

第6図に柏崎地域の古代主要遺跡(発掘調査が行われた古代の遺跡、遺物が相当量採集された古代の遺跡)の存続期間を示した(時期区分と年代については春日〔1999・2005・2010〕参照)。古墳時代4様式II期(古墳時代後期)の遺跡は一定量確認できるが、古代I・II期(7世紀)の遺跡はほとんど確認できず、古代III期(8世紀初頭～前葉)から古代IV期(8世紀中葉～9世紀初頭)に遺跡が微増し、古代V期(9世紀前葉)に遺跡が急増し、古代VI期(10世紀初頭)には古代V期かそれ以前に成立した遺跡の多くが廃絶し、遺跡数が大幅に減少する。

時期別遺跡数

第6図を基に、第8図に時期別の遺跡数を示した。第8図右列(越後合計、島崎川流域、黒川・渋海川流域、信濃川右岸(刈谷田川以南))の遺跡数は、第6図と同様の作業を各地域で行い、集計した遺跡数である。鶴川流域はIII期～IV2・3期(8世紀初頭～9世紀初頭)、VII1～VII期(10世紀初頭～12世紀前葉)の遺跡が定量確認でき、V期～VI2・3期(9世紀前葉～末)以外の遺跡数が少ない鯖石川流域・別山川流域とは異なった様相である。また、鯖石川流域ではVI1期に遺跡数のピークがあるが、別山川流域ではV期に遺跡数のピークがある。

柏崎地域合計と越後全体の遺跡数を比較すると、三嶋郡は越後全体に比べIV2・3期(8世紀末～9世紀初頭)以前の遺跡が少ない。このことは、V期(9世紀前葉)に遺跡が急増していると言え換えることができる。三嶋郡ではIV2・3期(8世紀末～9世紀初頭)の遺跡数は10、V期(9世紀前葉)の遺跡数は31であり、約3倍となっている。これに対し越後全体はIV2・3期の遺跡数が240、V期の遺跡数は373であり、約1.5倍である。

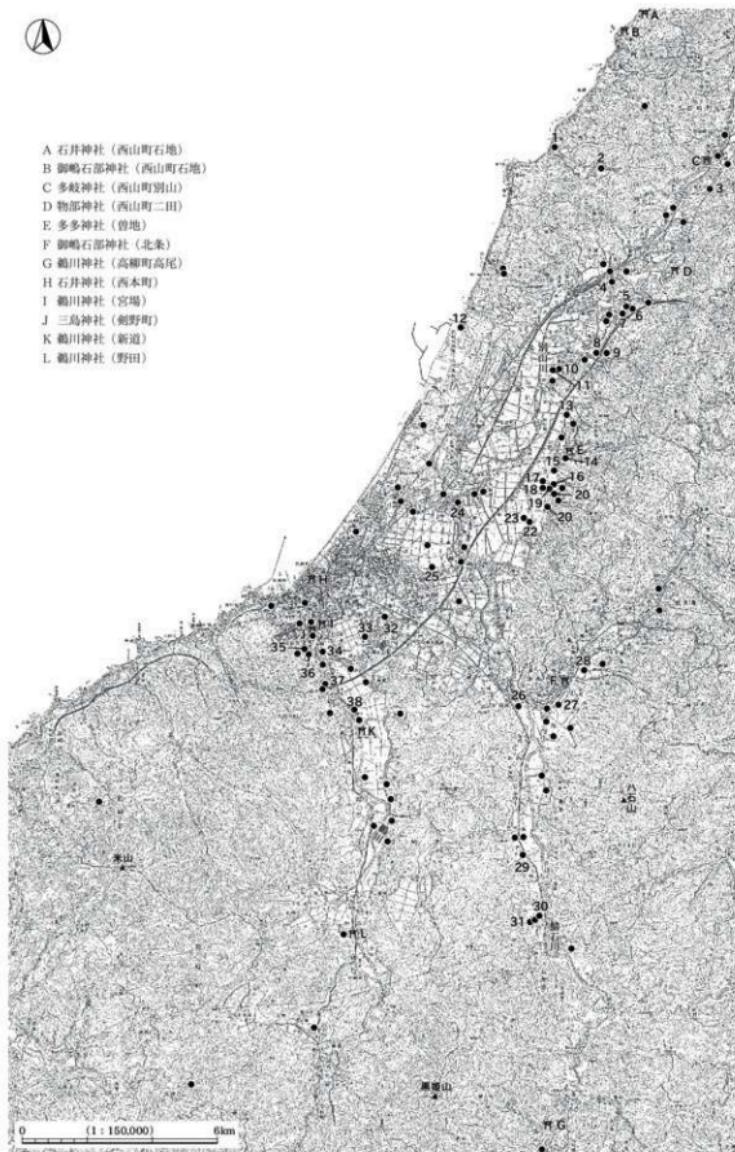
古志郡に属していたと考える島崎川流域ではIV2・3期(8世紀末～9世紀初頭)の遺跡数が10、V期(9世紀前葉)の遺跡数が22、黒川・渋海川流域ではIV2・3期の遺跡数が1、V期の遺跡が5、信濃川右岸(刈谷田川以南)ではIV2・3期の遺跡が4、V期の遺跡が8である。柏崎地域と黒川・渋海川流域は、V期以前の遺跡が非常に少なく、V期に遺跡が急増するという点では共通する。しかし柏崎地域ではV期に遺跡数のピークがあり、VI1期(9世紀後葉)以降遺跡数が減少するのに対し、黒川・渋海川流域はVI2・3期(9

世紀末)が8遺跡と最も遺跡数が多い。

また、島崎川流域で信濃川右岸(刈谷田川以南)はとともにV期(9世紀前葉)の遺跡数がIV2・3期(8世紀末~9世紀初頭)の遺跡数の約2倍であるが、島崎川流域ではII1期(7世紀後葉)~III2期(8世紀前葉)の遺跡が一定量存在し、III2期とIV2・3期の遺跡数がそれほど変わらないが、信濃川右岸(刈谷田川以南)はI1期(6世紀末~7世紀初頭)~III2期(8世紀前葉)の遺跡がほとんど確認できず、IV1期(8世紀中葉~後葉)に3遺跡、IV2・3期(8世紀末~9世紀初頭)には4遺跡となっており、IV1期以降遺跡数が増加している。柏崎地域、島崎川流域、海川・渋海川流域、信濃川左岸(刈谷田川以南)は、9世紀前葉以前はいずれも古志郡に属していた地域であるが、時期別の遺跡数の推移は地域によってそれぞれ異なっている。

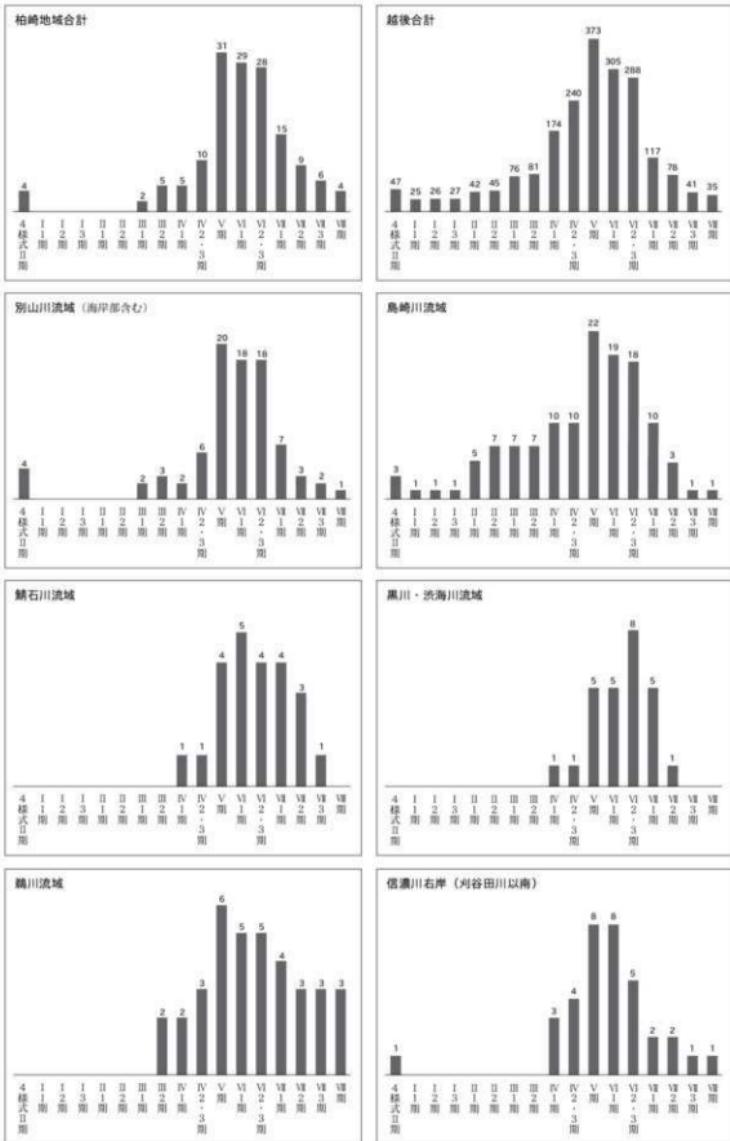
地名	番号	遺跡名	4種式 区分	時期								文献	
				I 1期	I 2期	I 3期	II 1期	II 2期	II 3期	III 1期	III 2期		
柏 崎	1	高塚B											金子ほか 1983
	2	舟ノ町											中島 2001
	4	三津沖											中島ほか 2010
	12	利田大平											高橋ほか 1985b
	18	河口											品川 1987
													高橋ほか 1990
													金子ほか 1998
													高橋ほか 1999
	11	長岡											中島 2001
	8	島田											高橋ほか 1998
	10	山ノ脇											品川ほか 1985a
	17	野瀬・ 吉崎											高橋ほか 1990
	17	吉井水止											高橋ほか 1985a
	7	柏崎仲山											高橋ほか 2005
	5	利口通跡											中島ほか 2010
	6	朝日											長澤ほか 2007
	3	尾野内											中島ほか 2009
	24	角岡											高橋ほか 1982
	22	久二											高橋ほか 1999
	23	丸ノ下											中島ほか 2009
	15	行原											高橋ほか 1982
	16	礼田											高橋ほか 1999
	12	松木A											中島ほか 2009
	21	柳町											中島・平野ほか 2006
	14	東原											高橋ほか 2008
	9	宮ノ森											高橋 1992
	28	音無瀬											高橋ほか 2012
	25	山崎											伊藤ほか 2013
	26	下平原											中島ほか 2012
	31	御所											中島 2003
	27	船の倉											中野ほか 2001
	30	御所											中島ほか 2001
	29	山王坂											中島ほか 1998
	33	美輪											高橋ほか 2002
	34	下平北											舟引・坂上ほか 2015
	36	御野沢											山崎ほか 2005
	32	小平											中島 2014
	37	船呑田											舟引
	38	御詠り											舟引ほか 1988
	36	御野											高橋ほか 1997
													高橋ほか 2011

第6図 柏崎地域の主要遺跡の消長(番号は、第7回のドットNo.と一致)



第7図 通路分布図

(国土地理院発行「林崎」「柏崎」「剣野町」1:50,000を縮小。ドットNo.は、第6回の番号に一致)



第8図 各地域の時期別遺跡数

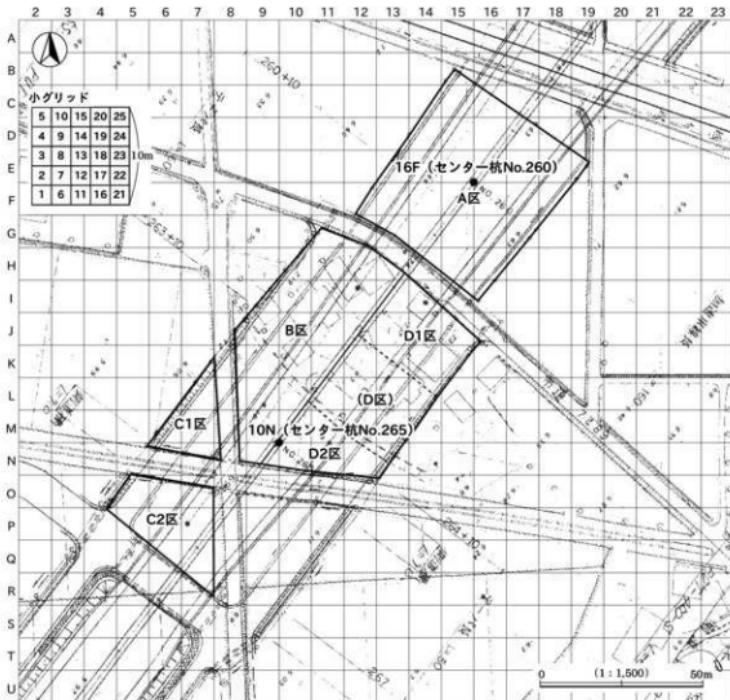
第III章 遺跡

1 グリッドの設定と地区名

センター杭 No.260 を基準に国土座標に添った 10m 単位の方眼を設定した（大グリッド）。東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットの記号を付けた。大グリッドは 2m 方眼に 25 分割し、小グリッドとし 1～25 のアラビア数字を付した。グリッドの呼称は大グリッドと小グリッドを合わせ、16D20 などと表した（第9図）。主なグリッドの座標は以下のとおり。

16F（センター杭 No.260） X 150577.8170, Y 7135.9184 (旧測地系)

10N（センター杭 No.265） X 150505.8986, Y 7066.3311 (旧測地系)



第9図 グリッドの設定と地区の呼称
(国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所作成した地図を使用)

調査区は道路により分断されている。また調査が複数年に及んだため調査区を便宜的に、A区・B区・C1区・C2区・D1区・D2区の6つに区分した。

2 基本層序

調査区内で最も標高が高いところはB区の微高地部分地表面で約8.3m(IV層上面で約7.6m)、最も低いC1区で約6.1m(IIIe層上面で約5.4m)である。B区南西・D1区はC1区も近似した標高である。A区は約6.5m(IV層上面で約5.8m)で、B区の微高地部より低いが、C1区やD2区、B区南西部よりは高い。

土層の堆積状況は、地点によって異なるが、古代から中世の遺物包含層と考えているIIIa・IIIb層は、B区の微高地部を除いたほぼ全城で確認できた(第10図)。遺構の多くはIV層上面で検出したが、IIIb層の直下にIIIc層・IIId層・IIIe層が存在する場合は、直下の土層で遺構の検出を行った。

以下、層序の特徴を各々記述する。

Ia層：暗青灰色(5BG3/1)粘土。B区・D区微高地部では、Ib層の黒褐色(2.5Y3/1)シルトとなる。表土である。

Ib層：黄橙色(10YR8/8)シルト。宅地造成時の盛土(表土)である。B区・D区の北東側のみ確認できる。

Ic層：暗オリーブ色(5Y4/3)粘土。盛土前の旧表土である。Ib層同様、B区・D区の北東側のみ確認できる。

IIa層：青灰色(10BG5/1)粘土。明褐色の酸化した土が混じる。近年の水田耕作土。平安時代～近代の遺物が出土する。

IIb層：暗青灰色(10BG4/1)粘土。IIa層と同時期(近年)の水田耕作土。IIa層より酸化の度合いが強く、全体的に赤味が強い。IIa層と同じく平安時代～近代の遺物が出土する。

IIIa層：黒褐色(5YR3/1)粘土。平安時代～中世の土層。平安時代から中世の遺物が比較的多く出土する。

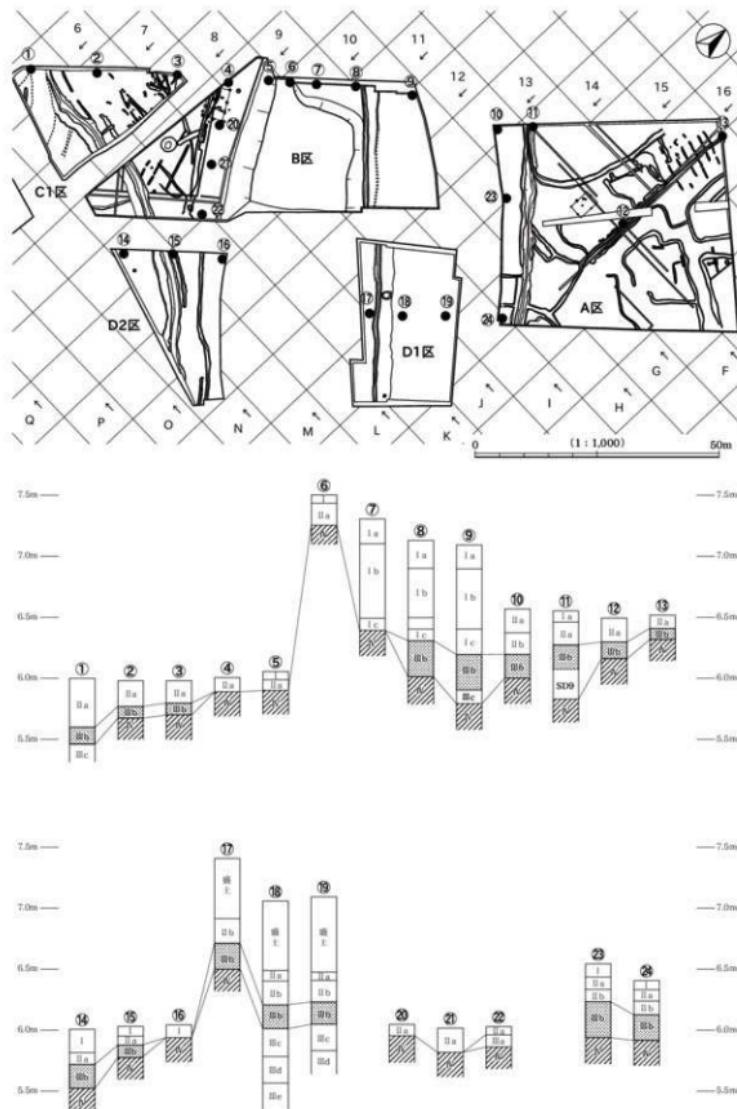
IIIb層：暗灰色(N3/)粘土。平安時代～中世の土層。溝や水田跡の覆土となる場合が多い。平安時代から中世の遺物が比較的多く出土する。IIIa層とIIIb層は酸化・グライ化の度合いにより色調が異なるだけ基本的には同一の土層と考える。

IIIc層：黒色(7.5YR2/1)粘土。遺物を含まない。沢地に堆積した粘土層。A区とB区・D1区の微高地部では確認できない。

IIId層：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。遺物を含まない。沢地に堆積した粘土層。IIIc層同様、A区とB区・D1区の微高地部では確認できない。

IIIe層：黒色(7.5YR2/1)粘土。遺物を含まない。沢地に堆積した粘土層。IIIc層・IIIe層同様、A区とB区・D1区の微高地部では確認できない。

IV層：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。地山層。下部はグライ化して明青灰色(10BG7/1)となる地点もある。B区・D1区の微高地部分と他の地区的IV層が同一の層序となる確証は無く、異なる土層の可能性もある。



第10図 基本層序

第IV章 遺構

1 概要

掘立柱建物 2、井戸 3、土坑 10、溝 63、ピット 25（掘立柱建物を構成するピットを除く）などを検出した。遺構の大半を占めるのが溝で、他の遺構は少ない。掘立柱建物は A 区に 1 棟、B 区南西に 1 棟検出した。井戸は B 区南西で 2 基、D1 区で 1 基検出した。溝には耕地の区画を目的とした溝、水路、畑作溝などがある。遺構の年代は 9 世紀～15 世紀のものが大半を占めるものと考えている。

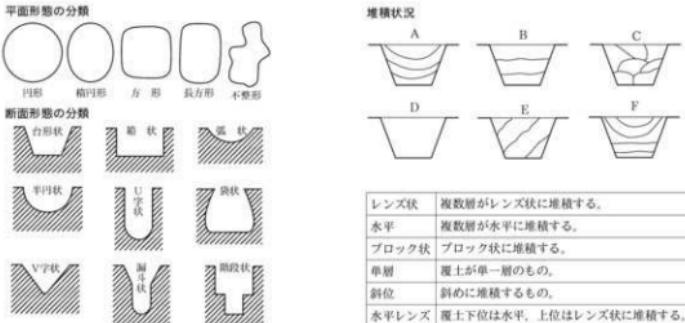
遺構種別の略号は、掘立柱建物 : SB、井戸 : SE、土坑 : SK、ピット : P、不明遺構 : SX とした。遺構番号は遺構種類に関わりなく連番としたが、C1 区では大グリッド名を冠した 1～7 のピットがある (8KP1～7)。本文・観察表における平面形・断面形・土層堆積状況の記載は、第 11 図に準拠する。以下、地区毎に記述する。

2 各説

A 区

SK1 (図版 4・8・9・24) 18E5 に所在する、東西方向に長い梢円形の土坑。覆土は 2 層に分かれレンズ状堆積である。断面形は東側が緩やかに立ち上がるのに対し、西側はほぼ垂直に立ち上がる。SD32 と重複し、これより新しい遺構である。土師器無台椀 (図版 18-1・2) のほか長釜または鍋の胸部破片が出土した。中世の遺物は出土していない。古代の遺構の可能性が高い。

SK2 (図版 4・8・9・24) 18E5 に所在する南北方向に長い梢円形の土坑。覆土は 2 層に分かれレンズ状堆積で、底面は内彎し側壁はやや外反して立ち上がる。SD32 と重複し、これより新しい遺構である。須恵器無台椀・無台杯 (図版 18-3・4) などが出土した。中世の遺物は出土していない。古代の遺構の可能性が高い。



第 11 図 遺構の平面・断面形態・堆積状況の分類 (春日・坂上, 2015 を転用)

SK3 (図版4・8・9・24) 18F25・19F21に所在する円形の土坑。覆土は3層に分かれレンズ状堆積で、断面形は弧状となる。古代の土師器無台椀のほか土師質皿T1類(図版18・5・6)が出土しており、中世の遺構と考える。

SD4 (図版4・8・9・25) 17～19EFに所在する溝。覆土は基本層序IIIa層の単層で、規模は幅約80cm、深さ約15cmと幅広で浅い。底面は凹凸が著しい。須恵器有台杯・黒色土器無台椀(図版18・27・30)などが出土した。明確な中世の遺物は出土しておらず、古代の遺構の可能性が高い。

SD5 (図版4・8・9) 18DE・19Eに所在する溝。SD4と並行し、途中で「L」字状に屈曲する。覆土は基本層序IIIa層の単層で、規模は幅約95cm、深さ約10cmとSD4に近い。土師器無台椀・須恵器有台椀(図版18・19～21)などが出土した。明確な中世の遺物は出土しておらず、古代の遺構の可能性が高い。

SD6 (図版4・8・9・25) 16DF・17CDEF・18DEに所在する溝。途中で二股に分かれる。SD4・5・12などと方位が直行もしくは一致し、関連する遺構の可能性が高い。覆土は基本層序IIIa層の単層で、規模は幅約90cm、深さ約10cmである。図示した遺物は無いが、須恵器無台杯・土師器無台椀・黒色土器無台椀などが出土しており、明確な中世の遺物は出土しておらず、古代の遺構の可能性が高い。

SD7 (図版4・8・10・11・26) 16CDEF・17CDEFGHに所在するA区を斜行して南北方向にのびる溝。南端はSD9に繋がる。覆土はIIIa層の単層で、規模は幅約80cm、深さ約40cmと、SD4～6に比べ深い。SD6・SD10-1～6と重複し、これらよりより新しい。後述するSD11・36と関連する遺構と考える。図示した遺物無いが、土師器長釜もしくは鍋の胴部破片などが出土しており、明確な中世の遺物は出土していない。

SD8 (図版4・8・10・11・27) 14F・15EF・16DEに所在する平面が弧状にのびる溝。覆土は暗青灰色粘土の単層、規模は幅約150cm、深さ約25cm、底面の凹凸が頗著である。SD9・28より新しく、古代の土師器・須恵器のほか、土師質土器皿T1類(図版18・24)が出土した。中世の遺構と考える。

SD9、**畦畔18・19** (図版4・10・11・26) SD9は14F・15FG・16GH・17Hに所在する南東・北西方向の溝。覆土はIIIb層の単層で、幅約250cm、深さ約100cmである。遺物は須恵器甕が出土した。中世の遺物は出土していない。畦畔18はSD9と並走する土手状の高まりであり、畦畔19と直行する。また16H2付近に土手状の高まりが切れるところがある。畦畔19は畦畔18に比べ幅が狭い。

SD10-1～6 (図版4・8・9・25) 16・17CDに所在する平行する小型の溝群である。いずれも覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅20～40cm、深さ10cm前後である。溝の間隔は約180cmとほぼ等間隔である。細く浅い溝が並行して並ぶことから、畑作溝と考える。SD7と重複し、これより古い。遺物は出土していない。

SD11・畦畔14 (図版4・10・11・26) SD11は16・17Hに所在する東西方向の溝。覆土はIIIb層の単層で、規模は幅約120cm、深さ約20cmと広く浅い。SD9から分岐し、SD7に連結する。遺物は出土していない。畦畔14はSD11南側に並走する土手状の高まりである。畦畔18に比べると幅が狭く、畦畔19に似た幅である。SD11、畦畔14・19ともSD7・9と同時期の遺構と考える。

SD12 (図版4・8・9・25) 17GH・18Gに所在するゆるく蛇行しながら東西方向にのびる溝。覆土はIIIa層の単層で、規模は幅約50cm、深さ約10cmである。SD4・6の一部と方向が一致し、関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SD13 (図版4・8・9・25) 16DEに所在し、長辺約11m、短辺約8mの方形に巡る溝。覆土はIIIa層の単層で、規模は幅60～290cm、深さ約5cmである。SD7と重複するが、メインセクションベルト

に伴うトレンチ掘削によって前後関係は不明である。土師器小釜（図版18・25）が出土した。中世の遺物は出土していない。

SD28（図版4・8・9） 16Dに所在する東西方向にのびる溝。覆土はIIIa層の単層で、規模は幅50～90cm、深さ5cmと幅広で浅い。SD5・6の一部の延長線上にあり関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SD29（図版4・8） 17CDに所在する南北方向の溝。覆土はIIIa層の単層で、規模は幅約100cm、深さ約10cmと幅広で浅い。南側は確認調査時のトレンチによりどこまで伸びているか不明である。SD6の一部と並行することから、SD6と関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SK30（図版4・8・9） 18E5に所在する梢円形の土坑。覆土は灰白色粘土の単層で断面は弧状となる。遺物は出土していない。

SK31（図版4・8・9） 18E4・5・9・10に所在する梢円形の土坑。覆土は灰白色粘土の単層で断面は弧状となる。遺物は出土していない。

SD32（図版4・8・9） 18DEに所在する東西方向にのびる溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約30cm、深さ約5cmである。SK1・2、SD5と重複し、これらの遺構よりも古い。SD33・34と概ね平行し、覆土も類似することから、関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SD33（図版4・8・9） 18Eに所在する溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約30cm、深さ約10cmである。東西方向にのびるが、途中「L」字状に屈曲する。遺物は出土していない。

SD34（図版4・8・9） 18Eに所在する東西方向にのびる溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約30cm、深さ約10cmである遺物は出土していない。

SD35（図版4・10・11・26） 16Fに所在する南北方向にのびる溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約30cm、深さ約5cmである。遺物は出土していない。

SD36（図版4・10・11・26） 15・16Gに所在する東西方向にのびる溝。覆土はIIIb層の単層で、規模は幅約80cm、深さ約15cmである。SD9から分岐しSD7に接する。また途中二股に分岐する。遺物は出土していない。SD7・9などと関連する遺構と考える

SB39（図版4・10・11・27） P20・21・25・26・27から構成され、15・16Fに所在する2×3間の掘立柱建物。規模は長軸4.7m、短軸3.1mである。北東・北西・南東コーナーの柱穴は未検出であるが、これは北西・北東コーナーはメインセクションベルトと共に伴うトレンチ、南東コーナーは試掘確認調査のトレンチが影響しているものと考える。柱穴の規模は20～30cmのものが多く、覆土はいずれも單層で灰白色粘土で、SD10-1～6と近似した覆土である。いずれの柱穴から遺物は出土していない。

B 区北東側・D1 区

SD83・畦畔84（図版5・7・12・13・28・29） SD83は11GH、12HI、13J、14JK、15KL、16Lに所在する北西～南東方向の溝。覆土はレンズ状堆積で、幅約70cm、深さ約30cmを測る。重複している遺構は無く、遺物は出土しなかった。水田に関連する水路の可能性が高い。SD9と平行する。畦畔84はSD83の北東に接し、並走する土手状の高まりであり、水田の畦畔の可能性が高い。

SK88（図版5・7） 14J9・10・14・15に所在する梢円形の土坑。覆土はIIIb層の単層で、他の遺構との重複は無い。深さ約5cmと浅い。土師器小片が1点出土した。古代の遺構の可能性が高い。

SE89（図版5・7） 16K21・22に所在する梢円形の井戸。覆土は5層に分かれレンズ状堆積である。

土師器小片・土師器無台椀などが出土した。古代の遺構の可能性が高い。

B 区南側・C1 区・D2 区

SD40・畦畔 49・226 (図版 6・14・15・16・17・33・34・35・36) SD40 は 6 ~ 9L・10LM・11M・12MN・13N に所在する東西方向にのびる溝。覆土はレンズ状堆積で、規模は幅約 270cm、深さ約 75cm と大きい。出土遺物は土師器・須恵器のほか土師質土器 R1 類・T1 類・R2 類や青磁・白磁などが出土している (図版 18・7 ~ 18)。下限となる遺物は 8・9 (土師質皿・小皿 R2 類) で年代は 15 世紀代頃と考える。水田に関連する水路の可能性が高い。畦畔 49 は S 水路 D40 の南側を並走する上手状の高まりで、畦畔 226 は畦畔 49 から派生し規模が小さい。ともに水田の畦畔となる可能性が高い。3 遺構とも相互に関連する遺構で、時期は中世と考える。

SD41 (図版 6・14・16・17・31・32・34) 9・10L・11LM・12M・13MN に所在する東西方向の溝。覆土はⅢa 層の单層で、幅約 35cm、深さ約 10cm である。遺物は土師器・須恵器のほか青磁碗・珠洲焼擂鉢 (図版 18・22・23) が出土している。SD40 の北側をほぼ並行してのびる。中世の遺構と考える。

SK42 (図版 6・14・15・30・31) 9K12・13・17・18 に所在する円形の土坑。直径約 3m と大型だが、深さは約 10cm と浅い。須恵器無台杯 (図版 18・26) などが出土した。古代の遺構と考える。

SD43 (図版 6・14・15・31・32) 9JK に所在する南北方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の单層で、規模は幅約 120cm、深さ約 10cm で、幅広で浅い溝である。SD44・45・47・76 と重複する。SD44・45 の前後関係は不明で一連の遺構の可能性が高い。SD76 より新しいが、SD47 との前後関係は不明。土師器片・須恵器壺片などが出土し、明確に中世とわかる遺物は出土していない。

SD44 (図版 6・12・13・14・31・32) 9K に所在する東西方向の溝。覆土はⅢa 層の单層で、規模は幅約 30cm、深さ約 10cm である。SD43 と重複するが、前後関係は不明。SD43 と一連の溝である可能性がある。また、SD45 とは同一の溝である可能性が高い。土師質小皿 R1 類 (図版 18・29) が出土した。

SD45 (図版 6・14・15・31・32) 9K に所在する東西方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の单層で、規模は幅約 60cm、深さ約 10cm の浅い溝である。SD43 と重複するが、前後関係は不明。一連の溝である可能性がある。また、SD44 とは同一の溝である可能性が高い。土師器片・須恵器壺片などが出土し、明確に中世とわかる遺物は出土していない。

SE46 (図版 6・17・18・30) 10L4・9 に所在する円形の井戸。覆土は 6 層に区分できレンズ状堆積である。4 層は植物遺体を多く含む土層で、藻灰が多く確認できた。遺物は出土していない。

SD47 (図版 6・12・13・14・31・32) 9JK・10K に所在する北西 - 南東方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の单層で、幅約 110cm、深さ 10cm と幅広で浅い。SD44 と重複しているが前後関係は不明。古代の土師器・須恵器が比較的多く出土しているが、小片が多く凶化した遺物は無い。古代の遺構と考える。

SE48 (図版 6・12・13・30) 9L23・24 に所在する井戸。覆土は 6 層に区分でき、土層堆積状況は水平レンズである。5 層にはイネ科植物の茎が多量に混入していた。平面形は径約 90cm の円形で、土師器・須恵器片が出土し、中世の遺物は出土していない。SB86 に近接し、関連する遺構の可能性が高い。SB86 は中世の掘立柱建物の可能性が高く、関連するとすれば SE48 も中世の遺構となる。

SK50 (図版 6・16・17・31) 9L15 に所在する楕円形の土坑。灰色粘土の单層である。底面はやや壠曲し、内縛気味に立ち上がる。遺物は出土していない。覆土の状況から古代の遺構と考える。

P52 (図版 6・9・31) 9L3 に所在する円形の小穴。覆土は灰色粘土の单層である。覆土上層から土師

器小釜（図版18・28）が出土した。古代の遺構と考える。

SD75・76・77・78・79・80（図版6・14・16・17・31・33） 9KL・10Lに所在する溝。いずれも覆土は灰褐色粘土の単層で、幅20～40cm、深さ10cm弱の細く浅い溝で並行する。細く浅い溝が並行して並ぶことから、畑作溝または畑作に関連する遺構と考える。溝の間隔は2～3mとSD10に比べ広い。SD75・79はSD41と重複し、ともにSD41より古い。また、SD76はSD43・45と重複し、これらより古い。いずれの溝からも遺物は出土していない。

SD81（図版6・12・13・31） 9J・10Kに所在する南北方向の溝。覆土はIIIa層の単層で、幅約50cm、深さ約5cmの浅い溝。SD47と一部重複するが前後関係は不明。遺物は出土していない。

SD82（図版6・12・13） 9Jに所在する南北方向の溝。覆土はIIIa層の単層で、幅約30cm、深さ約5cmの溝。SD47と重複するが前後関係は不明。遺物は出土していない。

SB86（図版6・12・13・31） 9IJに所在する2間（以上）×3間の掘立柱建物。P53・54・55・56・63・64・69・71により構成される。いずれのピットも覆土はIIIa層の単層である。P55からは珠洲焼壺R種の胸部破片が出土した。中世の遺構と考える。

SD100（図版6・16・17・34） 11・12Mに所在する北西－南東方向の溝。覆土はIIIb層の単層で、幅約80cm、深さ約10cmと幅広で浅い。他の遺構との重複は無く、SD40と並行する。土師器無台椀・長釜または鍋などのほか土師質土器皿T1類が出土した。中世の遺構と考える。

SD101（図版6・16・17・34） 13Nに所在する北西－南東方向の溝。覆土はIIb層・IIIb層のレンズ状堆積である。幅約50cm、深さ約10cmと幅広で浅い。他の遺構との重複は無い。土師器無台椀などが出土し、明確な中世の遺物は出土していないが、SD41と並行することから中世の遺構の可能性が高い。

SK105（図版6・16・34） 10M25に所在する略円形の小型の土坑。覆土はIIIb層の単層である。遺物は出土していない。

SD200（図版6・14・15・37） 6LMに所在する北西－南東方向の溝。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の単層で、幅約60cm、深さ約10cmと幅広で浅い。他の遺構との重複は無く、SD9・83、畦畔84などと並行する。遺物は出土していない。

SD201（図版6・14・15・36・37） 6・7Lに所在する東西方向の溝。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の単層で、幅約40cm、深さ約5cmである。他の遺構との重複は無く、SD202の延長線上にある。遺物は土師器無台椀もしくは有台椀の口縁部破片が出土している。

SD202（図版6・14・36） 7Lに所在する東西方向の溝。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の単層で、幅約50cm、深さ約20cmである。SD40と重複し、これより古い。SD201の延長線上にある。遺物は出土していない。

SD203（図版6・14・37） 8Lに所在する南北方向の溝。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の単層で、幅約60cm、深さ約10cmである。SD40・204と重複し、SD40より古く、SD204との前後関係は不明で、同時期（一連）の可能性もある。SD201・202・204などに直行する。遺物は出土していない。

SD204（図版6・14・15・37） 7・8Lに所在する東西方向の溝。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の単層で、幅約100cm、深さ約10cmである。SD203と重複するが、前後関係は不明で、同時期（一連）の可能性もある。SD201・202などと並行し、SD203に直行する。土師器小片が出土した。

SD205（図版6・14・15・35） 8K23・24に所在する北東－南西方向の溝。覆土はIIIb層の単層で、幅74cm以上、深さ約10cmである。他の遺構との重複は無い。遺物は土師器無台椀もしくは有台椀が

出土した。古代の造構と考える。

SD206 (図版 6・14・15・36) 7・8Kに所在する途切れる溝。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の单層で、幅約20cm、深さ約5cmである。他の造構との重複は無い。遺物は出土していない。

SD207 (図版 6・14・15・37) 7・8Kに所在する東西方向の溝。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の单層で、幅約25cm、深さ約10cmである。他の造構との重複は無い。遺物は出土していない。

SD208・209・210・211・212・213・214・225 (図版 6・14・15・35・37) 7・8Kに所在する東西方向の溝。いずれも覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の单層で、幅20cm前後、深さ2~5cmである。遺物は出土していない。細く浅い溝が並行して並ぶことから、烟作溝あるいは烟作に関連する造構と考える。溝の間隔は50cm前後である。時期は中世の可能性が高い。

SD215 (図版 6・14・15・36) 8JKに所在する「T」字状の溝。覆土はIIIb層の单層で、幅約70cm、深さ約5cmである。SD218と重複し、これより古い。遺物は小破片が多いが、須恵器甕、土師器小皿、無台椀・長釜もしくは鍋などが出土し、中世の遺物は確認できない。古代の造構と考える。

SD216 (図版 6・14・36) 8JKに所在する東西方向の溝。北西方向に細い溝が分岐するが、切り合ひ関係は確認できなかった。覆土はIIIb層の单層で、長軸310cm、短軸150cm、深さ約10cmである。SD217・218と重複し、これらより古い。SD215と形状が似る。遺物は小破片が多いが、須恵器無台杯・甕、灰釉陶器小片、土師器小皿、無台椀・長釜もしくは鍋などが出土し、中世の遺物は確認できない。古代の造構と考える。

SD217 (図版 6・14・15・36) 8Jに所在する東西方向溝。覆土はIIIb層の单層で、幅約40cm、深さ約10cmである。SD216・218と重複し、SD216より新しく、SD218より古い。遺物は小破片が多いが、須恵器壺瓶類、灰釉陶器小片、土師器無台椀・小釜・長釜もしくは鍋などのほか土師質土器皿R1類が出土している。SD45と同一の造構の可能性が高い。

SD218 (図版 6・14・36) 8Jに所在する南北方向の溝。覆土はIIIb層の单層で、幅約20cm、深さ約10cmである。SD215・216・217と重複し、これらよりも新しい。遺物は土師器小片が出土している。

SD219 (図版 6・14・15・36・37) 9K3・4に所在する平面形が弧状になる東西方向の溝。覆土はIIIb層の单層で、幅約25cm、深さ約2cm、ほかの造構との重複は無い。遺物は土師器小片が出土している。

SK220 (図版 6・14・15・36) 8J17に所在する円形の土坑。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の单層である。SD221と重複するが前後関係は不明である。土師器長釜か鍋の胴部破片、土師器小片が出土している。

SD221 (図版 6・14・17・36・37) 8Jに所在する北西-南東方向の溝、幅約40cm、深さ約5cmである。覆土はIIIb層の单層である。SD45と同一の溝の可能性がある。土師器長釜か鍋の胴部破片、土師器小片が出土している。

SX222 (図版 6・14・17・36) 8Jに所在する落ち込み。大半が調査区外となるため形状は不明である。覆土はIIIb層の单層である。須恵器甕・土師器小釜が出土している。

8K-P2 (図版 6・14・17・35・36) 8K7に所在する平面形が円形で、断面形が弧状の造構。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の单層である。遺物は出土していない。

8K-P3 (図版 6・14・17・35・36) 8K7に所在する平面形が円形で、断面形が弧状の造構。覆土はIV層のブロックが混じったIIIb層の单層である。遺物は土師器小片が出土した。

第V章 遺物

1 概要

遺物には土器・陶磁器・土製品・石製品・金属製品・木製品がある。出土量は土器・陶磁器が多く、平箱（内法54cm×幅34cm×深さ10cm）で28箱、金属製品（鉄滓含む）が3箱、木器1箱、石製品・土製品0.5箱である。土器・陶磁器は古代と中世のものが、縄文時代・古墳時代の土器も少量確認できる。土器・陶磁器→土製品→石製品→金属製品→木製品の順に報告する。

2 土器・陶磁器

A 土器・陶磁器の概要

古代の土器・陶器は、小片が多く全形が分かるものが多い。また、土師器は遺存状況が悪く、調整が確認できないものも多い。そのため土器・陶器の分類は、種類と器種による大まかな分類しか行っていない（第12図）。

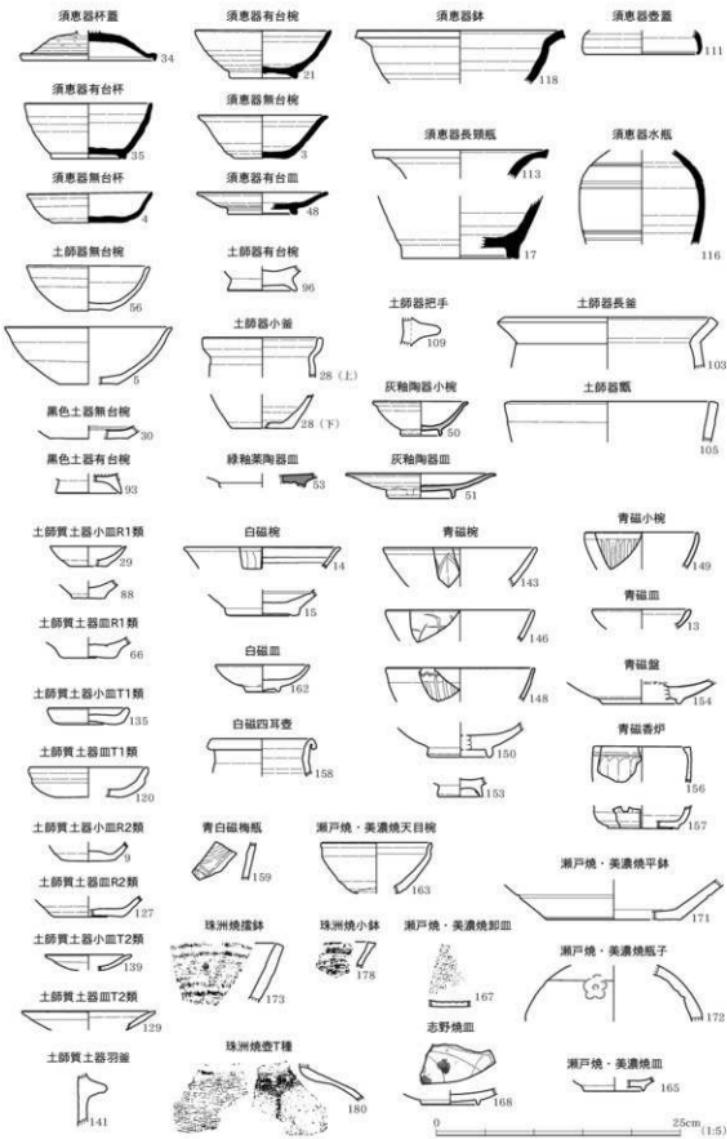
種類と器種には、須恵器杯蓋・有台杯・無台杯・有台椀・無台椀・有台皿・鉢・壺蓋・長頸瓶・水瓶・甕、土師器無台椀・有台椀・小釜・長釜・瓶・鍋・把手、黒色土器無台椀・有台椀・灰釉陶器小椀・皿・綠釉陶器皿（須恵器甕・土師器甕は図示していないが出土している）などが確認できる。須恵器の胎土分類は箕輪遺跡〔春日・坂上ほか2015〕に準拠する（第1表）。なお、箕輪遺跡で少量確認できた胎土A群は小峯遺跡では確認できなかった。

中世の土師質土器皿・小皿については、品田・水澤などの論考〔品田1991・1999ab、水澤2005〕に従い、成形技法・形態などにより、R1類・R2類・T1類・T2類の4種に細分した。ただし、土師質土器皿・小皿R1類の中には、古代の土師器無台椀と区別が難しいものが一定量存在する。

その他の土器・陶磁器は第12図には種類と器種による大まかな分類を示したが、必要に応じ輸入陶磁器は山本〔2000・2010〕・上田〔1982〕・森田〔1982〕・小野〔1982〕の分類、瀬戸焼・美濃焼（大窯含む）は藤澤〔1993・2008〕の分類・編年、珠洲焼は吉岡〔1994・2003〕の分類・編年を用いる場合がある。

分類	特徴
A群	石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の礫物を多く含む粗い胎土。阿賀北地域の須恵器窯の主体的な胎土。
B群	軟質の白色小粒子を定量含む胎土。きめ細かいB1と、砂質の強いB2の2種がある。有台杯I・無台杯にはB1、他の器種にはB2が主に用いられる。佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小泊窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯の胎土。
C1群	小型の石英・長石を少量含む比較的精良で軽土質の強い胎土。上越地域では高田平野東側の末野・日向窯跡群で主体的な胎土。他地域では新潟市東部の新津（丘陵）窯跡群・長岡市東部の東山（丘陵）窯跡群でも主体的な胎土である。阿賀北の須恵器窯の一部にも見られる胎土。
C2群	砂質もしくはシルト質で均質な胎土。高田平野閼川左岸に点在する須恵器窯に主体的にみられる。
C3群	海綿骨針を定量含む砂質の強い胎土。長岡市西部の旧和島村から三島郡出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や淡海川流域に点在する須恵器窯に主体的にみられる。

第1表 須恵器胎土の分類



第12図 土器・陶磁器の分類

区分	種類	器種	残存率/36	比率(残存率)	破片数
須恵器	盤	蓋	8.0	0.5%	5
須恵器	無台杯	154.0	8.8%	187	
須恵器	無台杯	—	—	2	
須恵器	無台碗	41.5	2.4%	11	
須恵器	有×無台碗	96.0	5.5%	79	
須恵器	有台盤	8.0	0.5%	2	
須恵器	有台杯	23.0	1.3%	47	
須恵器	有台碗	6.0	0.3%	11	
須恵器	有台碗×蓋	—	—	3	
須恵器	鉢	2.0	0.1%	4	
土師器	無台杯	3.0	0.2%	15	
土師器	無台碗	29.0	1.7%	1,195	
土師器	有×無台碗	683.0	39.3%	448	
土師器	有台碗	—	—	3	
土師器	有台盤	—	—	3	
土師器	盤	1.0	0.1%	1	
土師器	有台碗	21.0	1.2%	46	
土師器	台杯	—	—	3	
黒色土器	鉢	—	—	3	
黒色土器	無台杯	—	—	5	
黒色土器	無台碗	—	—	67	
黒色土器	有×無台杯	—	—	2	
黒色土器	有×無台碗	63.0	3.6%	214	
黒色土器	有台碗	3.0	0.2%	13	
从輪胎器	小鏡	10.0	0.6%	3	
从輪胎器	盤	5.0	0.3%	7	
从輪胎器	盤×椀	0.0	—	2	
从輪胎器	椀	21.0	1.2%	12	
从輪胎器	椀×盤	1.0	0.1%	26	
从輪胎器	也彌瓶	—	—	7	
綠釉器	盤	—	—	3	
食器具小計		1,178.5	67.9%	2,424	
野	須	圓筒瓶	4.0	0.3%	32
鐵	須	帶地盤	3.0	0.2%	210
鐵	須	水瓶	—	—	13
鐵	須	瓶	—	—	27
鐵	須	甕	1.0	0.1%	335
野	鐵	甕	8.0	0.5%	617
燒	小釜	151.0	8.7%	249	
燒	長釜	15.0	0.9%	23	
燒	鍋	—	—	1	
燒	長釜×鍋	391.0	22.4%	1,046	
燒	把手付煮炊具	—	—	2	
燒	漆口クロコ皿	0.0	—	1	
燒	鍋	—	—	3	
燒	具小計	557.0	31.9%	2,225	
燒	土師器	小片	—	—	11,652
燒	土師器	小型	—	—	6
焼	黑色土器	小片	—	—	1
焼	黑色土器	小片	—	—	25
須	須	小片	—	—	14
の	の	その他	—	—	11,698
他	計		1,743.5	100%	16,964

区分	種類	器種	残存率/36	比率(残存率)	破片数
白	白	椀	—	—	5
白	白	皿	7.0	1.9%	9
白	白	杯	—	—	2
白	白	皿×杯	—	—	1
白	白	甕?	—	—	1
白	白	PAL?	8.0	2.0%	1
白	白	小片	—	—	2
青	青	甕	—	—	1
青	青	椀	32.0	5.6%	27
青	青	皿	7.0	1.2%	1
青	青	杯	1.5	0.2%	1
青	青	甕	—	—	3
青	青	杏	11.5	2.0%	4
青	青	小片	—	—	3
青	青	花	—	—	6
青	青	花	—	—	3
青	青	花	—	—	5
青	青	梶	—	—	1
青	青	梶×小梶	—	—	2
總	總	加入陶磁器小計	67.0	70	14.0%
潔	潔	平瓶	—	—	1
潔	潔	天目碗	12.0	7	1.5%
潔	潔	皿	—	—	2
潔	潔	皿	—	—	2
潔	潔	甕	—	—	3
潔	潔	瓶子	—	—	6
潔	潔	おろし瓶	—	—	1
潔	潔	平疊	—	—	1
潔	潔	團台	12.0	1	0.2%
志	志	皿	0.0	—	1
潔	潔	美濃	—	—	2
潔	潔	美濃小片	24.0	19	4.0%
造	造	美濃陶器	0.0	—	1
造	造	美濃陶器 貝	—	—	18
造	造	美濃陶器 布	1.0	3	0.6%
造	造	造業系陶器小計	1.0	22	4.6%
珠	珠	甕	—	—	8
珠	珠	甕	—	—	1
珠	珠	甕	—	—	13
珠	珠	甕	—	—	6
珠	珠	甕×甕	—	—	65
珠	珠	小疊	—	—	4.0
珠	珠	捺疊	14.5	38	7.9%
珠	珠	小片	—	—	1
珠	珠	珠	—	—	18.5
珠	珠	皿	—	—	134
珠	珠	皿	—	—	28.0%
瓦	瓦	疊	—	—	5
瓦	瓦	瓦	—	—	2
瓦	瓦	瓦小片	0.0	7	1.5%
土	土	土器	89.5	122	25.5%
土	土	土器	143.0	102	21.3%
土	土	土器	—	2	0.4%
土	土	土器	—	1	0.2%
土	土	土器小計	232.5	227	47.4%
總	計	總計	343.0	479	100%

項目	残存率	比率(残存率)	破片数
須恵食器具	338.5	28.7%	349
土師食器具	737.0	62.5%	1,711
黒色土器食器具	66.0	5.6%	304
施釉陶器食器具	37.0	3.1%	69
食器具合計	1,178.5	100%	2,424
總計	1,743.5	100%	16,964

第2表 古代・中世の土器陶磁器

B 各 説

SK1 (図版 18 1・2) 1・2 はともに土師器無台椀である。調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転糸切りである。

SK2 (図版 18 3・4) 3 は須恵器無台椀で調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転糸切りである。4 は須恵器無台杯で調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転糸切りである。

SK3 (図版 5・6) 5 は口径 17.0cm となる大型の土師器無台椀である。調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転糸切りで、ヘラミガキやロクロケズリなどの再調整は行われていない。6 は土師質土器皿 T1 類である。口縁端部が丸く、器壁は比較的薄い。

SD40 (図版 18 7～18) 7～11 は土師質土器で、7 は皿 T1 類、8 は皿 R2 類、9 は小皿 R2 類、10・11 は皿 R1 類である。12 は土師器有台椀。10・11 と近接した時期の可能性が高い。

13～15 は輸入陶磁器である。13 は青磁皿で内外面とも無文である。8・9 などの土師質土器皿・小皿 R2 類と近接した時期となるものと考えている。14・15 は白磁椀で 14 は山本分類〔山本 2000〕の V-4 類、15 は IV 類であり、10～12 と近接した時期の可能性が高い。

16～18 は須恵器壺瓶類の底部である。16 は小型で高台が無い。胎土は C2 群である。17・18 は長頸瓶の底部である。胎土は B 群である。

SD5 (図版 18 19～21) 19・20 は土師器無台椀の底部破片である。底径は 19 が 4.0cm、20 が 5.2cm と比較的小さい。21 は須恵器有台椀で断面三角形の高台が付く。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は B 群である。

SD41 (図版 18 22・23) 22 は青磁椀の底部破片で、上田分類〔1982〕の B IIb 類である。23 は珠洲焼擂鉢の口縁部破片で吉岡編年〔1994〕の V 期のものと考える。

その他の遺構 (図版 18 24～33) 24 は SD8 出土の土師質土器皿 T1 類である。25 は SD13 出土の土師器小釜の底部破片である。26 は SK42 出土の須恵器無台杯で、口縁部の外傾度合いが大きい。胎土は B 群である。27・30 は SD4 からの出土で、27 は須恵器有台杯である。底径が小さく、胎土は B 群である。30 は黒色土器無台椀である。ロクロ成形で底部は厚手である。内面はヘラミガキを行う。底部外面の調整は摩耗のため不明である。28 は P52 から出土した土師器小釜である。内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切りである。口縁端部は上方に屈曲する。カキメやヘラケズリなどの調整は確認できない。29 は SD44 から出土した土師質土器小皿 R1 類。33 は SD47 出土の須恵器有台椀である。胎土は B 群で、21 とよく似た器形になるものと考える。

31・32 は土師質土器皿 T1 類である。31 は「9L6 溝」、32 は「17E 溝」の註記がある。31 は SD40 の遺物の可能性が高い。32 は SD6・7・13 などが考えられる。

包含層ほか (図版 18～21 34～183) 34～48・118 は須恵器食膳具である。34 は杯蓋で、頂部はロクロケズリを行う。胎土は C2 群である。35～39 は有台杯で、いずれも胎土は B 群である。底径が比較的大きい 35 と小さい 36～39 がある。40～42 は胎土 B 群の無台杯で、底部切り離し技法はいずれも回転糸切りである。40・41 は底部がやや突出する。42 は 40・41 に比べ小型で底部は平底である。43 は無台椀、44～47 は有台椀、48 は有台皿でいずれも胎土は B 群で、底部切り離し技法がわかるものはすべて回転糸切りである。118 は須恵器鉢で胎土は B 群である。

49～52 は灰釉陶器で、49・50 は小椀、51 は皿、52 は椀または皿である。49・50 は内底面全面に

灰釉があるが、51・52は内底面に灰釉が無い。高台の形態は49・52が方形、50・51が三日月状となる。胎土、色調は、51がやや灰色味を帯びた砂質が強い胎土で、49・50・51が乳白色で精良な胎土である。53は縁釉陶器皿で、高台は貼付けの輪高台である。胎土は酸化軟質で、釉調は淡い緑色である。

54～101は土師器・黒色土器・土師質土器R1類の食膳具である。54・55は底径6.5cm以上となる大型の土師器無台椀で、図版18-5と比較すると口縁部の外傾度が大きい。65～71は土師質土器皿R1類である。いずれも底部がやや突出する。胎土は砂粒を多く含むものが多い。72～74は土師質土器小皿R1類、75・78～89も土師質土器小皿R1類の可能性が高いと考えた。76・77は土師器無台椀の可能性が高いと考えたものであるが、他の器種の可能性もある。90～93は黒色土器有台椀、94も黒色土器有台椀の可能性が高い。形態は一様ではなく、底部が薄く底径が大きい90・91、底部が薄く底径が小さい92・93、底部が厚く底径が小さい94がある。95～101は土師器有台椀。黒色土器と同様に、底部が薄く底径が大きい95、底部が薄く底径が小さい98、底部が厚く底径が大きい96・97があり、このほか底部が厚く底径が小さい99～101がある。

102～110は土師器煮炊具である。102～104は土師器長釜で、口縁端部の形態は面を持つもの(101)、わずかに内屈するもの(102)、明瞭に内屈するもの(104)がある。106～108は小釜で、106・107は口縁部から胴部、108は底部である。106は口縁がわずかに内側に丸い。107は口縁が直線的で端部は面を持つ。105は口縁部から胴部がわずかに外傾する。瓶と考えたが他の器種の可能性もある。内外面ともロクロナデである。109・110は把手で、鍋や瓶の把手となる可能性が高い。

111～117は須恵器貯蔵具である。111は壺蓋、112～115・117は長頸瓶、116は水瓶である。胎土は112がC2群、111・113～117はB群である。

119～131は土師質土器皿で、119～126はT1類、127はR2類、128～131はT2類である。130・131は128・129に比べやや小振りである。132～140は土師質土器小皿。132～135はT1類、136・137はR2類、138～140はT2類である。

142～162は輸入陶磁器である。142～153は青磁楕・小楕であり、山本分類〔2000〕の龍泉窯I類(144)、同IIa類(142)、同IIb類(143)、上田分類〔1982〕のC類(145・146)、BIV類(147)、BIV'類(148・149)などが出土している。154は青磁盤で山本分類の龍泉窯III類と考える。155～157は香炉で、156・157は同一個体の可能性が高い。158は白磁四耳壺である。磁胎でやや灰色を帯びた釉薬がかかること。山本分類のIII類である。159は青白磁梅瓶の胴部破片である。160は白磁杯、161・162は白磁皿である。160～162はいずれも森田分類〔1982〕のD群である。160の外側には墨書がある。

163～167・171・172は瀬戸焼または美濃焼である。163・164は天目楕、165は丸皿・種皿などの楕、166は燭台、167は鉢皿、171は平鉢、172は瓶子である。163～165は大窯期まで下る可能性がある。他のものは後期を中心とする時期のものと考える。

173～178・180は珠洲焼。173～178は擂鉢または小鉢である。174・175は吉岡編年〔1994〕のII～III期、173・178はIV期、176・177はV期と考える。180は壺T種の胴部上半の破片であるが、口縁部が無く詳細な時期は不明である。

168は志野焼皿。内底面には鉄絵による草花文がある。年代は16世紀末頃と考える。169・170・179は肥前系陶器。169は蓋、170は小皿、179は擂鉢である。年代は16世紀末から17世紀前半ころのものと考える。

181は須恵器技法を用いない釜類もしくは壺の底部破片、182は須恵器技法を用いない小型土器もし

くは杯などの底部破片と考える。183は縄文土器深鉢の口縁部破片でLR縄文が施文される。詳細な時期は不明である。

3 土製品・石製品・金属製品・木製品

土 製 品（図版21 184～193）

184は雨垂れ形の土師質の土製品である。中央に孔があるが貫通しない。紡錘車または土鍤の未成品の可能性がある。185は陶鍤、186～189は土師質の土鍤である。同一個体の可能性がある。

190～192は転用研削具で、190は須恵器壺の胸部破片、191・192は珠洲焼甕または壺T種の胸部破片を素地とする。

193は平面形が円形で、複数の円孔を持つ扁平な土製品になるものと推測する。酸化硬質の焼き上がりで近世以降の遺物の可能性もある。

石 製 品（図版21 194～199）

194は石帶の巡方で石材は蛇紋岩である。

195～197は砥石。195は上部に貫通する小孔がある。石材は195が砂岩、196が凝灰岩、197が流紋岩である。

198は打ち欠き石鍤で縄文時代の石器と考える。199は敲石で側面に敲打跡が残る。198・199の石材は2点とも安山岩である。

金 属 製 品（図版21 200～207）

中世以前の銭貨を8点図示した。最も古いものは202（成平元寶）で初鋤は998年（北宋）、最も新しいものは207（朝鮮通寶）で初鋤は1423年（朝鮮王朝）である。このほか金属製品には寛永通寶や近世（以下）の煙管・笄・鉄滓などが出土している。

鉄滓は3,318g出土した。鉄滓が比較的多く出土したグリッドは、10K(197g)、10L(102g)、11L(217g)、12N(337g)、18E(394g)などで、土坑や掘立柱建物跡が存在するグリッドから比較的多く出土する傾向がある。

木 製 品（図版21 208～211）

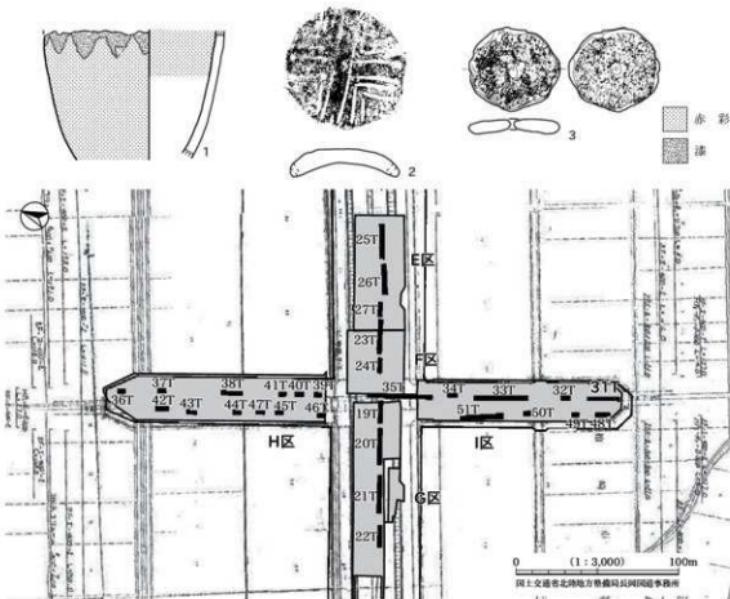
208・209は連歯下駄。208は遺存状況が悪く、器面の大半が摩耗している。木取りは柾目である。209は歯の下端付近に銀痕が残っており、近世以降の可能性が高い。210は直径約20cmになる7円形板で、木取りは柾目である。211は漆器椀の小片で、底部は薄く高台は細いものと推測できる。内面は赤色漆、外面は黒色漆で内外面とも無文である。

4 試掘確認調査出土遺物

第13図には1995（平成7）年に一般国道8号柏崎バイパス建設に関連して実施した試掘確認調査の出土遺物を示した（1～3）。1995（平成7）年の試掘確認調査では、対象面積80,000m²（箕輪遺跡【高橋ほか

2002、春日・坂上ほか2015]を含む)に対し79カ所のトレンチを任意に設定し、2,000m²の調査を行い、平箱(内法54cm×幅34cm×深さ10cm)6箱の遺物が出土した。特に31トレンチから多くの遺物が出土している。31トレンチは箕輪遺跡のI区にあたり、1998(平成10)年度と2000(平成12)年に本発掘調査が行われており、2001(平成13)年度に発掘調査報告書が刊行されている〔高橋ほか2002〕。箕輪遺跡で使用したグリッドではK4t・y、K5p・u周辺に設定されたトレンチである。本発掘調査では弥生時代中期の土器・石器(石器には玉作遺物含む)が比較的まとまって出土した地区である。

1~3は31トレンチから出土した土器である。1は壺の口縁~頸部で内外面とも赤彩を行う。外面上端付近には漆により鋸歯状の文様を表す。2は蓋で外面に撻描き文様がある。3は鍊車である。内外面ハケメ調整の釜または壺の胴部破片を円形に加工し、中央を穿孔する。年代は2・3が弥生時代中期である。1は栗林式の土器の可能性があり、弥生時代中期のものと考えたい。



第13図 試掘確認調査31トレンチの位置と出土遺物

第VI章 自然科学分析

1 プラント・オパール分析

はじめに

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞壁酸体や单細胞壁酸体などの植物壁酸体）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞壁酸体については藤原 [1976] や藤原・佐々木 [1978] など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている [藤原 1984]。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。小峯遺跡においては水田とみられる遺構の確認、および各調査区の基本土層における水田層の検討を目的にプラント・オパール分析を行い、その結果・考察を以下に示す。

また一部同試料を用いて花粉分析を行い、その結果・考察を合わせて遺跡周辺の植生変遷についても検討した。

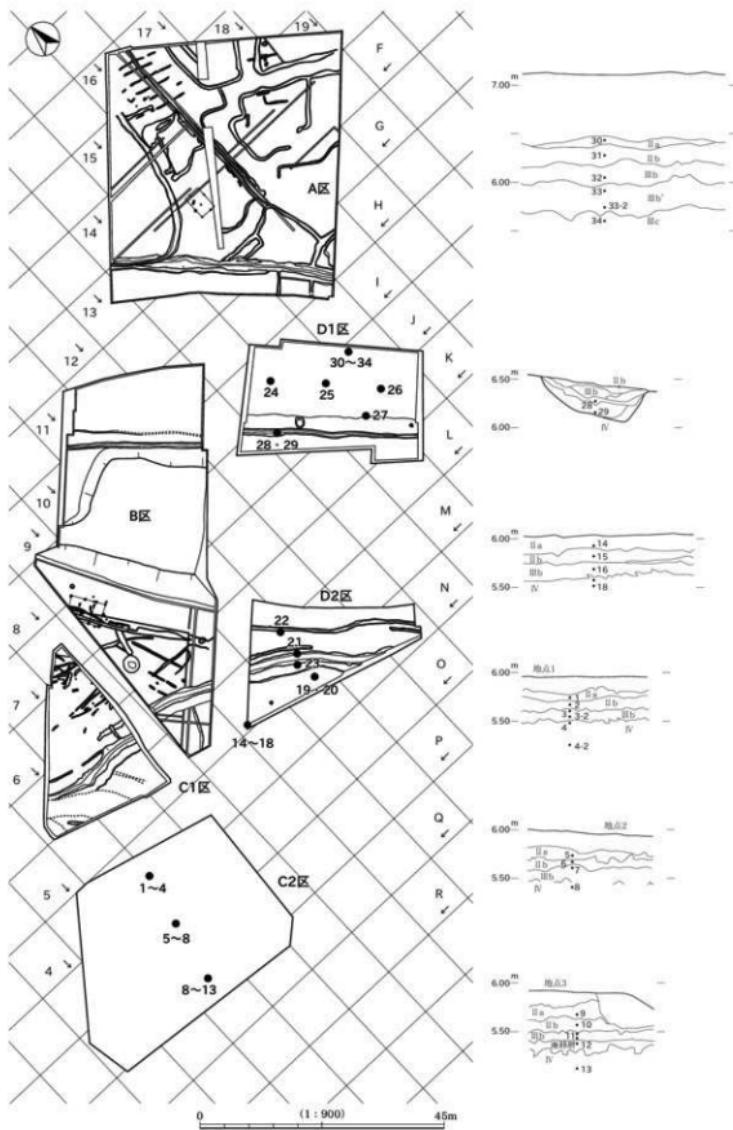
試 料 (第14図)

分析用試料はC2区の基本土層3地点、D1区・D2区の基本土層および遺構面・溝覆土より採取した38試料である。小峯遺跡の基本層序はI層～IV層からなり、各層について、最上部I層は表土・盛土、IIa層は青灰色の砂質粘土で、近年の水田耕作土である。IIb層は暗青灰色の砂質粘土で、炭片が点在しており、赤褐色の酸化鉄が根状に多く集積している。このIIb層はIIa層と同様に近年の水田耕作土である。IIIb層は暗灰～黒灰色粘土で、赤褐色酸化鉄の集積が縱方向に上部ほど発達している。このIIIb層は平安期の水田跡・溝覆土と考えられている。IIIb'層は黒灰色の砂質粘土である。IIIc層は黒色の泥炭質粘土で、平安期の沢の堆積物とみられている。IV層は地山である。上部は明黄褐色の粘土で、赤褐色酸化鉄の集積が縱方向に発達しており、下部は明青灰色の粘土で、D1区・D2区では黒灰色粘土塊が点在しており、レキや植物遺体も認められる。また、C2区の地点3ではIV層からIIIb層にいたる漸移層が認められ、層相は暗灰色粘土で、IV層が塊状・火炎状・斑状に混入している。

こうした土層より、C2区ではIIa層～IV層について3地点の16試料 (No.1～3・3-2・4・4-2・5～11・11-2・12・13) を採取した。D-1区では基本土層地点からIIa層～IIIc層について6試料 (No.30～33-33-2-34) と、SD83覆土の2試料 (No.28・29)、IIIb層上面の4地点 (No.24～27) を採取した。D-2区では基本土層地点からIIa層～IV層について5試料 (No.14～18) とSD40・畦畔49の南側に広がる水田と推定される区域のIV層上面 (No.19) およびその覆土 (No.20)、SD100溝覆土 (No.21)、SD41溝覆土 (No.22)、SD40溝覆土 (No.23) を採取し、総計38試料を得た。

分析方法

上記した3地区38試料について下記の方法にしたがってプラント・オパール分析を行った。秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピーブ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱機



第14図 試料採取地点

物処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により $10 \mu\text{m}$ 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについてガラスピーズが 300 個に達するまで行った。

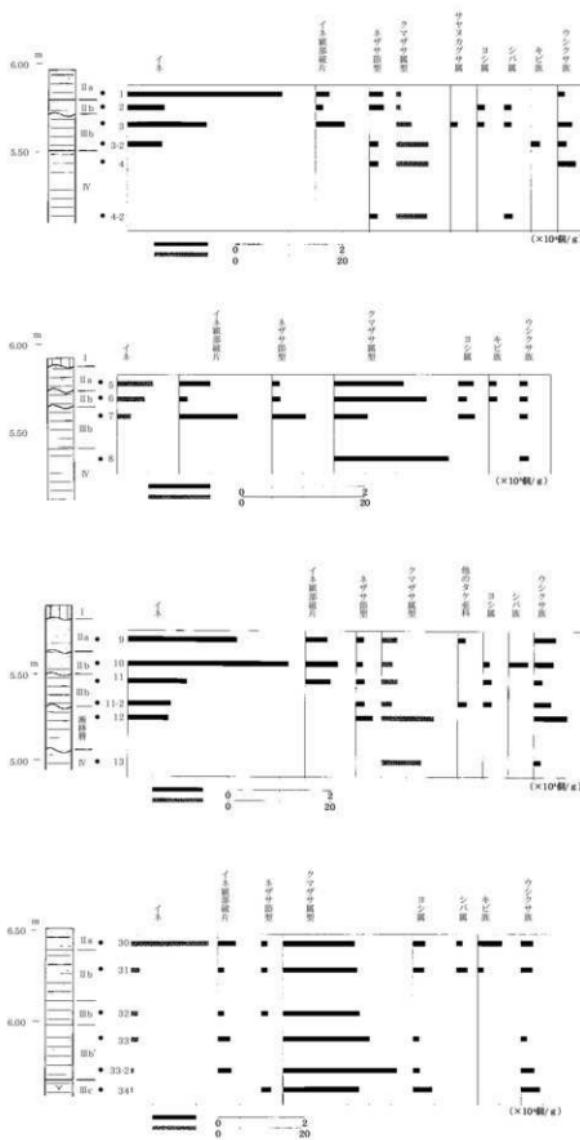
分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め(第3表)。それらの分布を第15図(試料 1~13(3-2・4-2・11-2含む)・24~34(33-2含む)C2区・D1区の採取資料)、第16図(試料 14~23:D2区の試料)に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料 1g 当りの検出個数である。なお、イネの穎部(穂殼)の珪酸体がバラバラの状態で観察されたことから、他のプラント・オパール同様の考え方でその破片数を計数して図表に示した。よって、その数値はあくまでも破片の数であり、穂殼数ではなく、現時点では参考程度にみて頂きたい。

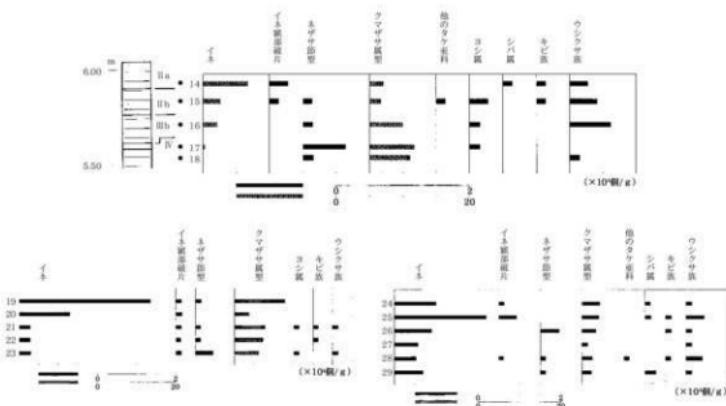
C2区(第15図 試料 1~13):3 地点ともV層試料を除き多くのイネのプラント・オパールが検出され、おむね上部に向かい増加する傾向が認められる。個数的には地点 2 の最上部試料 No.5 が最も多く約 60,000 個に達しており、少ない試料でも 5,000 を越えている。イネの穎部破片は 3 地点とも IIIb 層の上

試料番号	調査区	層位	イト (解/g)	イネ (解/g)	イネ頭部 破片 (解/g)	カバザ節型 (解/g)	カバザ 節型 (解/g)	他の タケノコ (解/g)	サキシタ ガラス (解/g)	ヨシ属 (解/g)	シバ属 (解/g)	キビ属 (解/g)	ウンクサ属 (解/g)	不明	
1	C2区地点 1	II a 層	28,700	2,600	2,600	9,100	0	0	0	0	0	1,300	6,500		
2		II b 層	5,500	1,100	2,200	6,700	0	0	1,100	1,100	0	0	3,300		
3		IIIb 層上部	14,800	5,400	0	28,300	0	1,300	1,300	1,300	0	2,700	12,100		
3-2		IIIb 層下部	6,600	0	1,600	59,100	0	0	0	0	1,600	1,600	11,500		
4		IV 層上部	0	0	1,600	56,900	0	0	0	0	0	3,300	3,300		
4-2		IV 層	0	0	1,600	57,400	0	0	0	1,600	0	0	0		
5		II a 層	57,600	5,000	1,200	11,300	0	0	2,500	0	1,300	1,200	10,000		
6		II b 層	44,600	1,400	1,400	14,900	1,400	0	1,400	0	1,400	1,400	6,800		
7		IIIb 層	21,600	9,500	5,400	5,400	0	0	2,700	0	0	1,400	1,400		
8		IV 層	0	0	0	18,500	0	0	0	0	0	1,500	1,500		
9	C2区地点 2	II a 層	21,500	4,300	1,400	30,300	1,400	0	0	0	0	0	4,300	8,600	
10		II b 層	31,700	6,300	1,300	21,600	0	0	1,300	3,800	0	3,800	7,600		
11		IIIb 層上部	11,700	5,000	1,700	31,700	0	0	1,700	0	0	1,700	1,700		
11-2		IIIb 層下部	8,600	0	1,700	20,500	1,700	0	1,700	0	0	3,400	6,800		
12		遷移層	8,100	0	3,200	103,800	0	0	0	0	0	6,500	3,200		
13		IV 層	0	0	0	78,100	0	0	0	0	0	1,400	0		
14		II a 層	67,300	2,700	0	20,600	0	0	0	1,400	1,400	2,700	8,200		
15		II b 層	26,300	1,400	1,400	16,600	1,400	0	2,800	0	1,400	4,200	6,900		
16		D2区基本土層	21,600	0	1,500	49,400	0	0	1,500	0	0	6,200	4,600		
17		IV 層	3,200	0	6,400	67,100	0	0	1,600	0	0	0	1,600		
18		IV 層	0	0	1,600	60,600	0	0	0	0	0	1,600	3,200		
19	D2区画面 103	水田苗 (IIIb 層上部)	33,500	1,500	1,500	127,300	0	0	0	0	0	0	22,800		
20		水田苗	13,000	0	0	37,500	0	0	0	0	0	0	4,900		
21		D2区 SD100	2,900	1,500	1,500	76,900	0	0	1,500	0	1,500	1,500	2,900		
22		D2区 SD41	2,800	1,400	1,400	72,600	0	0	0	0	1,400	0	7,000		
23		D2区 SD40	3,500	1,500	4,500	60,900	0	0	1,500	0	0	1,500	5,900		
24		D1区ボイント 3 (IIb 層上部)	10,000	1,400	0	42,700	0	0	1,400	0	0	1,400	4,300		
25		D1区ボイント 4 (IIb 層上部)	22,000	4,400	0	41,000	0	0	1,500	0	1,500	4,400	4,400		
26		D1区ボイント 2 (IIb 層上部)	9,000	0	4,500	33,100	0	0	0	0	1,500	1,500	12,000		
27		D1区ボイント 1 (IIb 層上部)	5,700	0	0	14,200	0	0	0	0	0	1,400	2,800		
28		IIb 層 (IIb 層上部)	5,200	1,300	1,200	24,800	1,300	0	0	0	1,300	3,900	9,100		
29	D1区 SD83	IV 層 (IIb 層上部 + IIb 層)	6,800	0	1,400	23,100	0	0	2,700	0	0	1,400	4,100		
30	D1区基本土層	II a 層	178,200	4,200	1,400	16,700	0	0	2,800	1,400	5,600	2,800	20,900		
31		II b 層	18,600	1,300	1,200	17,300	0	0	2,700	2,700	1,300	2,700	4,000		
32		IIIb 層上部	14,900	1,500	1,500	17,900	0	0	0	0	0	0	4,500		
33		IIIb 層下部	15,800	2,900	0	20,100	0	0	1,400	0	0	1,400	7,200		
33-2		IIIc 層	6,200	3,100	0	26,300	0	0	1,500	0	0	0	3,9,300		
34			2,200	0	0	22,00	17,600	0	0	4,400	0	0	4,400	2,200	

第3表 試料 1g 当たりのプラント・オパール個数



第15図 プラント・オパール分布図1



第16図 プラント・オバル分布図2

部試料より上位で得られている。

イネ以外について、最も多く検出されているのはクマザサ属型で、傾向としては下部で多くイネが多産する頃より急減している。その他、ネザサ節型、ヨシ属、シバ属、キビ族、ウシクサ族などが検出されているが個数的には少なく、イネが検出される層準より得られる傾向がみられる。

D1区(第15図 試料24～34) 全試料よりイネのプラント・オバルが検出されている。個数的には基本土層の最上部試料No.30では約180,000個と非常に多くが得られ、反対に最下部試料No.34では2,200個と少なく、遺構試料では5,000個以上を示している。

イネ以外ではやはりクマザサ属型が最も多く、基本土層では上部に向かいゆるやかに減少する傾向が認められる。また、シバ属とキビ族が上部試料のみで検出され、ヨシ属、ウシクサ族は多くの試料より得られている。遺構試料でウシクサ族は全試料より検出され、ネザサ節型、ヨシ属、キビ族は半数の試料において若干観察された。

D2区(第16図 試料14～23) 検鏡の結果、基本土層のV層試料No.18を除く9試料よりイネのプラント・オバルが検出された。最も多く得られたのは基本土層の最上部No.14の約70,000個で、上部に向かい多くなる傾向が認められる。また、水田面試料のNo.19・20においても10,000個以上を示しているが、基本土層のNo.17や溝覆土のNo.21～23は約3,000個とかなり少なくなっている。

イネ以外ではクマザサ属型が多産しており、多くの試料で50,000個を越え、No.19では約130,000個に達している。また、基本土層では下部で多く上部に向かい急減する傾向がみられる。この基本土層でウシクサ族はピークを作るように増加・減少しており、ネザサ節型はNo.17でやや多く検出されているが、他は1,500個前後と少ない。その他、ヨシ属、シバ属、キビ族などが検出され、シバ属、キビ族は上部試料のみより産出している。

稲作について

上記したように、ほとんどの試料よりイネのプラント・オバルが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オバルが試料1g当り5,000個

以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている[藤原 1984]。こうしたことから、稻作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。小峯遺跡の水田面と考えられている遺構面試料No.19・20・24・25では10,000個以上検出されており、水田稻作を支持する結果を示している。また、基本土層においてはⅢb 層より上位の試料で6,000個以上を示しており、稻作が行われていた可能性が高いと判断される。なお、地山(Ⅳ層)と考えられているNo.17からも約3,000個のイネのプラント・オパールが検出されているが、おそらく土壤生物(ミミズ?など)や植物の根(赤褐色酸化鉄の集積)などの擾乱により上位Ⅲb 水田層から混入したものと考える。また、Ⅲc 層(No.34)においても約2,000個のイネのプラント・オパールが検出されているが、本層は沢の堆積物と考えられており、イネのプラント・オパールは周辺水田域よりもたらされたのであろう。これについては溝覆土試料No.21~23・28・29も同様である。

以上のように、今回行ったプラント・オパール分析から基本土層においては発掘調査から推察されているⅢb 層における水田稻作についてそれを支持する結果が得られた。また、水田遺構面試料においても稻作を支持する結果が得られ、溝試料においては溝周辺における稻作が予想された。

2 花 粉 分 析

試料と分析方法

花粉分析はC2区地点の6試料(No.1~3・3-2・4・4-2), D1区基本土層地点の6試料(No.30~33・33-2・34)とNo.27, D2区SD40のNo.23の計14試料について行った。

試料(湿重約3~5g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え達心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

分析結果

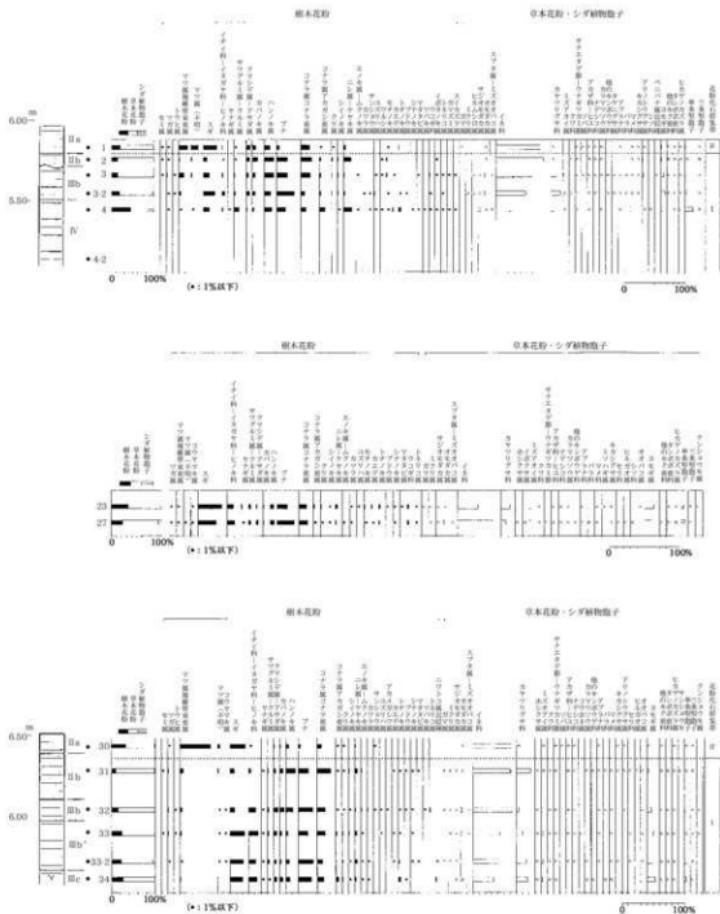
検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉48、草本花粉40、形態分類を含むシダ植物胞子4、藻類2の総計94である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第4表に、分布を第17図に示した。なお、樹木花粉は樹木花粉総数を基数として、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示した。また、表および図においてハイフンド結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

C2区(試料1~3・3-2・4・4-2):樹木花粉の産出傾向から下位より花粉化石群集帯I, IIを設定した。花粉帯Iはブナの最優占で特徴づけられるが、出現率は20%前後とそれほど高くはない。次いでハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、スギなどが10%前後を示している。草本類ではイネが最も多く、上部に向かい急増している。続くカヤツリグサ科はピークを作るように増加・減少しており、ヨモギ属も同様の傾向が認められる。その他、ソバ属やベニバナ属近似種がNo.3より1個体検出されている。また、水生植物(抽水植物)のサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属など多くの試料より

得られている。

花粉帯IIはマツ属とスギの増加で特徴づけられ、マツ属はマツ属複雑管束亞属とマツ属不明を合わせると20%を越える。その他、コナラ亜属やハンノキ属はやや減少して10%前後を示し、ブナは大きく出現率を下げている。草本類は依然としてイネ科が多産しており、その他はいずれも低率出現となっている。そのなかでソバ属や抽水植物のガマ属やオモダカ属が若干検出されている。

遺構試料（試料23・27）：C2区花粉帯Iとほぼ同様の傾向を示しており、スギが30%前後と最も多く、



第17図 花粉化石分布図

和名	学名	1	2	3	3-2	4	4-2	23	27	30	31	32	33	34
樹木														
モミ属	Abies	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツゲ属	Tsuga	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
トウヒ属	Picea	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カラマツ属	Larix	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マツ属単子葉被植物	Pinus	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マツ属(複数)	Pinus (Diplostachys)	22	3	18	6	—	2	—	—	—	169	12	—	—
マツ属(不確)	Pinus (Unknown)	27	3	9	—	—	—	—	—	2	14	4	1	1
コウヤマツ属	Sciadopitys	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
スギ科イヌガヤ科ヒノキ科	Cryptomeria japonica D. Don	33	8	21	40	20	—	63	83	85	16	18	44	42
サシナ属	T. C.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
セナモ属	Salix	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サリダ属(ミズタマスミレ属)	Mystroxylon	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クワジデ属・アヤメ属	Pontederia - Sagittaria	10	8	8	12	3	—	4	8	4	7	15	10	8
ハシバミ属	Crocosmia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カバハシ属	Alstroemeria	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハーバリウム	Alstroemeria	15	23	34	21	24	—	11	14	15	33	25	7	12
ブナ	Fagus crenata Blume	7	27	39	61	30	—	28	49	9	36	51	31	49
コナラ属コララ属	Quercus subgen. Legiolobularis	22	27	34	13	17	—	32	25	23	49	29	19	23
コナラ属コガシア属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クワジキ属	Casuarina	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シイノキ属	Cinnamomum	—	—	3	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—
ニニニ属・ヤマモモ属	Canarium - Zelkovia	6	18	8	4	28	—	—	7	3	5	9	8	9
エマフジノキ属	Cellistochloa	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カツラ属	Ceratopeltidea	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウツク属	Liquidambar	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツバキ属	Metasequoia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キハダ属	Phellodendron	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ユズハ属	Daphniphyllum	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アカガシワカツク属	Mitchella	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウツク属	Rhus	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モチノキ属	Retzia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ニシキギ属	Celastrea	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ホトトギス属	Aeonium	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
トトロ属	Aeonium	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ブドウ属	Vitis	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ブドウ属	Tilia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マツタケ属	Leptosphaeria	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツバメノキ属	Camellia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウコギ科	Araliaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツブツブ属	Elaeocarpus	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハイノキ属	Endlicheria	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
エゴノキ属	Excoecaria	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イボガノキ属	Liquiritia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
トトロ属	Litsea	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヒメツブツブ属	Prunus	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ガマズミ属	Ulmus	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
スズラン属	Lilium	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
日本														
ガマ属	Typus	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—
ミクニヒメノキ属	Spiraeoideae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヒメクシノキ属	Fagopyrum	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サジノミノガキ属	Alnus	—	—	—	1	7	16	—	4	5	—	2	2	2
オモリカガキ属	Sophora	1	1	23	15	2	—	4	10	1	22	34	11	5
スルガノミノヒキオガキ属	Grewia	568	807	846	546	111	—	179	466	636	1429	876	367	361
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	6	151	176	24	—	82	64	10	541	52	85	146
ホシツリソウ属	Ericaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	2
イチヨウノキ属	Psychotria	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミズイモ属	Monnieria	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クリ科	Monocots	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シラカシ属	Monstera	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ガマダラ属	Polygonum sect. Persicaria-Echinocephalum	1	3	—	1	2	—	—	10	18	2	3	18	23
ゾリノイ属	Fagopyrum	—	—	—	—	—	—	—	1	4	—	8	8	3
アカカツキ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アチャカ属	Carex	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
コウナツ属	Nymania	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カハラツクワ属	Thalictrum	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
他のシラカシ属	other Rosaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カツラ属	Hedera	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アブクマナ属	Circularia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モクレンノグマ属	Dioscorea	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
バラ科	Leguminosae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミヅリギ属	Loganiaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キラクガ属	Rubia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モクシノミノクマツリ属	Lindernia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アリトウクサ属	Holarrhena	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
セリ科	Umbelliferae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヒメオオクサ属	Caryopteris	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シラカシ属	Lathyrus	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オオバコ属	Plantago	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アカミツ・セミムグラ属	Bubbia - Gollum	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツバメノミノクマツ属	Forsythia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツツジノミノクマツ属	Adonisphaera - Campanula cf. Carruthersii	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヨモギ属	Artemisia	12	13	79	88	14	—	78	80	10	49	102	88	79
他のツバメノミノクマツ属	other Thlaspiaceae	4	2	5	3	1	—	8	6	2	18	2	9	2
ラン科	Ligulariaceae	3	10	4	5	1	—	4	3	17	4	3	2	2
シダ植物	Lycopodiophytina	5	4	2	5	5	—	1	4	2	4	2	3	2
サンショウモ属	Salvinia natans	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
单子叶植物	Monocot spore	8	9	24	35	57	—	27	58	3	12	21	36	42
二被子植物	Trilete spore	4	1	3	2	4	—	5	3	1	3	6	1	5
不明花粉	Unknown pollen	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第4表 生出花粉化石一覧表

T. C. 12 Taxa/Genus/Cohortes/Capitulae

次いでブナとなっている。その他、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）やコナラ亜属が10%前後の出現率を示している。草本類ではイネ科が最も多く、No.23(D2区SD40覆土)では30%弱、No.27(D1区水田面)では50%弱を示している。次いでカヤツリグサ科とヨモギ属が10%検出されている。また、水生植物ではミズアオイ属が1%を越えて得られており、その他ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属などが両試料より産出している。

D2区基本土層（試料30～33・33.2・34）：本地点においても樹木花粉の産出傾向から下位より花粉化石群集帯I、IIを設定した。花粉帶Iはスギとブナの多産で特徴づけられるが、スギは上部で急減している。代わってハンノキ属が増加しており、コナラ亜属も同様の傾向がみられる。草本類ではやはりイネ科が最も多く、上部に向かい増加している。次いでカヤツリグサ科が多く、傾向は上部に向かい減少し、I帯最上部で再び出現率を上げている。ヨモギ属は最下部で10%を越えるが上部に向かい減少し、I帯最上部では1%をわずかに越える程度である。その他、水生植物のオモダカ属やミズアオイ属がほぼ連続して1%を越える出現率を示している。

花粉帶IIはマツ属複雑管束亞属の最優占で特徴づけられ、スギも再び出現率を上げている。一方、I帯で増加傾向がみられたハンノキ属やコナラ亜属は減少し、ブナも同様である。草本類はイネ科の圧倒的な出現が示され、他は1%に達していない。そのなかでソバ属や水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属などが若干検出されている。

3 小峯遺跡の植生変遷

上記した花粉化石群集帯を基に小峯遺跡の植生変遷について記す。

花粉帶IはIIIbすなわち平安期からIIbの現代に近い時代にわたる期間と推察される。この時期の遺跡周辺丘陵・山地部ではスギやヒノキ類の温帯性針葉樹林が成立していた。さらにブナやコナラ亜属を主体にクマシテ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹林も広くみられた。また、コナラ属アカガシ亜属やシイノキ属も低率ながら連続して検出されており、一部にこれらの常緑広葉樹類も生育していたとみられる。その後、スギやヒノキ類に減少傾向がみられ、分布域の縮小が推測される。新潟県上越市に所在する一之口遺跡東地区より検出された平安時代の木製品の多くはスギであった〔新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994〕。このように平安時代においてはスギが有用材として多く利用され、スギ林は大きな影響をうけたことが予想される。ここ小峯遺跡でも同じことが考えられ、スギ林は縮少し、ヒノキ類も同様と思われる。

プラント・オパール分析ではクマザサ属型が多く検出されており、このクマザサ属型のササ類（チスマザサ、チマキザサ、ミヤコザサなど）については、主に林下での生育が予想され、遺跡周辺に成立していたであろう落葉広葉樹林の下草の存在で分布を広げていたと推測される。ネザサ節型のササ類（ゴキダケ、ケネザサ（ミヤコネザサ）など）については日のあたる開けたところでの生育が考えられ、先に示した水田稻作地周辺や上記森林の林縁部に生育していたと推測される。加えてウシクサ族（ススキ、チガヤなど）やシバ属（ノシバなど）も同様であり、ネザサ節型のササ類とともに草地の景観をみせていたと思われる。

低地部においては水田稻作が行われていたと考えられ、ヨシやツルヨシなどのヨシ属については水田稻作地やその周辺の水路などに生育していたと予想される。また、水生植物のサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などは現在の水田に普通に見られる水田雜草（サジオモダカ、オモダカ、コナギなど）を含む分

類群であり、これらの植物も水田を中心多く見られたであろう。さらにキビ族については、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明であるが、上記したように水田稻作地が予想されていることからここではエノコログサやタイヌビエなどの水田雑草類に由来するキビ族と推察される。その他、カヤツリグサ科、ヨモギ属、シバ属なども水田内や畔に雑草類として生育していた。

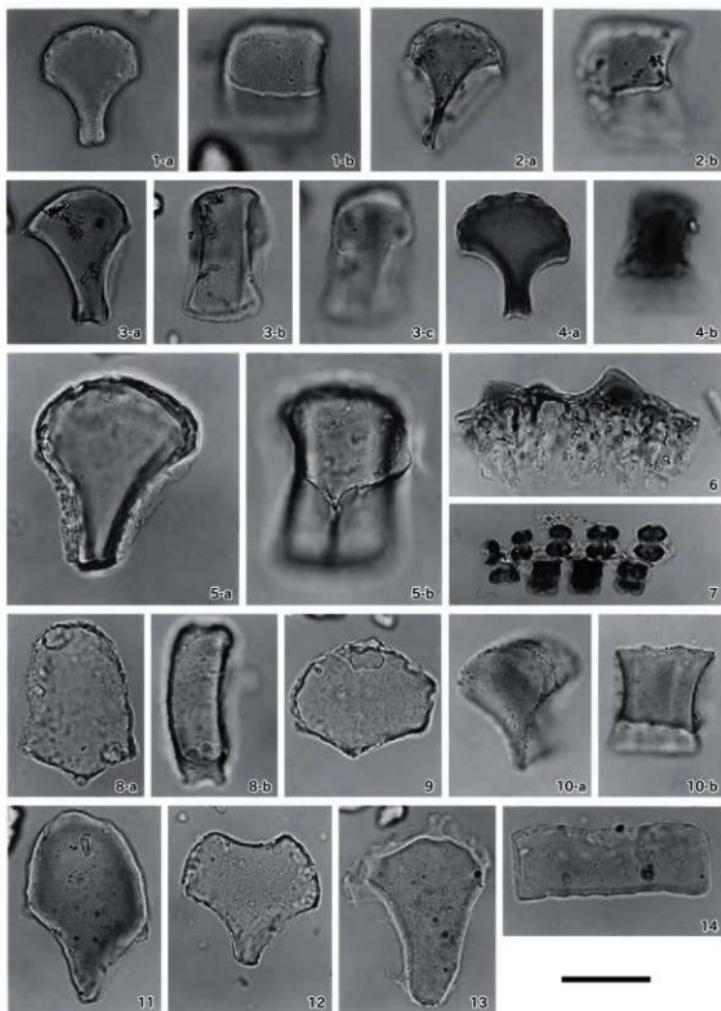
この低地部の樹木類ではハンノキ属の存在が考えられる。花粉分析においては上部に向かい増加する傾向が認められ、湿地林を形成するハンノキ属は水田稻作の広がりとともに増加したことが推察される。このハンノキ属、すなわちハンノキはトネリコ（トネリコ属）とともに田の畔などに残されたり植栽され、かつては稻架として利用された樹種である。このようにハンノキ属は水路周辺や畔などに生育し、一時的に低地部で目立つ存在となつた。

花粉帶IIはIIa層、すなわち現代に近い時代と推察される。この時期になると遺跡周辺山地・丘陵部ではヒノキ類や落葉広葉樹類（ブナ、コナラ亜属など）が減少した。これは人間による森林への干渉が要因と考えられ、本地域の発展にともない木材利用が増大して先の森林は破壊されたものと思われる。代わってその跡地にマツ属複複管束亞属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が進入・増加して二次林を形成した。また、スギの増加については植林により林分を広げたものと推察される。

一方、低地部では水田稻作が依然として行われていたが、稻作地の整備などで水田雑草類やハンノキ属は少なくなつていった。また、一部でソバの栽培も行われていたとみられる。

引用文献

- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 p15-29
- 藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」『考古学ジャーナル』No.227 p2-7 ニューサイエンス社
- 藤原宏志、佐々木彰 1978 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—」『考古学と自然科学』11 p9-20 日本国文化財学会
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区（本文編）』 290p



1～5: イネ (a: 断面, b・c: 側面 1: No.3 2: No.19 3: No.25 4: No.26 5: No.33-2),
6: イネ類断面 (No.3), 7: イネ型茎細胞柱體列 (No.19),
8・9: ツクマザ属型 (a: 断面, b: 側面 8: No.19 9: No.26),
10: ナサ属型 (a: 断面, b: 側面 No.30), 11: ヨシ属 (断面 No.23),
12: シバ属 (断面 No.31), 13: ウツクサ属 (断面 No.3), 14: キビ属 (側面 No.25)

第18図 小峯遺跡のプラント・オーバール (スケールバー: 30 μm)

第VII章 ま と め

1 土器・陶磁器

変 遷

小峯遺跡では古代から中世の土器が最も多く出土した。これらの土器・陶磁器は包含層から出土したもののが大半であるが、既存の研究〔伊藤 2001、上田 1982、小野 1982、春日 2015、小池 1999、坂井 1984・1989、品田 1999ab・2012、鶴巻 1999、藤澤 2008、水澤 2005、山本 2000・2010、吉岡 1994など〕を参考にして編年的な位置付けがある程度可能である。出土土器の編年的位置づけを確認し、造構の変遷を検討する際の基礎とする。

古代から中世の土器・陶磁器を 4 期 6 小期に区分した(第 19 図)。1a 期から 3 期は箕輪遺跡 II の編年〔春日 2015〕をもとに設定したもので、1a 期が箕輪遺跡の 3 期、1b 期が箕輪遺跡の 4 期(4 期古・新含む)、2 期が箕輪遺跡の 5 期(5 期古・新含む)、3 期が箕輪遺跡の 6 期に対応する。暦年代では、1a 期が 9 世紀前葉、1b 期が 9 世紀後葉～末、2 期が 10 世紀～11 世紀前葉、3 期が 11 世紀後葉～12 世紀と考えている。4 期は 13 世紀～16 世紀中葉頃で、2 期に細分した。山本信夫の輸入陶磁による時期区分との対応は 4a 期が D～G 期、4b 期は H～J 期と考えている。土器・陶磁器の変遷をこのように考えるならば、10 世紀後半～11 世紀と 12 世紀後半～13 世紀の資料がやや希薄な印象があるが、9 世紀前葉から 16 世紀中葉頃まで、大きな空白期間がなく継続していた可能性が高い。

箕輪編年の補足

今回の報告では、箕輪遺跡 II で示した古代土器の編年案〔春日 2015〕を補足する成果が 2 点確認できた。1 点目は SK2 出土土器である。SK2 からは胎土 C1 群の須恵器無台椀(3)と胎土 B 群の須恵器無台杯(4)が出土している。4 は箕輪編年では 4 期(新)に位置づけられる須恵器と考えるが、箕輪遺跡 II では、4 期(新)の B 群以外の須恵器食膳具の共伴事例が明確でなかった。3 は箕輪編年 4 期(古)の胎土 C1・C2 群の須恵器無台杯と比較すると器高が高く底径が小さく、形態変化が確認できる。

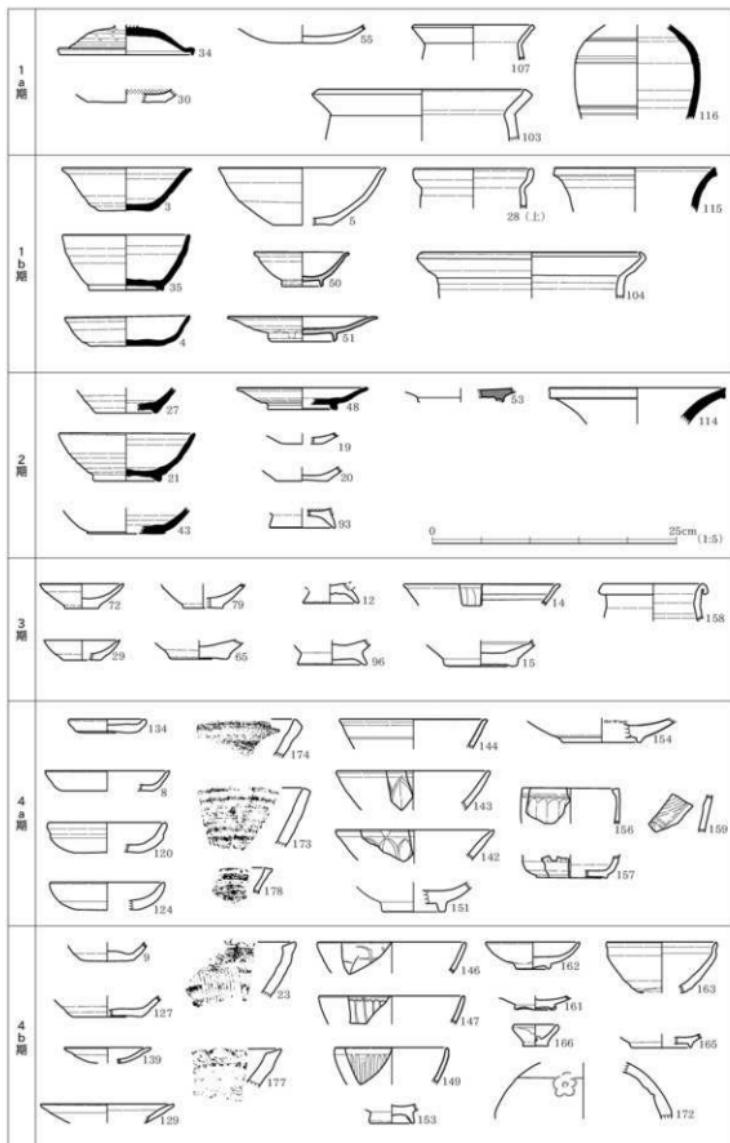
2 点目は SD5 出土土器である。SD5 からは土師器無台椀(19・20)と胎土 B 群の須恵器有台椀(21)が出土している。19・20 は底部破片のため断定はできないが、底径や器壁の厚さなどから考え、5 期(古)の可能性が最も高い。5 期(古)は箕輪遺跡 II では、須恵器食膳具の共伴が明確でなかったが、今回の小峯遺跡の成果により、21 のような胎土 B 群の施釉陶器模倣の須恵器が伴うことが確認できた。このことは、箕輪編年と他地域の土器編年との対応関係を考えるうえでも重要である。

2 遺 構

変 遷

造構の変遷は土器・陶磁器の変遷と一致する 4 期に分けて把握できる(第 20・21 図)。

1 期:A 区は SD10-1～6、SB39、SK1・2 など、B 区は SD76～80、SE46、SK42・50、D1 区は SK88、SE89 などが当期の造構になるものと考えている。A 区では小規模な掘立柱建物(SB39)が土坑



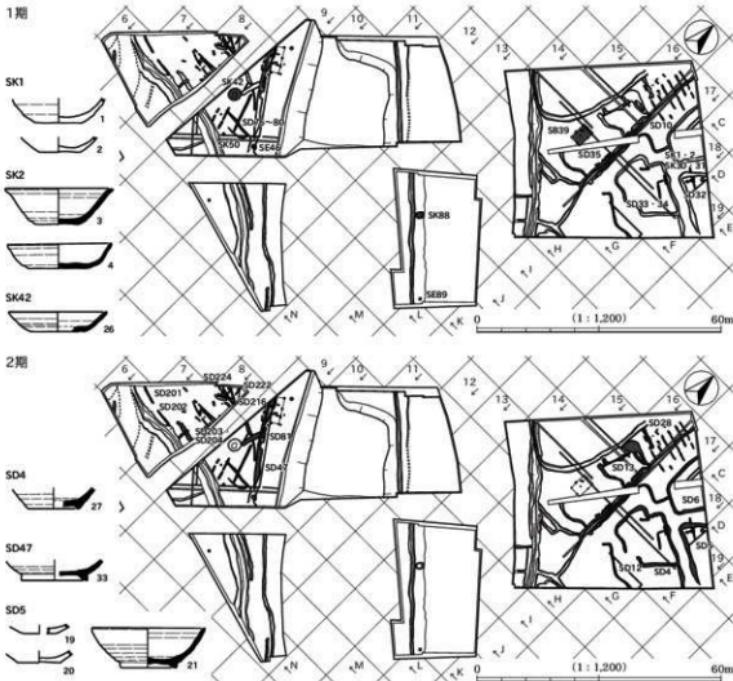
第19図 土器・陶磁器の変遷

(SK1・2)・畑作溝 (SD10-1 ~ 6) を伴っている。B 区でも畑作溝 (SD76 ~ 80) に近接して土坑・井戸があり、近隣に掘立柱建物が存在した可能性が高い。

2 期 : A 区では SD4・5 から 2 期の遺物が出土しており、これらと並行する複雑な形状の溝が当期の遺構と考える。B 区では SD47 から 2 期の須恵器有台椀が出土している。C1 区では 4 期の遺構である SD40 に切られる SD201・202・203 などが 2 期の遺構の可能性がある。畑作溝・土坑・井戸・建物跡は確認できなくなり、溝によって区画された耕地が成立した可能性が高い。A 区では微地形に制約され耕地の形状は複雑な形となったものと推測する。

3 期 : A 区では SD9・7・11・36、畦畔 19、B・D1 区では SD83・44、C2 区では SD200 などが当期の遺構の可能性が高い。A 区では複雑な形状の溝によって区画された耕地が確認できなくなり、微高地と低地の境に大規模な水路 (SD9) が掘削され、これに連結する直線的な溝や畦畔によって区画された耕地が成立した可能性が高い。B・D1 区では SD9 に近似した規模で平行する水路 (SD83)、C2 区でも並行する溝 (SD200) が確認できる。

4 期 : A 区では SD8、B・C1・D2 区では SB86、SE48、SD40・41・100・101・208 ~ 212、畦



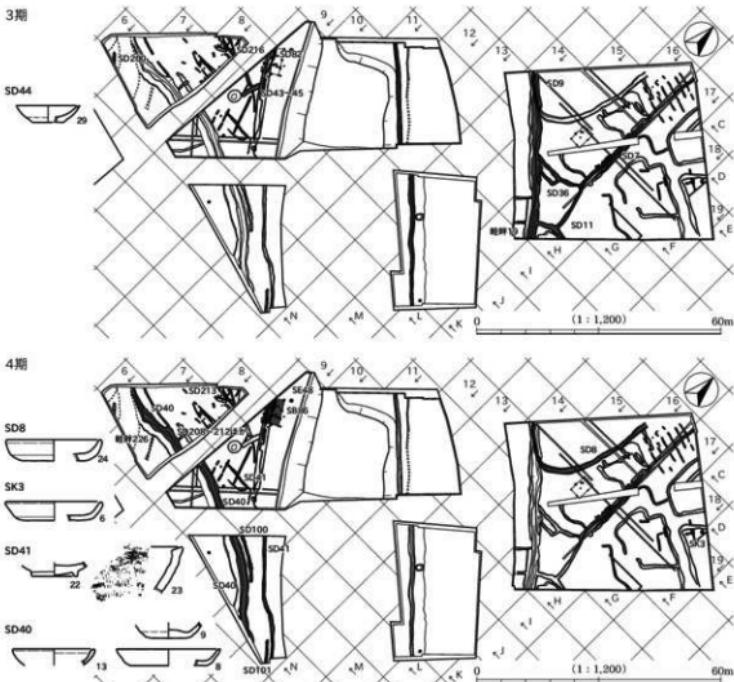
第 20 図 遺構の変遷 1

畔 226 などが当期の遺構と考える。井戸・畑作溝 (SD208 ~ 212) を伴う掘立柱建物 (SB86) があり、微高地と低地の境に 3 期よりも大規模な水路 (SD40) が掘削され、低地部は水田として利用された可能性が高い。

遺跡の性格

本遺跡で検出した 1 期の掘立柱建物 SB39 は平面積 20m² 弱、4 期の掘立柱建物 SB83 は 30m² 弱の小規模な建物である。しかし出土土器・陶磁器には、1a 期は須恵器水瓶 (116)、1b 期は灰釉陶器小楕・皿 (50・51)、2 期は綠釉陶器皿 (53)、3 期は白磁四耳壺 (158)、4a 期は青磁盤・香炉 (154・156・157)、青白磁梅瓶 (159)、4b 期は瀬戸焼・美濃焼瓶子・燭台 (172・166) など各時期に優品がみられる。土器・陶磁器ではないが石帶の巡方 (194) は 1a 期～2 期のいずれかの時期のものになるであろう。また、遺跡が長期間存続した可能性が高いことを考えると、貧しく不安定な村落という評価は適当ではなく、近接して有力な集落が存在したか有力な在地勢力（が所在する集落）の出村的な性格が考慮されてもよい。

在地勢力の候補としては、1～3 期は箕輪遺跡、4 期は毛利安田氏や、毛利安田氏と土地争論を起こすこともあった寺院勢力の不退寺（普林寺）などが想定できる。



第 21 図 遺構の変遷 2

引用・参考文献

- 飯坂盛泰 2014 「宝田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成25年度』 公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀ほか 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第241集 山崎遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀ほか 2014 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第246集 刀野沢遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤啓雄ほか 2001 「VI-2宮ノ下遺跡群における古代土器の様相」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集 宮ノ下遺跡群』 柏崎市教育委員会
- 伊藤啓雄ほか 2013 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第72集 音無瀬II』 柏崎市教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 大橋康二 1989 「肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社
- 大野隆一朗・徳間正一ほか 1990 「大地」『柏崎市史』上巻 新潟県柏崎市史編纂委員会
- 荻野正博 1986 「越後國中世莊園の成立」『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 岡本都栄ほか 2008 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第53集 坂田遺跡群II』 柏崎市教育委員会
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究会』No.2
- 柏崎市史編さん委員会 1982 『柏崎市史資料集』考古編2
- 柏崎市史編さん委員会 1987 『柏崎市史資料集』考古編1
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係についてー「今池編年」、「下ノ西編年」・山三賀編年」の検討を中心にー」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 春日真実 2010 「真規五年の地震痕跡再考－百瀬正恒氏からの批判に対する反論－」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 春日真実 2015 「第VII章 まとめ I 土器・陶器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第254集 瓢輪遺跡II』 新潟県教育委員会・公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・坂上有紀ほか 2015 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第254集 瓢輪遺跡II』 新潟県教育委員会・公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 「第V章 1 造構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鐘ヶ江宏之 1993 「国制の成立－令制国・七道の形成過程－」『日本律令制論集』上巻 古川弘文館
- 金子拓男 1990 「第6章 第3節 三島郡の分立、第5節 交通と交通路、第6節 延喜式内神社」『柏崎市史』上巻 新潟県柏崎市史編さん委員会
- 金子拓男ほか 1983 『西山町文化財調査報告書第1集 新潟県刈羽郡西山町 高塩B遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
- 小池邦明 1999 「第5章 中世 第2節 陶磁器の組成と変遷 第1項 中世前期」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編 高志書院
- 国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所・公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社吉田建設 2014 『柏崎市丘江遺跡現地説明会資料』
- 国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所・公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・藤村ヒューム管株式会社 2014 『柏崎市山崎遺跡現地説明会資料』
- 斎藤 亨 1995 『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第2集 枯木A遺跡』 刈羽村教育委員会
- 斎藤 亨 1999 『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第4集 払川遺跡』 刈羽村教育委員会

- 斎藤 亨^{はや} 1998 「刈羽村埋蔵文化財調査報告書第3集 払川・山ノ脇遺跡」 刈羽村教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『今池遺跡・下新田遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 「第VII章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀日遺跡』 新潟県教育委員会
- 品田高志 1987 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書第8 帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書」 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1991 「越後の中世土師器」『新潟考古学講話会会報』第8号 新潟考古学講話会
- 品田高志 1992 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第17 行塚遺跡』 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1996 『田塚山の中世仏道と墳墓』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集 田塚山遺跡群 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1999a 「第5章 第3節 第1項 中世土師器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 品田高志 1999b 「越後における中世後期の土師器Ⅰ -京都系土師器第2波の流入と展開-」『中世土師器の基礎研究』 XIV 日本中世土器研究会
- 品田高志 2003 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第42集 下川原』 柏崎市教育委員会
- 品田高志 2012 「V-1 音無瀬遺跡における古代土器の様相」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集 音無瀬Ⅰ』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1985a 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4 吉井遺跡群』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1985b 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 刈羽大平・小丸山』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1990 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13 吉井遺跡群Ⅱ』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1996 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集 田塚山遺跡群』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1997 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26集 前掛リ』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1999 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集 角田』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 2000 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集 横山東遺跡群Ⅰ』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 2008 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第52集 江ノ下』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 2011 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第63集 剣野』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 2012 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集 音無瀬Ⅰ』 柏崎市教育委員会
- 鈴木郁夫^{はつか} 1988 『土地分類基本調査 向野町』 新潟県
- 鈴木郁夫^{はつか} 1989 『土地分類基本調査 柏崎・出雲崎』 新潟県
- 高橋一樹 1997 「越後国頸城地域の御家人ー「六条八幡宮造営注文」をてがかりに」『上越市史研究』 新潟県上越市
- 高橋 保^{ほか} 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集 箕輪遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鶴巻康志^{ほか} 1999 「第5章 中世 第2節 B 中世後期」『新潟県の考古学』 高志書院
- 田海義正^{ほか} 1982 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第30 尾内野遺跡 芦ヶ崎砲跡』 新潟県教育委員会
- 永井久美男 1994 「中世の出土銭-出土銭の調査と分類-」 兵庫県埋蔵銭調査会
- 長沢展生^{ほか} 2007 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第50集 坂田遺跡群Ⅰ』 柏崎市教育委員会
- 中島義人 2001 『西山町文化財調査報告書第5集 新潟県刈羽郡西山町 岩田遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
- 中島義人 2001 『西山町文化財調査報告書第6集 新潟県刈羽郡西山町 井ノ町遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
- 中島義人 2003 『西山町文化財調査報告書第7集 新潟県刈羽郡西山町 宮ノ前遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
- 中島義人 2012 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第67集 開町』 柏崎市教育委員会
- 中島義人^{ほか} 2009 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第56集 坂田』 柏崎市教育委員会
- 中島義人^{ほか} 2010 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第58集 坂田遺跡群Ⅲ』 柏崎市教育委員会

- 中野 純^{ひで} 2001 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集 宮ノ下遺跡群』 柏崎市教育委員会
- 中野 純・平歌 靖^{ひで} 2006 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第47集 与三』 柏崎市教育委員会
- 中野 純^{ひで} 2009 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第48集 角田II』 柏崎市教育委員会
- 新潟県 1982 『新潟県史』資料編3 中世一 文書編I
- 新潟県 1983 『新潟県史』資料編4 中世二 文書編II
- 新潟県 1984 『新潟県史』資料編5 中世三 文書編III
- 花ヶ前盛明 2002 『越佐の神社一式内社六十三』 新潟日報事業社
- 平歌 靖^{ひで} 1998 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第28集 山王前』 柏崎市教育委員会
- 平歌 靖^{ひで} 2010 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第59集 軽井川南遺跡群I』 柏崎市教育委員会
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史編四』 愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 藤巻正信 1989 『土器片円盤について』『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 藤巻正信^{ひで} 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第27集 西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県教育委員会
- 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』第16号 新潟考古学会
- 森田 勉 1982 『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 矢田俊文 1999 『戦国期越後の守護と守護代』『中世の越後と佐渡』 高志書院
- 山本信夫 2000 『大宰府采訪跡XV-陶磁器分類編』 太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会
- 山本信夫 2010 『貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題』『貿易陶磁研究』30 日本貿易陶磁研究会
- 山本 球^{ひか} 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集 下沖北遺跡I』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良^{ひか} 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集 東原町遺跡・下沖北遺跡II』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 横山勝栄^{ひか} 1987 『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』 新潟県教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 吉岡康暢 2003 『珠洲焼概論』『珠洲焼概論』平成15年度埋蔵文化財専門職員実務研修資料集 新潟県教育庁文化行政課
- 吉村 晶^{ひか} 2005 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第45集 吉井水上遺跡群』 柏崎市教育委員会
- 米沢 康 1980 『大宝二年の越中国四部分別をめぐって』『信濃』第32卷6号 信濃史学会

小峯遺跡遺構觀察表（1）

遺構名	層	断面形	グリッド	高幅・長さ (cm)	判別・幅 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合いなど	出土土器・陶磁器	備考
SK1	レンジ状	凸折状	188S	43	27	10	SD32より新しい	上層部無白陶・長茎×縫・小片	
SK2	レンジ状	凸折状	188S	65	50	10	SD32より新しい	底底部無白陶・無白陶・土層部無白陶・長茎×縫・有 ×無白陶	
SK3	レンジ状	弧状	18P25・19P21	93	82	10		上層部底T1側・上層部小片	
SD4	単層	弧状	17~19EF	~	80	15		底底部有白陶・無白陶・土層部無白陶・小茎・長茎× 縫・黑色土質の有白陶・灰陶陶器	
SD5	単層	弧状	18DR、19E	~	95	9	SD32より新しい	底底部無白陶・有白陶・土層部無白陶・有×無白陶・ 底凸・節理×無白陶	
SD6	単層	弧状	16DR、17CDEF、18DR	~	90	8	SD7より古い	上層部無白陶・長茎×縫・小片・黑色上層部白陶・底 部無白陶	
SD7	単層	半円状	16CDDEF、17CDEPGH	~	80	40	SD6, SD10より1~2cmより新 しい	上層部長茎×縫・小片	
SD8	単層	半円状	14F、15EF、16DE	~	150	24	SD9・28より新しい	上層部界隈T1側・上層部無白陶・長茎×縫・小片・ 底底部無白陶	
SD9	単層	半円状	14F・15G、16GH、17H	~	250	100	SD10より古い	底底部無白陶	
SD10-1	単層	弧状	16~17C	~	30	5	SD7より古い		想作道
SD10-2	単層	弧状	16~17C	~	30	5	SD7より古い		想作道
SD10-3	単層	弧状	16C~17CD	~	40	7	SD7より古い		想作道
SD10-4	単層	弧状	16D8、17D8	~	30	6	SD7より古い		想作道
SD10-5	単層	弧状	16D10、17D6	~	30	6	SD7より古い		想作道
SD10-6	単層	弧状	16~17D	~	40	5	SD7より古い		想作道
SD11	単層	弧状	16~17E	~	120	20			
SD12	単層	凸折状	17GH、18G	~	50	12			
SD13	単層	弧状	16E8	~	250	5		上層部小片・小片	
柱群14	~	~	16~17H	~	150	~			SD11に伴う
P15	単層	凸折状	16D3	20	20	10			
P16	レンジ状	U字状	16D4	60	45	30			
P17	単層	U字状	16D4	15	15	10			
P18	~	~	14F、15FG、16GH	~	60	~			SD9に伴う
P19	~	~	16H18~19・23	~	90	~			
P20	単層	凸折状	15F10	40	40	25		底底部無白陶	SB39
P21	単層	凸折状	15F15	25	20	15			SB39
P22	単層	凸折状	16F1	35	35	20		底底部無白陶	SB39
P23	単層	凸折状	16F1	30	30	15			
P24	単層	凸折状	16F5	20	20	15			
P25	単層	凸折状	16F12	30	25	20			SB39
P26	単層	U字状	16F2	25	20	20			SB39
P27	単層	凸折状	16F1	15	15	15			SB39
SD28	単層	弧状	16D2~7~8~9~10	~	90	5	SD8より古い		
SD29	単層	弧状	17CD	~	100	7			
SK30	単層	弧状	18S5	72	45	5			
SK31	単層	弧状	18S4~5~9~10	64	38	5			
SD32	単層	半円状	18D8	550	28	5	SK3~2, SD32より古い		
SD33	単層	半円状	18E8	~	34	12			
SD34	単層	半円状	18E12~13~18	230	30	12			
SD35	単層	弧状	16F9~10~15	~	30	4			
SD36	単層	弧状	15~16G	~	80	15			
SD40	レンジ状	半円状	6~9L~10LM~11M~ 12MN~13N	~	270	75	SD78より新しい	上層部上端部・中段・青磁瓶・白繩柄・素面長筒 瓶・瓶・上層部内側・底底部無白陶・瓶・上層部無白 陶・底底部無白陶・有白陶・灰陶陶器	
SD41	単層	弧状	9~10L~11LM~ 12M~13MN	~	35	7	SD75~79より新しい	青磁瓶・白繩柄・素面長筒瓶・瓶・上層部無白 陶・底底部無白陶・有白陶・灰陶陶器	
SK42	単層	弧状	9K12~13~17~18	320	300	8		底底部無白陶・有白陶・素面長筒瓶・瓶・上層部無白 陶・底底部無白陶・有白陶・灰陶陶器	
SD43	単層	弧状	9JK	540	120	9	SD76より新しい	底底部無白陶・瓶・上層部無白陶・小茎・長茎×縫・ 小片・黑色土質有白陶	
SD44	単層	弧状	9K9~10~15	~	30	7		上層部上端部内側・上層部小片	
SD45	単層	弧状	9K2~3	~	60	7	SD76より新しい	上層部上端部内側・上層部小片	
SE46	レンジ状	凸折状	10J4~9	110	90	130			
SD47	単層	弧状	9JK, 10K	~	110	8		底底部有白陶・無白陶・垂幕瓶・瓶・上層部無白陶・ 有白陶・長茎×縫・灰陶陶器	
SE48	ホモレンジ	U字状	9E23~24	70	68	90		底底部有白陶・無白陶・垂幕瓶・瓶・上層部無白陶・ 有白陶・長茎×縫・灰陶陶器	
柱群49	~	~	7~8L~9LM~10M~ 11MN~12~13N	~	180	~	SD40に伴う		
SK50	単層	半円状	9L15	70	40	15			
P52	単層	凸折状	9J3	35	30	16		上層部小茎	
P53	単層	湧出状	9J14	45	30	25		上層部無白陶・長茎×縫・小片	SB86
P54	単層	湧出状	9J8	30	27	25			SB86
P55	単層	湧出状	9J12	42	40	34		底底部無白陶・瓶・上層部無白陶・小茎・長茎×縫	SB86
P56	単層	凸折状	9J18	55	42	42			SB86
P57	単層	凸折状	9J8	20	17	17			
P58	単層	凸折状	9J8	21	19	13			
P59	単層	凸折状	9J8~9	22	20	11			
P60	単層	湧出状	9J9	30	26	28			
P61	単層	凸折状	9J3	25	20	25			
P62	単層	凸折状	9J3	27	22	15			

観察表

小峯遺跡遺構觀察表（2）

遺構名	層	断面形	グリッド	高幅・長さ (cm)	判斷・幅 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合いなど	出土土器・陶器類	備考
P63	単層	凸形状	9J2-3	45	32	33		土師器無白陶・長茎×窓・小片	S886
P64	単層	凸形状	9J23	42	35	40			S886
P65	単層	凸形状	9J19	21	20	15			
P66	単層	円内状	9J22	23	29	13			
P67	単層	凸形状	9J19	22	19	20		土師器無白陶・小片、黑色土器無白陶	
P68	単層	凹形状	9J7	65	45	40		圓底燒造陶・土師器有白陶・無白陶	
P69	単層	凸形状	9J15	22	24	24			S886
P70	単層	凸形状	9J15	27	22	27		土師器小片	S886
P71	単層	凸形状	9J4	35	32	26		土師器長×窓	S886
P72	単層	凸形状	9J9	20	18	13		土師器小片	
P73	単層	凸形状	9J9	19	17	9			
P74	単層	凸形状	9J9	20	18	12			
SD75	単層	板状	9K2-10L	1040	48	6	SD41より古い		想作済
SD76	単層	板状	9K2-7	—	—	20	3 SD43・45より古い		想作済
SD77	単層	板状	9K9-14	210	36	9			想作済
SD78	単層	板状	9K8-13	190	30	5	SD40より古い		想作済
SD79	単層	板状	9K23, 9K3-4-9	330	28	7	SD41より古い		想作済
SD80	単層	板状	9K2	120	32	6			想作済
SD81	単層	板状	9J19-24-25, 10K4-5	360	50	6			
SD82	単層	板状	9J	—	28	5			
SD83	レンズ状	台形状	11GH, 12H, 13L, 14L, 14D, 15M, 16K	—	72	30			
SK88	単層	板状	14J9-10-14-15	190	178	5			
SK89	レンズ状	U字型	16K21-22	65	52	60		土師器無白陶・小片	
SD100	単層	板状	11-12K	—	80	12		土師器土器底T型・直底形・土師器無白陶・長茎×窓・小片	
SD101	レンズ状	板状	13N7-12-13-19	—	55	9		土師器無白陶・小片	
SK105	単層	板状	10M25	58	49	20			
SD200	単層	板状	6L23, 6M4	295	58	9			
SD201	単層	板状	6L5-10, 8L6-7	460	39	6		土師器有×無白陶	
SD202	単層	板状	7L8-9-10	—	54	30	SD40より古い		
SD203	単層	板状	8L2-7-12	—	64	12	SD40より古い		
SD204	単層	板状	7J10, 8L1-2-3	—	100	9		土師器長×窓・小片	
SD205	単層	板状	8K23-24	—	74	10		土師器有×無白陶	
SD206	単層	板状	7K25, 8K37	—	22	5			
SD207	単層	板状	7K15-20, 8K16-17	400	24	5		土師器有×無白陶・小片	
SD208	単層	板状	8K17-18-19	—	18	2			
SD209	単層	板状	8K18-19	—	15	3			想作済
SD210	単層	板状	8K18-19	—	19	3			想作済
SD211	単層	板状	8K16-17	92	22	6		土師器小片、黑色上部有×無白陶	想作済
SD212	単層	板状	8K11-12-13-14	—	23	2		圓底燒造杯、土師器加白陶・長茎×窓	想作済
SD213	単層	板状	7K13	75	14	6			想作済
SD214	単層	板状	7K15, 8K11-12-13-14	—	25	3			想作済
SD215	単層	板状	8J22, 8K2	318	68	6	SD218より古い	圓底燒造・土師器無白陶・長茎×窓・小片	
SD216	単層	板状	8J21-22-23	310	130	10	SD217-218より古い	圓底燒造杯・盤、土師器無白陶・小片・長茎×窓・小片、灰陶輪胎陶器皿	
SD217	単層	板状	8J21-22-23-24	—	37	11	SD218より新しく SD219より古い	土師質土器面付・圓底燒造瓶	
SD218	単層	板状	8J21-22	—	15	7	SD215-216-217よ り新しい	土師器小片	
SD219	単層	板状	8K3-4	—	42	4		土師器小片	
SK220	単層	円内状	8J27	59	50	19		土師器長×窓・小片	
SD221	単層	板状	8J17-18-24	—	37	5		土師器長×窓・小片	
SD222	単層	板状	8J13-18	—	32	7		圓底燒造・土師器小窓・小片	
SN223	不明	不明	8J13-14-19	—	—	—		圓底燒造・土師器無白陶・長茎×窓・小片、黑色上部 有白陶	
SD224	単層	板状	8J21	—	17	7		土師器小片	
SD225	不明	不明	8K23	—	19	4			想作済
SK226	—	—	7J24, 7M5, 8M6-11	—	19	—			
SK-P1	単層	板状	8K3	15	15	3			
SK-P2	単層	板状	8K7	58	46	14			
SK-P3	単層	板状	8K7	50	42	12		土師器小片	
SK-P5	単層	板状	8K9	24	20	7			
SL-P6	不明	凸形状	8L13	20	17	20			
SL-P7	不明	凸形状	8L13	25	22	12			

小峯遺跡土器・陶磁器観察表(1)

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	遺構	部位	口径	底高	底經	底上	調整	回転 方向	備考
1	土師器	無柄杯		180°	5 - 10	SK1 SD15			6.0	黒・白色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	右		
2	土師器	無柄杯		180°	5	SK1			5.0	白・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	右		
3	須恵器	無柄杯		180°	5	SK2		13.0	4.4	5.2	C1群?	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	右	
4	須恵器	無柄杯		180°		SK2		12.5	3.1	8.5	H群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	左 AKE不明	
5	土師器	無柄杯		180°/190°	25/21	SK3		17.0	5.9	6.0	黒・灰・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		
6	土師器	無柄杯	T1類	180°/190° 25/21	SK3			11.6	2.3	1.0	黒・白・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		
7	土師器	瓶	T1類	12M	19	SD40		12.0			灰・白・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		
8	土師器	瓶	R2類	12M	11	SD40	II群	12.8	2.1	9.4	K	白・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	
9	土師器	小瓶	R3類			SD40				5.0	赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	C1K	
10	土師器	瓶	R1類			SD40	II群			6.0	砂利多	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	D2K	
11	土師器	瓶	R1類	11M	10	SD40	II群			5.4	砂利多	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	右	
12	土師器	有台杯		12M	11 - 18	SD40	II群			5.0	K	白・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、高台鋸切	
13	青磁	盤	海上回日	8M - 9M	1 - 4 - 5 - 6 - 9 - 10	SD40	II群	10.0			-	内側灰瓦		
14	白磁	碗	V - 4類	12M	19	SD40	II群	16.0			-	外側弦文		
15	白磁	碗	N類など	10M	20	SD40	II群			7.4	-	内側縫、荷葉形		
16	須恵器	直腹盤		11M	10	SD40	II群			5.0	C2群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		
17	須恵器	直腹盤				SD40				12.0	B群	内側ロクロナヂ、或外側不調和、高台鋸切後ロクロナヂ	C1K	
18	須恵器	長腹盤		9M	4 - 5 - 9 - 10	SD40				12.0	B群	内側ロクロナヂ、或外側不調和、高台鋸切後ロクロナヂ		
19	土師器	無柄杯				SD5	II群			4.0	赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		
20	土師器	無柄杯				SD5	II群			5.2	白・赤色灰陶	底拵て不明		
21	須恵器	有台杯		18M	25	SD5	II群	14.0	5	7.0	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		
22	青磁	盤	海上回日			SD41				5.0	-	対込み印刷牛牛、底部外側動搖き	D2K	
23	陶器	すり鉢	V類	13M	18	SD41	II群				海苔、黒・白色灰 瓦	内側ロクロナヂ、内側月	D2K	
24	土師器	盤	T1類			SD6		11.6	2.6	-	白色粒・雲母混	内側ココナヂ、底外不調和		
25	土師器	小盤		160K		SD13			8.2	灰・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り			
26	須恵器	無柄杯		9M		SK42		12.0	2.4	6.8	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		
27	須恵器	有台杯		180°/190°	4 - 15/6	SD4	II群			6.0	B群	内側ロクロナヂ、或外ロクロナヂ、高台鋸切後ロクロナヂ		
28	土師器	小盤	9M	3	P52			12.0		6.2	白・灰・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	口内採化物	
29	土師器	小盤	R1類	9M		SD44		7.8	2.1	3.8	白・漂色灰、雲母 瓦	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り	口内化物陶	
30	黑色土器	無柄杯				SD4	II群			8.0	白色灰陶	内ヘタリ今子、再内クロナヂ、底 不規則		
31	土師器	盤	T1類	9M	6	清		11.6	3.1		黒・白・赤色灰陶 瓦	内側ココナヂ、底外不調和	DK	
32	土師器	盤	T1類	17M		清		12.2	2.4		黒・赤色灰陶	内側ココナヂ、底外不調和	AKE	
33	須恵器	有台杯		10M	18 - 24	SD47	II群			8.4	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ	C2区、垂ね焼 き締目	
34	須恵器	碗				V群		13.0			C2群	崩落ロクロナヂ、内側ロロナ ヂ	右 AKE	
35	須恵器	有台杯		160°/160° 170°/170° 180°/190°	2 - 3 - 20/ 15/22/5/ 24/8	II群		12.5	5.8	7.5	B群	内側ロクロナヂ、或外ロクロナヂ 内・高台鋸切後ロクロナヂ	左 AKE	
36	須恵器	有台杯		17M	2 - 7	II群				6.0	B群	内側ロクロナヂ、或外ロクロナヂ 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
37	須恵器	有台杯		19M	7 - 14	II群				6.0	B群	内側ロクロナヂ、高台鋸切後ロ クロナヂ		
38	須恵器	有台杯		13M		II群				6.0	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
39	須恵器	有台杯		18G	5	II群				6.4	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
40	須恵器	有台杯		17M/18D° 180°/190°	5 - 23/23/ 5 - 25/12	II群		11.8	3	6.5	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
41	須恵器	無柄杯		180°	28	II群		12.0	2.8	8.2	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
42	須恵器	無柄杯?		180°/190°	42048	II群				5.6	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
43	須恵器	有台杯		18M	10/13/9	II群				8.0	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
44	須恵器	有台杯		19M	16	II群				7.4	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
45	須恵器	有台杯		16G/19E	15/31	II群				9.4	B群	内側ロクロナヂ、高台鋸切後ロ クロナヂ		
46	須恵器	有台杯		9M	13	II群				9.0	B群	内側ロクロナヂ、高台鋸切後ロ クロナヂ		
47	須恵器	有台杯		19M	11 - 21	II群				8.0	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ		
48	須恵器	有台皿		11M	3	II群		12.6	2.2	7.0	B群	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り 内・高台鋸切後ロクロナヂ	C1区No.1032	
49	灰胎陶器	小網	K1-47	16P	18	II群				5.0	尾張?	内面全表面施		
50	灰胎陶器	小網	丸丘?	17M - 18E	2 - 7 - 20	II群		9.6	3.5	4.0	美濃	内面全表面施		
51	灰胎陶器	盤	KD9	180°/19E	2 - 3 - 4 - 14/24/21	II群		15.0	2.5	6.6	尾張	横石埋立		
52	灰胎陶器	盤	丸丘?	10L	2	II群				8.0	美濃	内面全表面施		
53	灰胎陶器	盤	15M/16J	7/1		II群					東海	他成績品		
54	土師器	無柄杯		18M	5	II群				7.8	白・赤色灰陶	内側ロクロナヂ、或外側舟形切り		

観察表

小峯遺跡土器・陶磁器觀察表(2)

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	遺構	位相	口径	底高	底径	底上	溝型	回転 方向	備考
55	上層器	無柄陶		180°	5	田耕			6.5	黒・白色灰面	内・外上口クロナギ、芦芋・底外 ロクロケヌリ			
56	上層器	無柄陶		130°	6	田耕	12.4	4.6	4.5	黒・白色灰、瓦石	内・外ロクロナギ、底外回転角留り			
57	上層器	無柄陶		160°	2	田耕			6.4	白・灰・赤色灰面	内・外ロクロナギ、芦芋	内面はヨコナ ドで上側更に 凹D型の可視性 あり		
58	上層器	無柄陶		190°	8	田耕			5.0	白・灰色灰、海苔	内・外ロクロナギ、底外回転角留り			
59	上層器	無柄陶		90°		田耕	V- 型		5.0	白・灰・赤色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
60	上層器	無柄陶		180°	4	田耕			4.0	白・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
61	上層器	無柄陶		160°	10	田耕		1.3	白・灰色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗				
62	上層器	無柄陶		180°	9	田耕			4.0	白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
63	上層器	無柄陶		170°	1	田耕			4.8	白・灰・赤色灰面	内・外ロクロナギ、底外回転角留り	右		
64	上層器	無柄陶		100°	11	田耕			7.0	白・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外回転角留り			
65	上層質	瓶	R1無							5.8	白色灰、海苔面	内・外ロクロナギ、底外摩耗	CIIK No.106-136	
66	上層質	瓶	R1無	90°	7	田耕			5.8	黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
67	上層質	瓶	R1無						5.4	砂粒多	内・外ロクロナギ、底外摩耗	D25K No.111		
68	上層質	瓶	R1無	90°	16~18	田耕			4.4	黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
69	上層質	瓶	R1無	170°	18	田耕			5.0	白色灰、雲母	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
70	上層質	瓶	R1無	100°	8	田耕			6.0	白・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
71	上層質	瓶	R1無	92°	24	田耕			4.0	黒・白色灰、雲母	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
72	上層質	小瓶	R1無	120°		田耕	8.6	2.5	3.4	黒色灰・雲母	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
73	上層質	小瓶	R1無	96°	15	田耕	8.8	1.9	5.2	黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
74	上層質	小瓶	R1無	90°	13~6	田耕			1.7	白色灰面	内・外ロクロナギ			
75	上層質	小瓶	R1無	120°		田耕			3.8	黒・白色灰、雲母	内・外ロクロナギ、底外回転角留り			
76	上層器	無柄陶		180°	11	田耕			4.0	黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外回転角留り			
77	上層器	無柄陶		190°	1	田耕			2.0	黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
78	上層質	小瓶	R1無	100°	20	田耕			2.0	砂粒多	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
79	上層質	小瓶	R1無	80°	18~20	田耕			4.0	黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗	内面黒化		
80	上層質	小瓶	R1無	90°	3~4	田耕			3.8	白・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
81	上層器	有柄陶		190°	11	田耕			4.0	赤色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
82	上層器	小瓶	R1無	100°	8	田耕			2.8	白・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
83	上層質	小瓶	R1無	100°	25	田耕			3.4	砂粒多	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
84	上層質	小瓶	R1無	南北サブト1-中央(東側)		田耕			3.4	白・白色灰、雲母	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
85	上層質	小瓶	R1無	東西サブト1		田耕			3.8	黒・白色灰、雲母	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
86	上層質	小瓶	R1無	98°	3				3.8	砂粒多	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
87	上層質	小瓶	R1無	90°	17	田耕			3.4	黑色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
88	上層質	小瓶	R1無	90°	16~17~ 21~22	N標上			3.4	黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
89	上層質	小瓶	R1無			田耕			4.0	黒・白色灰	内・外ロクロナギ、底外摩耗	D18K		
90	黑色土器	有柄陶		190°~180°	23~23	田耕			1.0	白色灰、雲母	内・外ラ・ガキ、苏ロクロナギ、高 石・雲母灰			
91	黑色土器	有柄陶		190°	8	田耕				白色灰面	内・外ラ・ガキ、苏ロクロナギ、高 石・雲母灰			
92	黑色土器	有柄陶		190°	14	田耕				黒・白色灰、雲母	内・外ラ・ガキ、苏ロクロナギ、高 石・雲母灰			
93	黑色土器	有柄陶		190°	7	田耕				6.0	白・白色灰面	内・外ラ・ガキ、苏ロクロナギ、高 石・雲母灰		
94	黑色土器	有柄陶		100°	19	田耕			7.0	砂粒多	内・外摩耗			
95	上層器	有柄陶		180°	5	田耕			6.0	黒・白色灰面	内・外摩耗			
96	上層器	有柄陶		100°	19	田耕			7.0	白・白色灰面	内・外摩耗、苏ロクロナギ、高台銀付け後 口付ナギ			
97	上層器	有柄陶		南北	19	田耕			8.0	赤色灰・雲母灰	内・外ロクロナギ、高台銀付け後 口付ナギ			
98	上層器	有柄陶		100°	12	田耕	5.6	1.5	5.6	砂粒多	内・外ロクロナギ、高台銀付け後 口付ナギ			
99	上層器	有柄陶		190°	22	田耕			6.4	砂粒多	内・外ロクロナギ、高台銀付け後 口付ナギ			
100	上層器	有柄陶		90°	8~9	田耕			4.4	砂粒多	内・外摩耗、苏ロクロナギ、底外高台 銀付け後ロクロナギ			
101	上層器	有柄陶		90°	22~17	田耕				黒・白色灰面	内・外ロクロナギ、高台銀付け後 口付ナギ			
102	上層器	長釜		90°	7	田耕		21.0		白色灰面	内・外ロクロナギ			
103	上層器	長釜		180°	5	田耕		21.0		黑色灰面	内・外ロクロナギ			
104	上層器	長釜		110°	7	田耕		22.0		白・白色灰面	内・外ロクロナギ	D25K		
105	上層器	瓢		120°	16	田耕		21.0		白色灰面	内・外ロクロナギ			
106	上層器	小釜		90°	8	田耕		11.5		白色灰面	内・外ロクロナギ			
107	上層器	小釜		90°	8~9	田耕		12.0		白・白色灰面	内・外ロクロナギ			
108	上層器	小釜		180°	4	田耕			6.0	白色灰面	内・外ロクロナギ、底外摩耗			
109	上層器	把手								白・白色灰面	内・外把手			
110	上層器	把手								黑・白色灰面	内・外把手	D18K No.61		

小峯遺跡土器・陶磁器観察表(3)

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	遺構	部位	口径	壁高	底径	底上	溝型	回転 方向	備考
111	灰陶器	壺		O2Aサブトレ		田耕		11.8			H群	内西口クロナガ		
112	灰陶器	長瓶		17D/18E/19F	11/2/5/25	田耕		14.0			C2群	内西口クロナガ		
113	灰陶器	長瓶		9K	25	田耕		18.0			H群	内西口クロナガ		
114	灰陶器	長瓶		17H	12	田耕		18.0			H群	内西口クロナガ		
115	灰陶器	長瓶		16D	1	田耕		16.4			H群	内西口クロナガ		
116	灰陶器	水瓶		17H/18E/ 18F/19E	5-10/10- 12/13/10- 16/1-18	田耕					H群	内西クロナガ、外口クロナガ、洗 鉢		
117	灰陶器	長瓶		9K	3-4	田耕			6.6	H群		内西口クロナガ、底外側有溝 型、両台付内縁有クロナガ		
118	灰陶器	鉢						21.0			H群	内西口クロナガ		SD40件正、 C18No.25、 1017, 1021
119	上釉質	盤	T1盤	11M	7	田耕		12.0			黒・白・赤色斑	内赤コロナガ、底外不調整		附標102上
120	上釉質	盤	T1盤	9K	3	田耕		12.0			白・灰・赤色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
121	上釉質	盤	T1盤	17H	6	田耕		12.6	3	-	黒・白・赤色斑	内赤摩耗		
122	上釉質	盤	T1盤	9M	7	田耕		12.0	2.7	-	黒・白・赤色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
123	上釉質	盤	T1盤						11.8	2.6	-	白色斑・青色斑	内赤コロナガ、底外不調整	D23K
124	上釉質	盤	T1盤	17H	6	田耕		11.6	2.8	-	白・赤色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
125	上釉質	盤	T1盤	調査区西端		田耕		11.8			黒・白・赤色斑、青色斑	内赤コロナガ、底外不調整	C23K	
126	上釉質	盤	T1盤	12N	3	田耕		11.8			黒・白・赤色斑、青色斑	内赤コロナガ、底外不調整	D23K	
127	上釉質	盤	Q2盤	3P西壁サブトレ					7.0			黒・赤色斑	内赤コロナガ、底外摩耗	C23K
128	上釉質	盤	T2盤	11N	8	田耕		12.0			黑色斑	内赤コロナガ、底外不調整	D23K	
129	上釉質	盤	T2盤	9K	13	田耕		13.6			黑色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
130	上釉質	盤	T2盤	18G	5	田耕		11.0	1.7	-	黒・白色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
131	上釉質	盤	T2盤	12N	10-15	田耕		11.0			鉛斑	内赤コロナガ、底外不調整		
132	上釉質	小盤	T1盤	10-15		田耕		8.0	1.7	-	黒・白色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
133	上釉質	小盤	T1盤	12M横規		田耕		8.2	1.6	-	黒色斑・黒基	内赤コロナガ、底外不調整	D23K	
134	上釉質	小盤	T1盤	1細縁(東北)		田耕		7.6	1.5	-	黒・白色斑、青色斑	内赤コロナガ、底外不調整	D23K	
135	上釉質	小盤	T1盤			田耕		8.0	1.7	-	黒・白色斑	内赤コロナガ、底外不調整	C18No.103	
136	上釉質	小盤	H2盤	1個縁				7.2	1.9	5.0	鉛斑	内赤コロナガ、底外向右系留		
137	上釉質	小盤	H2盤	19E	17	田耕		7.0			赤色斑	内赤コロナガ		
138	上釉質	小盤	T2盤	14J	15	田耕		9.2	2.0	-	黒色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
139	上釉質	小盤	T2盤	19E	22	田耕		8.6	1.6	-	黒色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
140	上釉質	小盤	T2盤	9K	15	田耕		7.4			黒色斑	内赤コロナガ、底外不調整		
141	上釉質	盤?		9K	22	田耕					鉛斑	不明		
142	青磁	瓶	瓶口無	10M	23	田耕		15.6			-	露井文(輪削し)		
143	青磁	瓶	瓶口無	19E	21	田耕		15.4			-	露井文(輪有り)		
144	青磁	瓶	瓶口無	18E	4	田耕		15.0			-	露井文、鉛削痕		露上HH3期の 可能性有
145	青磁	小瓶	地上HSC瓶	17P	19	田耕		12.2			-	露井文		
146	青磁	小瓶	地上HSC瓶	18E		田耕		15.0			-	露井文	BHK	
147	青磁	瓶	地上HBRV	12M		田耕		14.8			-	露井蓮方文	D23K	
148	青磁	瓶	地上HBRV	16P	サブトレ	田耕		15.0			-	露井蓮方文	漆塗り	
149	青磁	小瓶	地上HBRV	17P		田耕		11.4			-	露井蓮方文	D11K	
150	青磁	瓶	地上HDX× ED口無	17P	6	田耕		6.8			-	高台内側施釉		
151	青磁	瓶	地上HDX× ED口無					6.4			-	底部外側施釉		
152	青磁	瓶	瓶口無	19E	20	田耕		8.0			-		BHK	
153	青磁	瓶	地上HDF	18D	12	田耕		4.4			-	底部外側施釉		
154	青磁	瓶	瓶口無	16K	12	田耕		8.0			-	底部外側施釉	龍田	
155	青磁	香炉	瓶	16G	5	田耕		14.0			-	外面部施釉	漆塗り	
156	青磁	香炉	瓶	17G	23	田耕		10.0			-	外面部施釉		
157	青磁	香炉	瓶	18P	25	田耕		7.0			-			
158	白磁	西洋壺	皿加	17H	12	田耕		10.0			-			
159	青白磁	瓶									-	表面彫り		
160	白磁	瓶	森HD加	12M	1	田耕		3.4			-	高台施釉		
161	白磁	瓶	森HD加	7Q	西壁サブトレ			4.2			-	足込内側施釉、高台施釉、腰引高台	直井惠路	
162	白磁	瓶	森HD加	19F	2	田耕		9.6	2.8	3.6	-	高台施釉		
163	窓口美濃	天目梅	後南→大門	高脚上・刺さ	19	田耕		11.2			-	内舟施釉		
164	窓口美濃	天目梅	後南→大門	高脚上・刺さ		田耕		4.7			-	底部外側施釉		
165	窓口美濃	瓶	後南→大門	20E	23	田耕		6.0			-	高台施釉		
166	窓口美濃	楕	後南	16M	8	田耕		4.2	2.2	2.4	-	高台施釉		
167	窓口美濃	楕	後南	18E	7	田耕					-	内舟施釉		
168	志野	楕	17P	12		田耕		1.5	6.0		-	内舟施釉・草花文		
169	志野系陶器	楕	6M	14・15		田耕		5.2	1.4	2.1	-	内舟施釉	C18No.1040	
170	更前系高輪	小盤	15J	11		田耕		9.2	2.2	4.4	-	内外施釉		
171	窓口美濃	平鉢	17G	10		田耕		13.8			-	内舟施釉		

観察表

小峯遺跡土器・陶磁器観察表(4)

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	通縫	縫位	口径	底高	底径	底上	調査	回転 方向	備考
172	瀬戸美濃	瓶子		サブトレ			III				-	外面花文		D3E4
173	須恵		B-S BN				II b~III b							
174	須恵	瓶	11K				III					海釣		
175	須恵	瓶	17F	2			II					海釣		
176	須恵	瓶	16D	5			II					海釣		
177	須恵	小鉢	17D	15			II					海釣		
178	須恵	小鉢	10E	19			II					海釣		
179	肥前系陶器	瓶	17D	6			II					海釣		
180	須恵	壺	15D、16A	15			III					海釣		
181	上野器	器口クロ 足無	18E	19			III				10.0	黒・白色彩器	内外摩耗	
182	上野器	小型上野器	10E	3			II世				3.0	黒・白色彩器	内外摩耗	
183	越文土器	深鉢	13M	22			II b					黒・白・赤色彩器	内外摩耗	

小峯遺跡土製品観察表

No.	器種	グリッド	通縫	縫位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調査状況	備考
184	粘土器		S3H4		4.0	3.6	3.8	42.5	下部灰	中央の穴が貫通しない、未完成か?
185	陶研磨	18G5	日削		2.7	3.5	3.5	32.0	焼元	陶化研磨
186	土器		日山削		6.0	2.8	1.5	18.1	過半灰	陶化研磨。D18、18E~18Pは同一個体
187	土器				3.4	2.7	1.3	7.6	過半灰	陶化研磨。D18
188	土器		日山削		6.5	3.2	1.6	17.9	過半灰	陶化研磨。D18
189	土器		日山削		6.6	3.3	1.9	33.0	過半灰	陶化研磨。D18
190	和田研磨具	9G3	日削		8.2	7.2	2.4	139.5	焼元	直ちに和田研磨具を素材とする
191	和田研磨具	10H.17	日削		4.5	5.0	1.1	26.1	焼元	和田研磨×窓口削面鏡片を素材とする
192	和田研磨具	18P6	日削		2.3	2.5	1.1	7.1	焼元	和田研磨×窓口削面鏡片を素材とする
193	手形	18P23	日削		3.6	4.7	1.1	22.9	過半灰	陶化研磨

小峯遺跡石製品観察表

No.	器種	グリッド	通縫	縫位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	調査状況	備考
194	造方				2.9	4.3	0.8	15.8	蛇紋岩	下部灰	
195	砥石	17H3	日削		8.4	3.5	1.8	61.7	砂岩	下部灰	上部に貫道する孔あり
196	砥石	8H.23	日山削		8.0	3.7	2.8	130.5	蛇紋岩	焼元	
197	砥石	11M15	日山削		6.1	4.2	3.2	98.9	麻績岩	上下灰	
198	石斧				7.9	8.1	2.3	202.2	宝山岩	焼元	HG不明、繩文時代
199	和寺石	S1D9			10.0	6.7	4.5	281.0	宝山岩	過半灰	

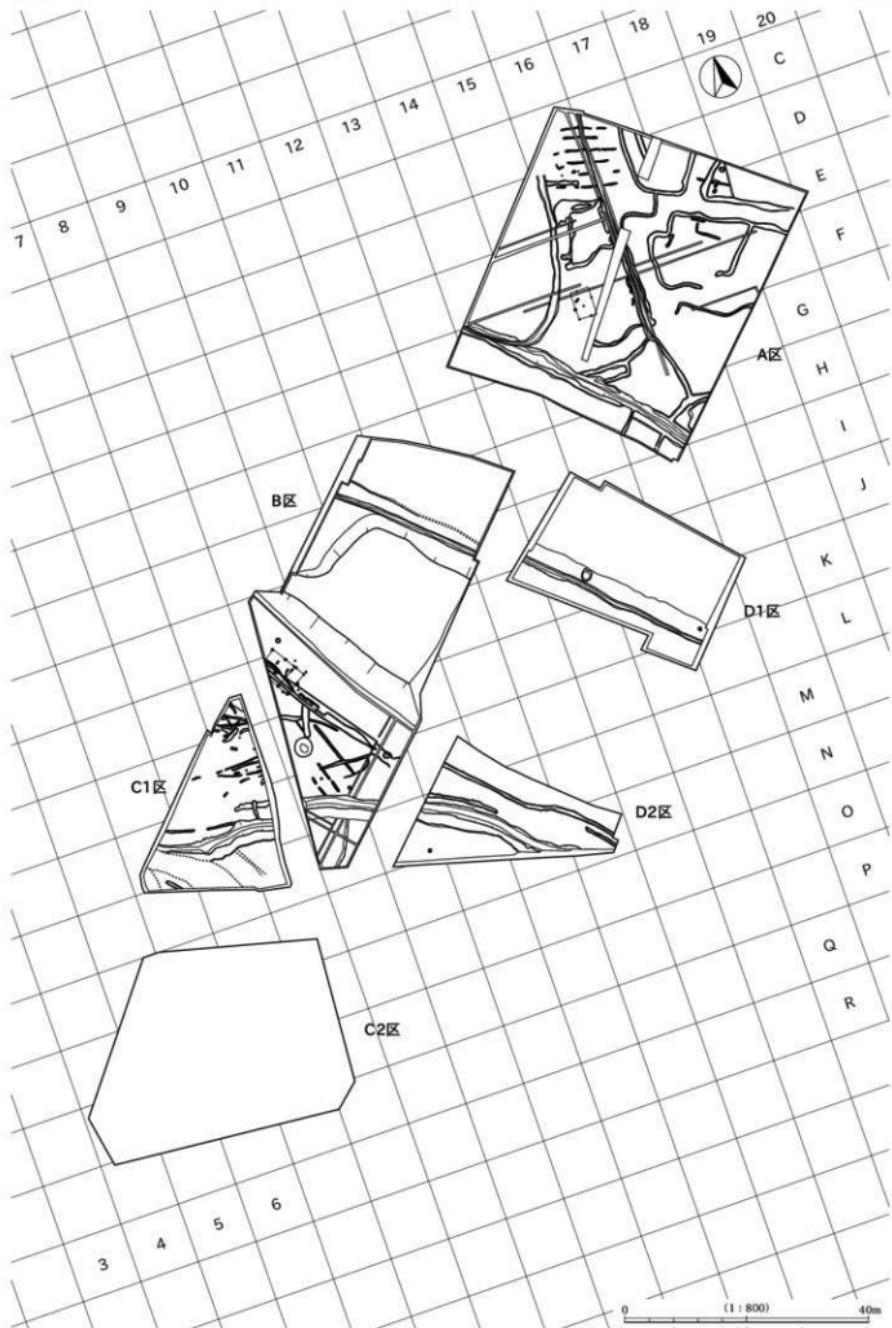
小峯遺跡金属製品(銅貨)観察表

No.	銅貨	グリッド	通縫	縫位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	記跡	固名	備考
200	元貞通寶	15M14			2.40	2.40	3.0	1078年	北宋		
201	元貞通寶	18G2	日削		2.45	2.45	2.8	1078年	北宋		
202	咸平通寶	12M18	日山削		2.30	2.30	2.0	998年	北宋		
203	元祐通寶	10M6	日削		2.40	2.40	2.0	1086年	北宋	一部底削	
204	政和通寶	10M6	日削		2.10	2.20	1.2	1111年	北宋	一部欠損	
205	宣和通寶	10N8	日削		2.45	2.45	2.6	1023年	北宋		
206	崇寧通寶				2.45	2.45	2.4	1049年	北宋		D3E4
207	崇寧通寶				2.35	2.35	2.9	1423年	別野工棚	C23.黄杏区西端	

小峯遺跡木製品観察表

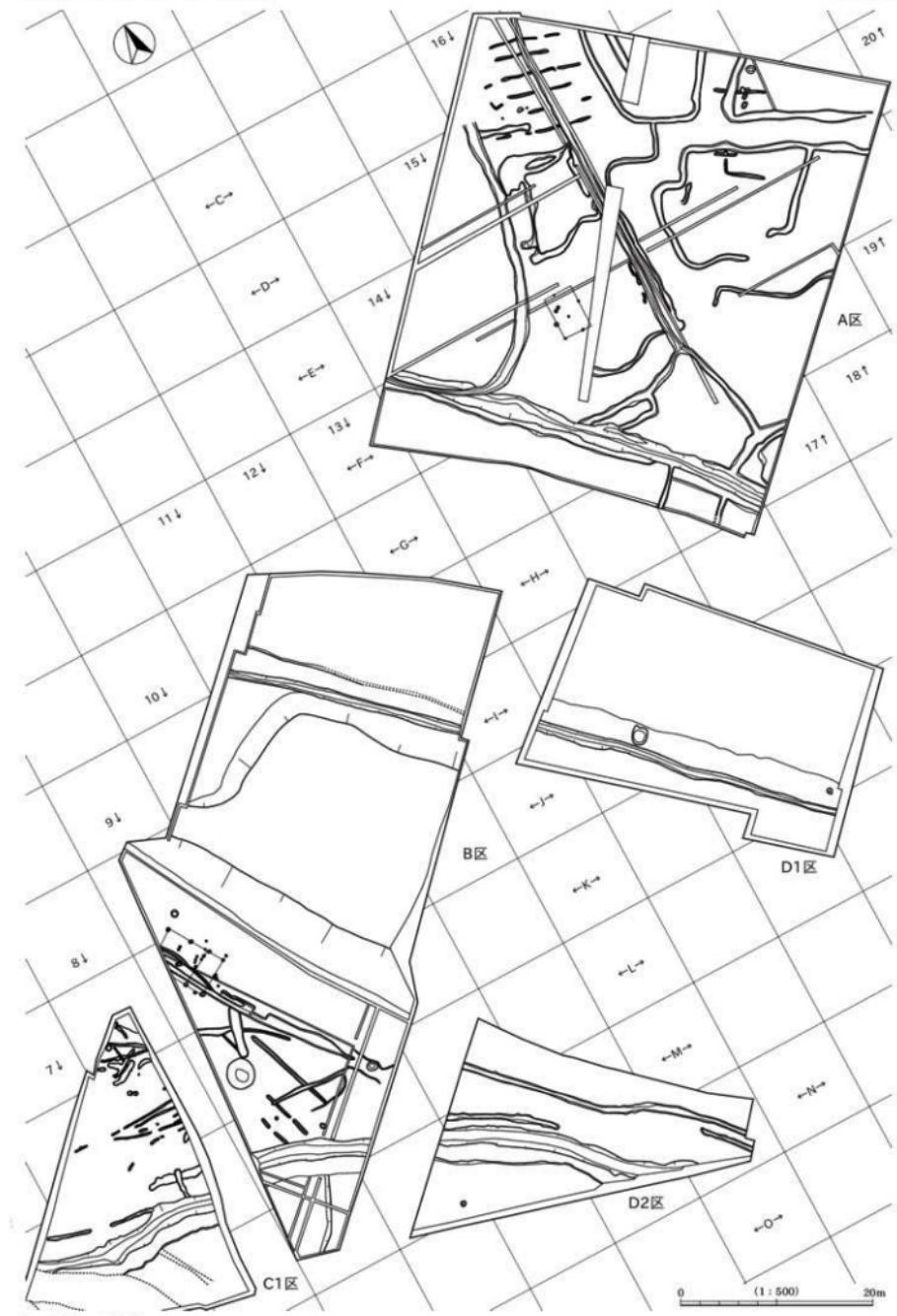
No.	器種	グリッド	通縫	縫位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	本数り	調査状況	備考	
208	道版下駄				20.8	7.6	1.7	1.7	絆目	約1/2次?	表面の縦割れが観察
209	道版下駄				21.6	9.6	2.1	2.1	絆目	焼元	
210	内形板				15.0	8.5	1.0	0.5	絆木	過半灰	底縫17~18cm内縫の内形板か?
211	漆塗板	18P20			3.8	4.6	0.5	0.5	絆木	過半灰	外曲黒漆、内曲赤漆





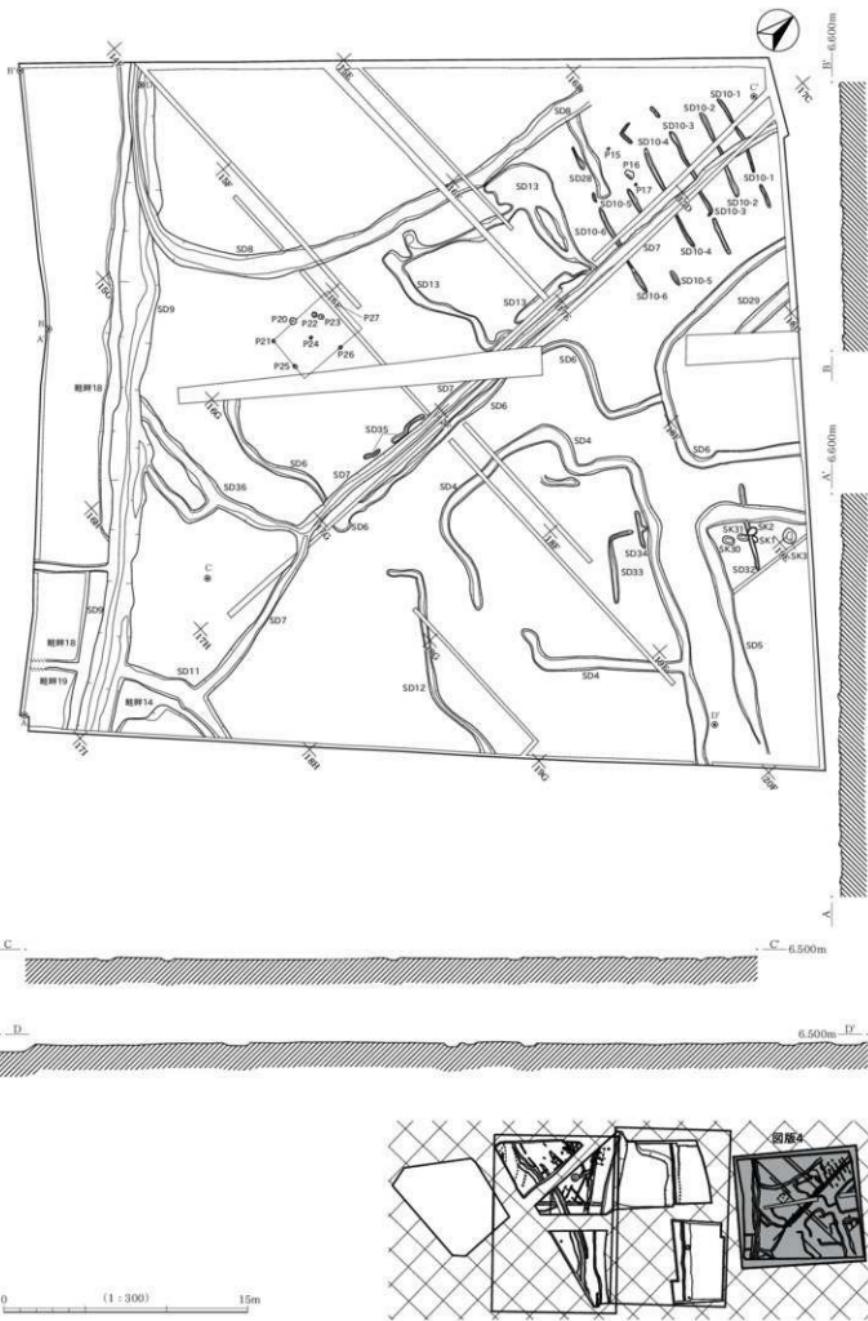
分割図1 (A・B・C1・D1・D2区)

図版3



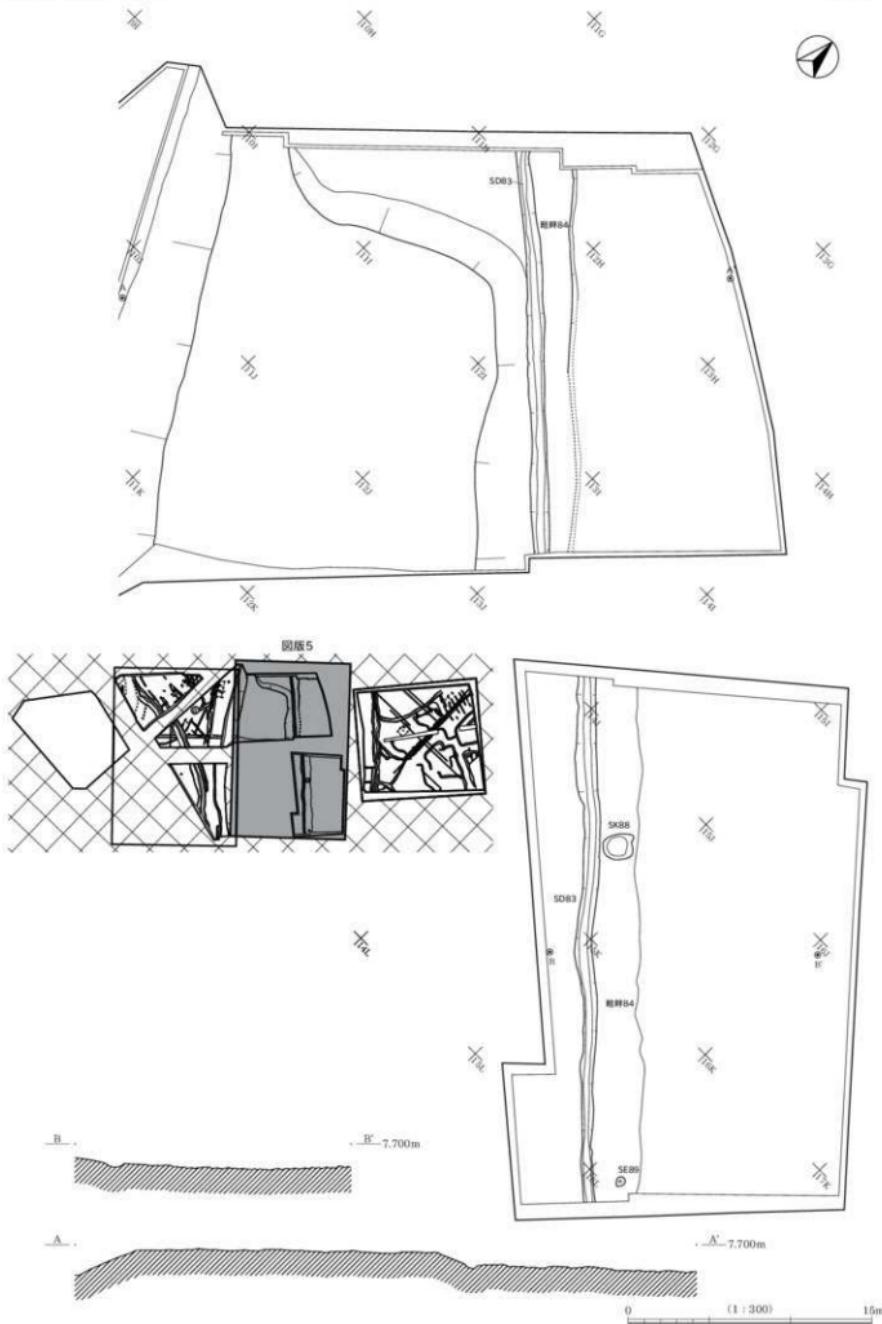
圖版 4

分割图2 (A区)



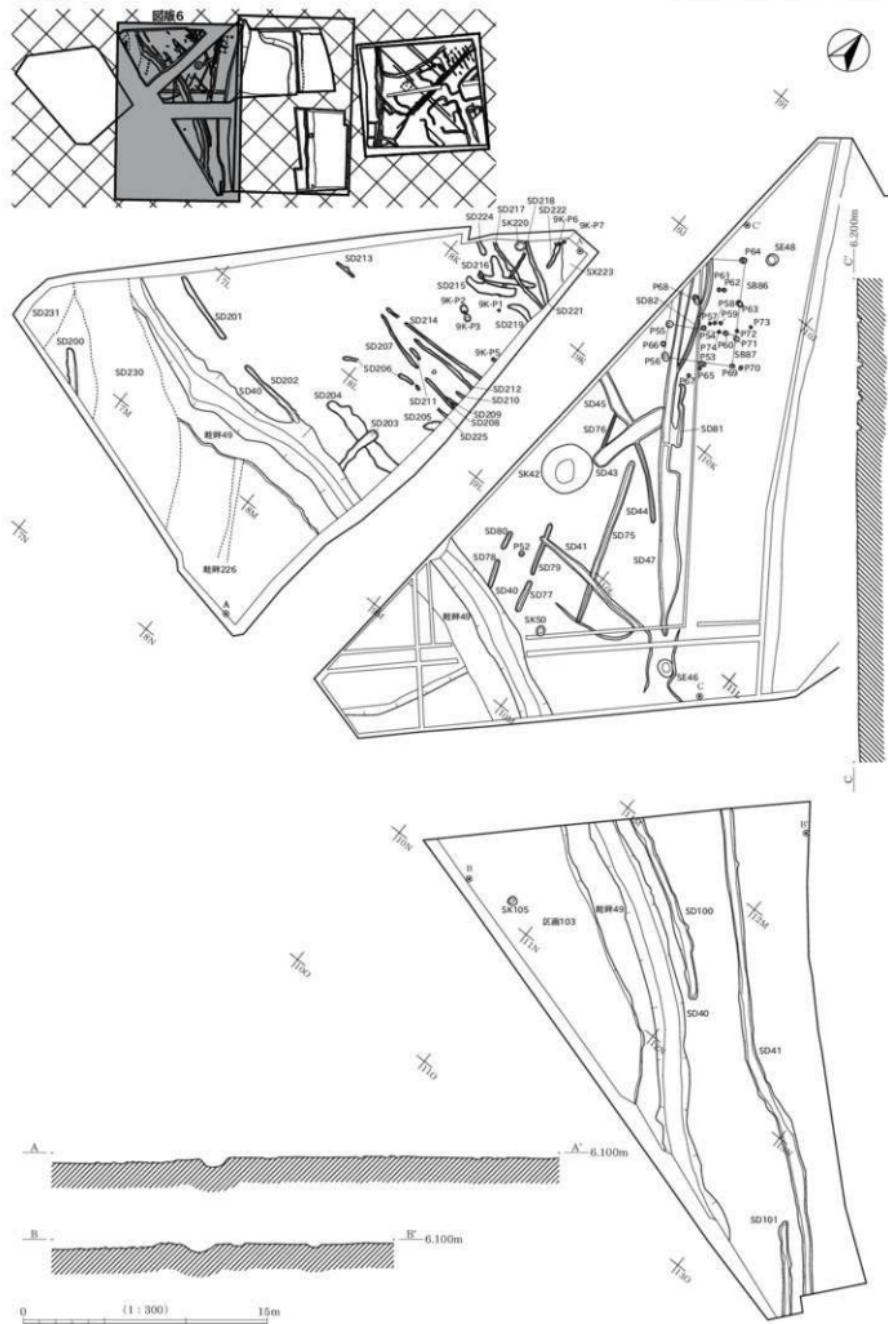
分割図3 (B区・D1区)

図版5



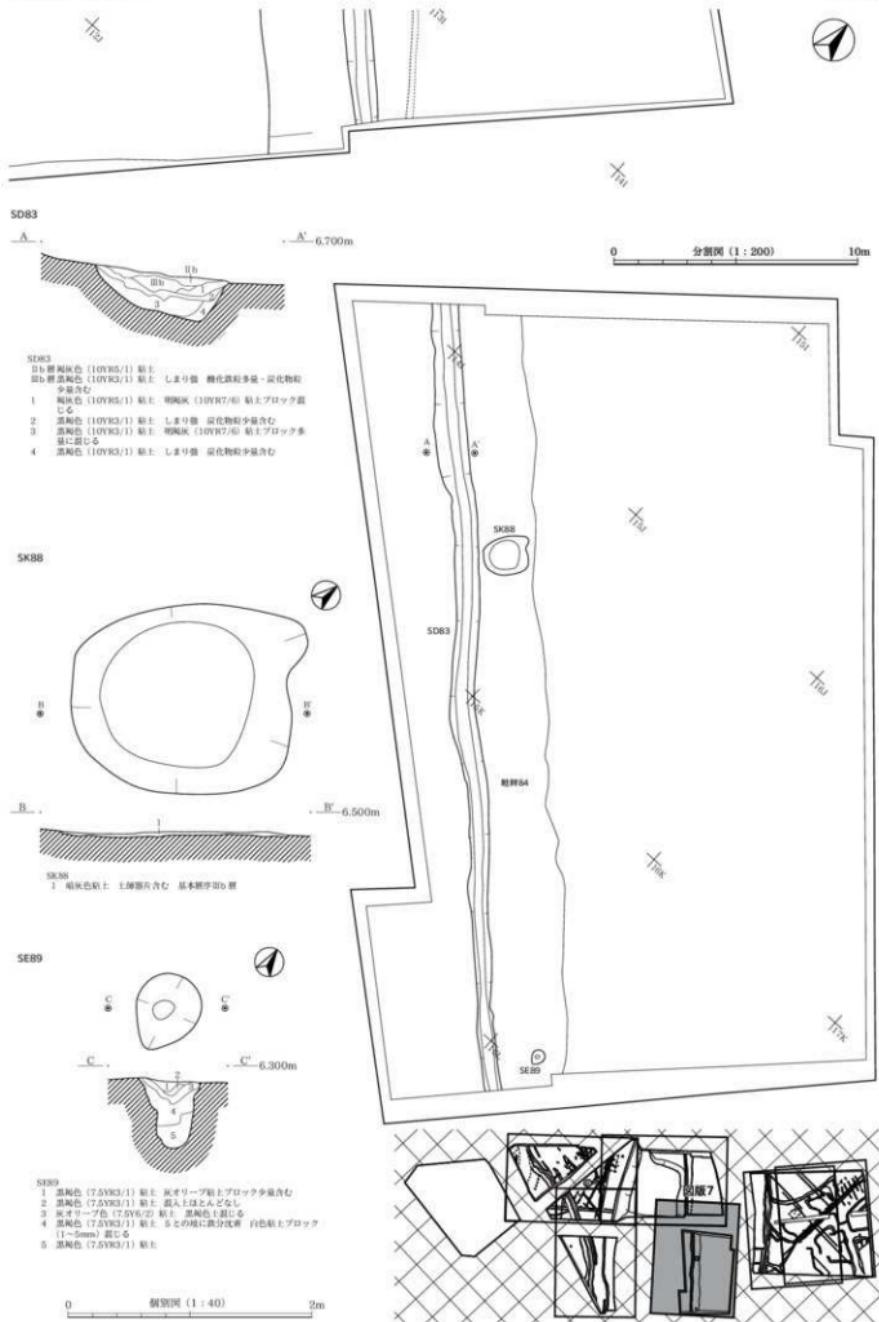
図版 6

分割図 4 (B 区・C1 区・D2 区)



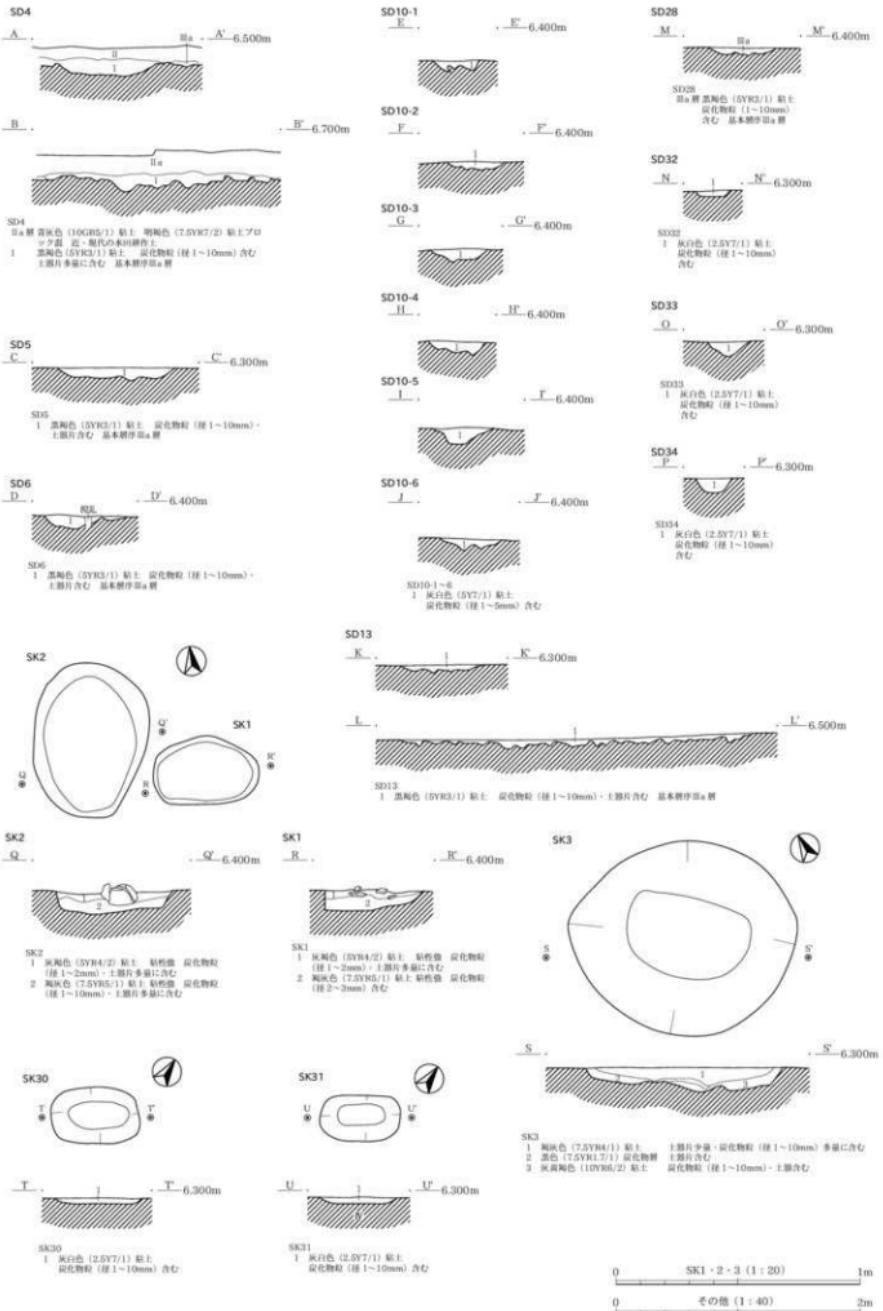
分割図 5・個別図 1

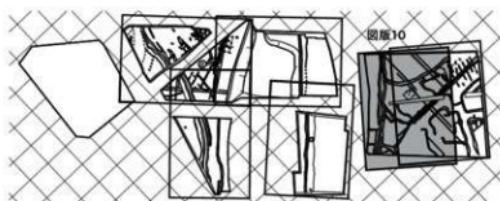
図版 7





個別図 2

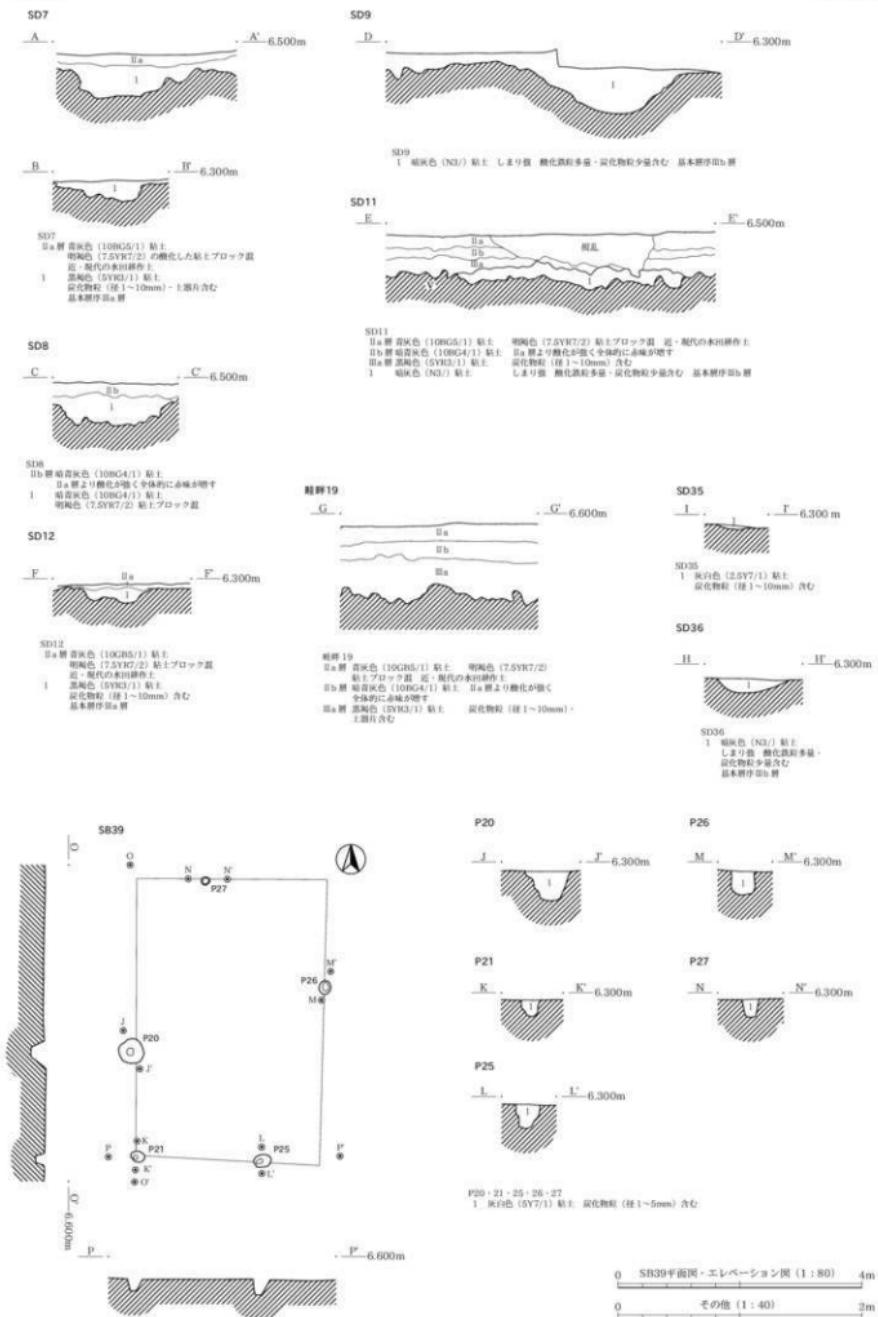


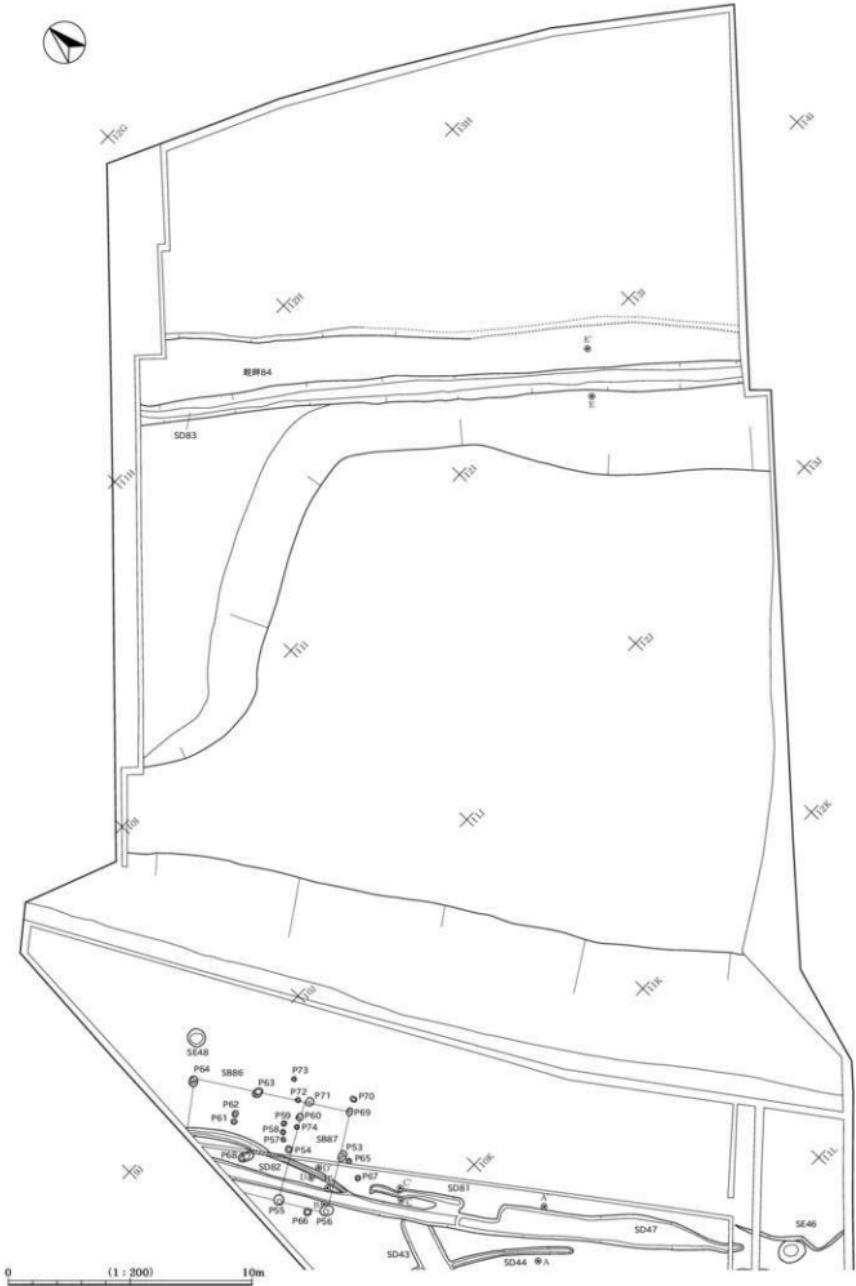


図版10

0 (1 : 200) 10m

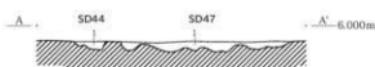
個別図 3





個別図 4

SD44-47



SD47

B-B' 6.000m



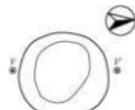
SD44

1 黒褐色 (SYR3/1) 粘土
泥炭質 (厚さ 1~10mm)
上部含む 基本層付近

SD47

1 黒灰色 (NG3/1) 粘土
基本層付近

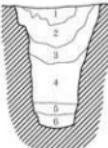
SE48



SD81

1 水色 (SY5/1) 粘土
炭化物質 (厚 1~20mm)
多量含む

F-F' 6.000m



SD82

D-D' 6.000m



SD82

1 水色 (SY5/1) 粘土
炭化物質 (厚 1~20mm)
多量含む

SD83

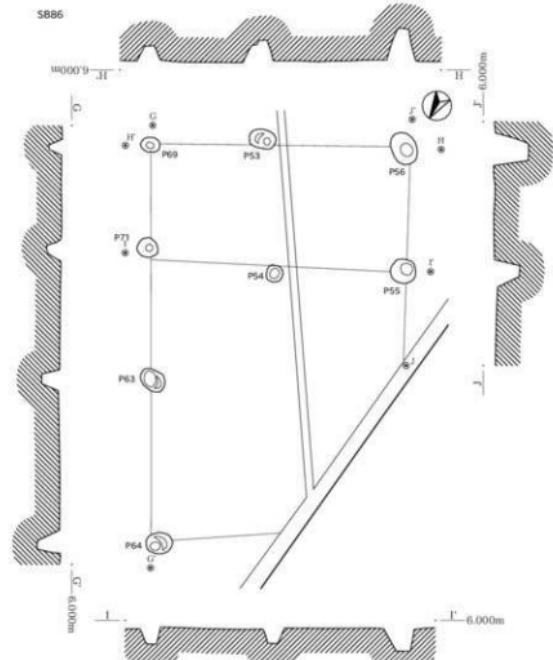
E-E' 6.700m



SE48

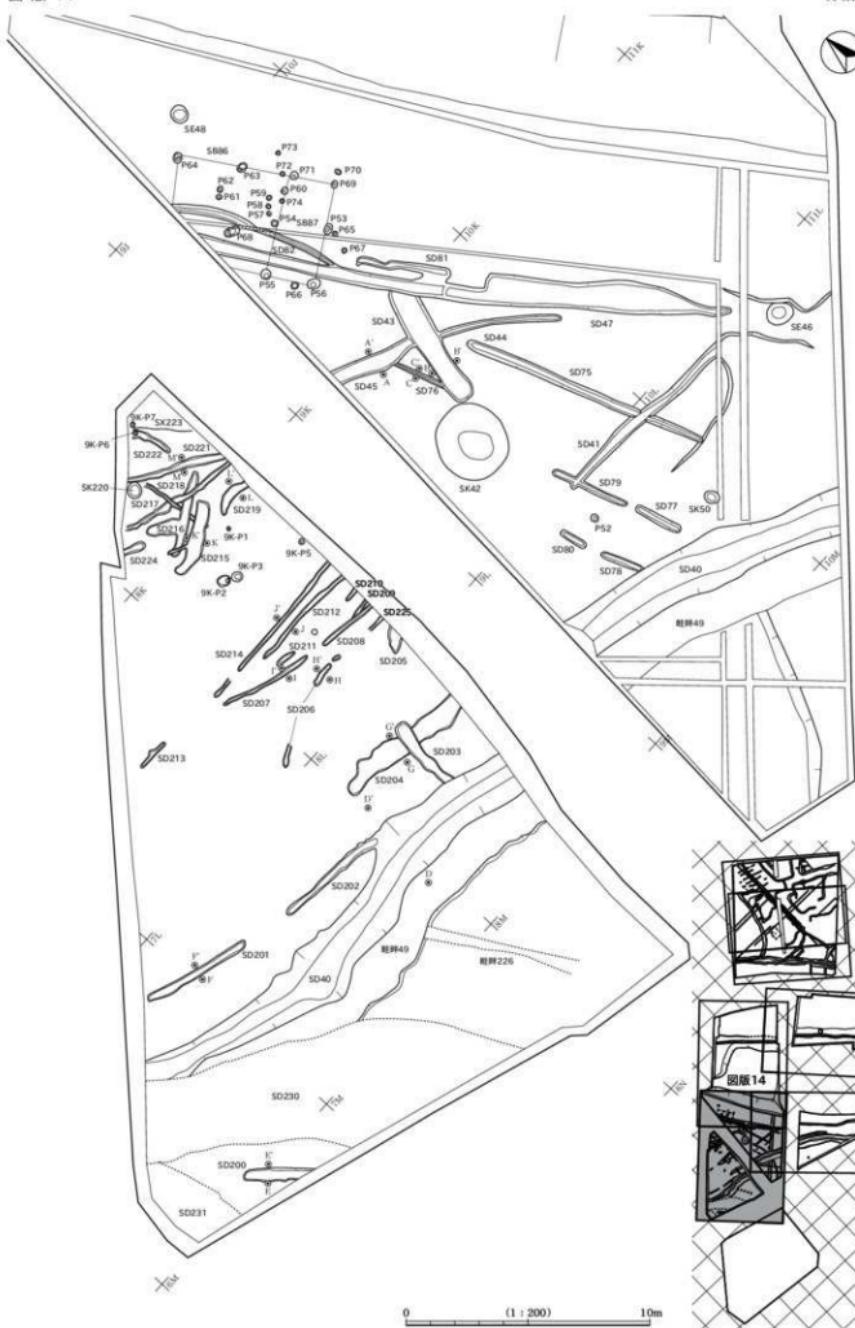
- 1 明褐色 (7SYR7/1) 2 黑褐色 (10YR8/8) 粘土ブロック多く混じる
しまり炭化物質、炭化物質含む
- 2 黑褐色 (10YR3/1) 粘土 白色 (10YR8/1) 粘土ブロック混. しまりや
少張 粘化鉄質、炭化物質混在
- 3 黑褐色 (10YR3/1) 粘土 (10YR8/1) 粘土ブロック・砂粒が混じ
る しまり炭化物質、炭化物質多量含む 多量共が粘土
- 4 黑褐色 (10YR3/1) 粘土 しまり層
- 5 ドクソリ植物茎 (草・根など) の根網
- 6 明褐色 (5YR7/1) 粘土

S886

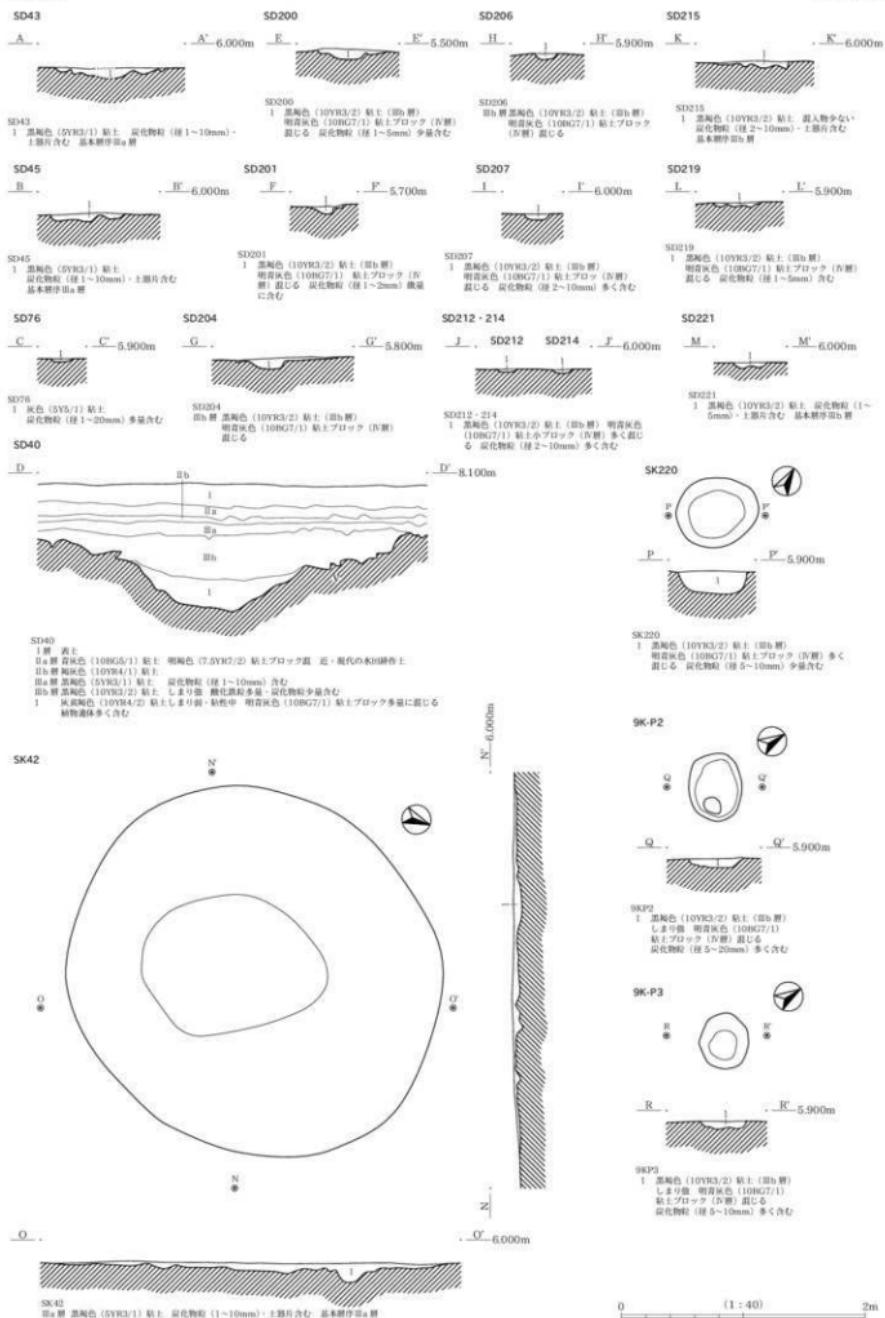


図版 14

分割図 9

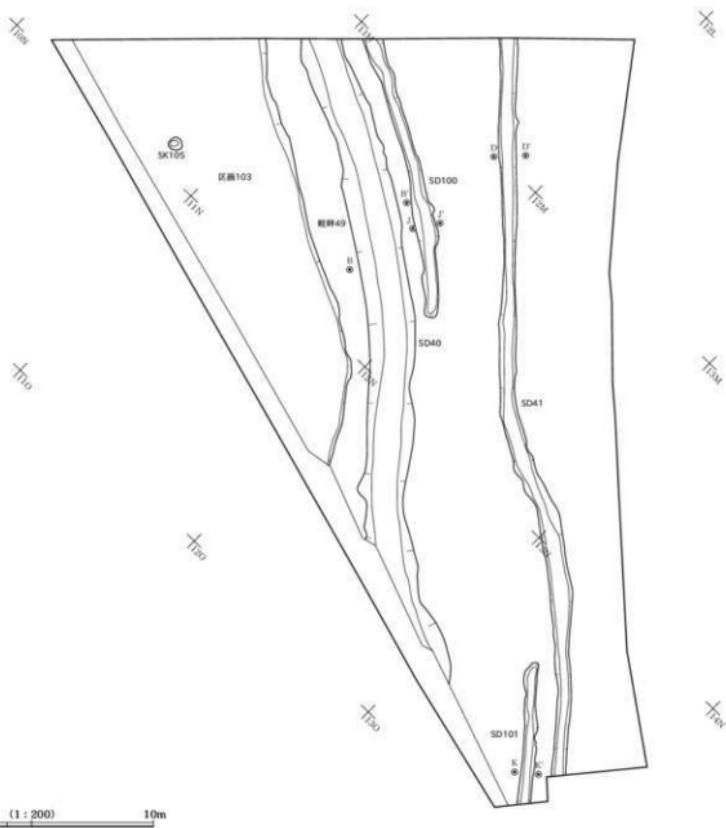
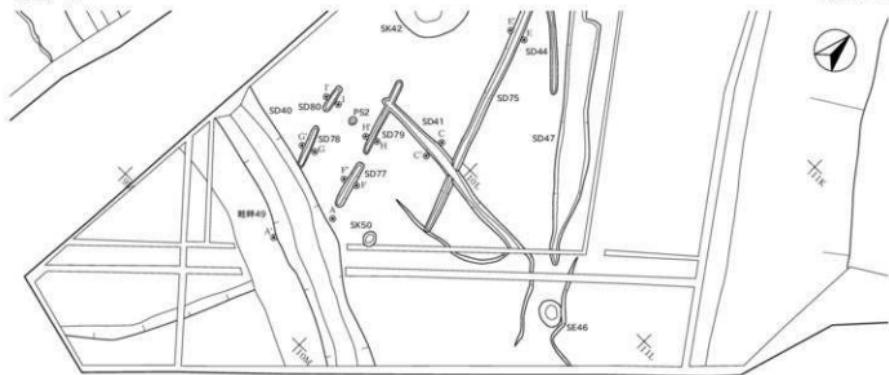


個別図 5



図版 16

分割図 10



個別図 6

SD40



SD40-I

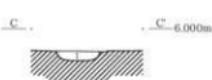
1 黒褐色 (10YR3/1) 粘土 Ⅱa 色より褐色が強く全体的に茶味が付す

2 黑褐色 (10YR3/1) 粘土 Ⅱb Ⅱaより褐色多く含む 基本剖面Ⅲa 層

SD40

- IIa 青灰色 (10GB5/1) 粘土 明褐色 (7.5YR7/2) 粘土ブロック層 近・現代の木耕作土
IIb 暗褐色 (10YR4/1) 粘土 しまり強・褐色鉄鉱多量・炭化物少量含む
IIIa 暗褐色 (10YR3/1) 粘土 しまり弱・褐色鉄鉱少量含む
1 黑褐色 (10YR3/2) 粘土 しまり弱・褐色鉄鉱中・白色粘土ブロック (径 5~34mm) 多量混じる
炭化物多量に含む
2 黑褐色 (10YR4/2) 粘土 しまり弱・褐色中・鐵酸化物多量に含む

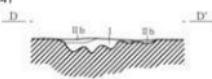
SD41



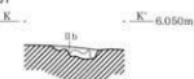
SD100



SD41



SD101

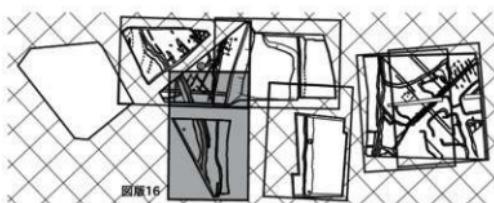


- SD41
IIb 暗褐色 (10YR4/1) 粘土
1 黑褐色 (10YR3/2) 粘土 しまり強・褐色鉄鉱多量・炭化物少量含む
基本剖面Ⅲa 層

- SD101
IIb 暗褐色 (10YR4/1) 粘土
1 黑褐色 (10YR2/1) 粘土 炭化物少量含む 基本剖面Ⅲa 層

- SK50

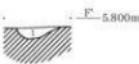
- SK50
I 黑褐色 (5Y5/1) 粘土 炭化物 (径 1~20mm) 含む



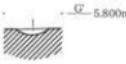
SD75



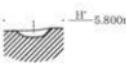
SD77



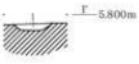
SD78



SD79



SD80



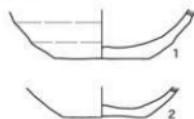
SE46



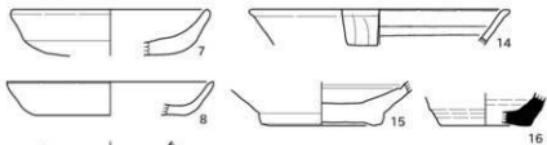
SE46

- 1 黑褐色 (10YR1.7/3) 粘土 灰色 (5Y5/1) 粘土ブロック層、しみ弱
2 黑褐色 (10YR1.7/1) 粘土 4 黑褐色 (10YR2/1) 粘土ブロック層
3 黑褐色 (5Y7/1) 粘土 5 黑褐色 (10YR1.7/1) 粘土ブロック層
4 黑褐色 (10YR1.7/1) 粘土 6 黑褐色 (10YR1.7/1) ビートブロック層
5 黑褐色 (7.5Y5/1) 粘土
6 黑褐色 (10Y4/1) 粘土

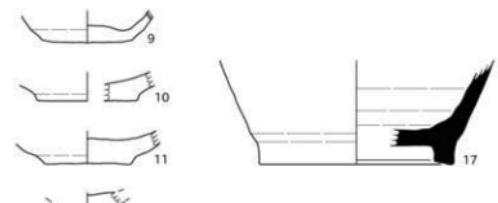
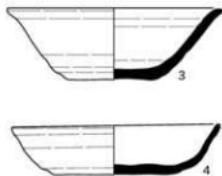
SK1 (1・2)



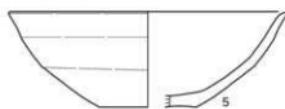
SD40 (7~18)



SK2 (3・4)



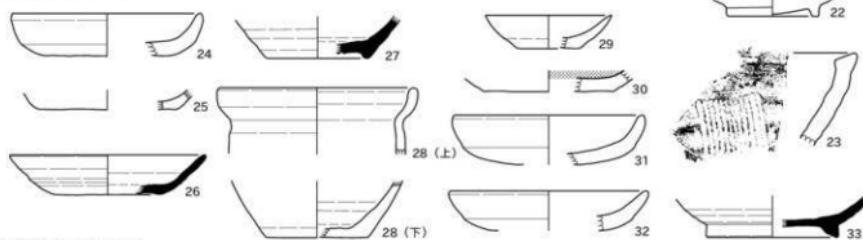
SK3 (5・6)



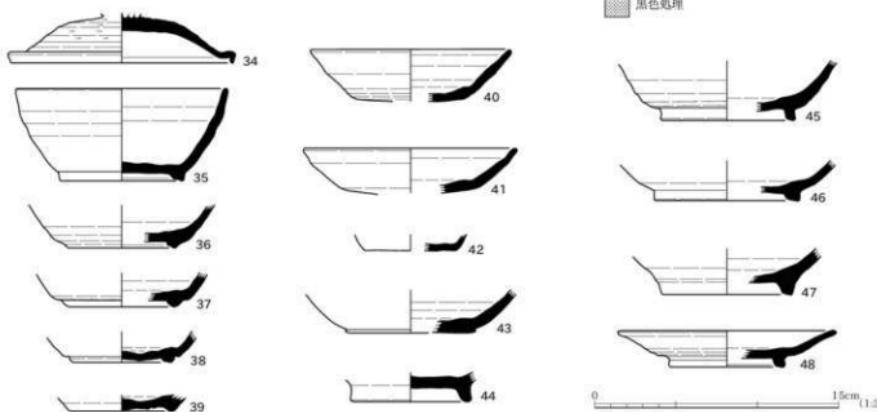
SD41 (22・23)



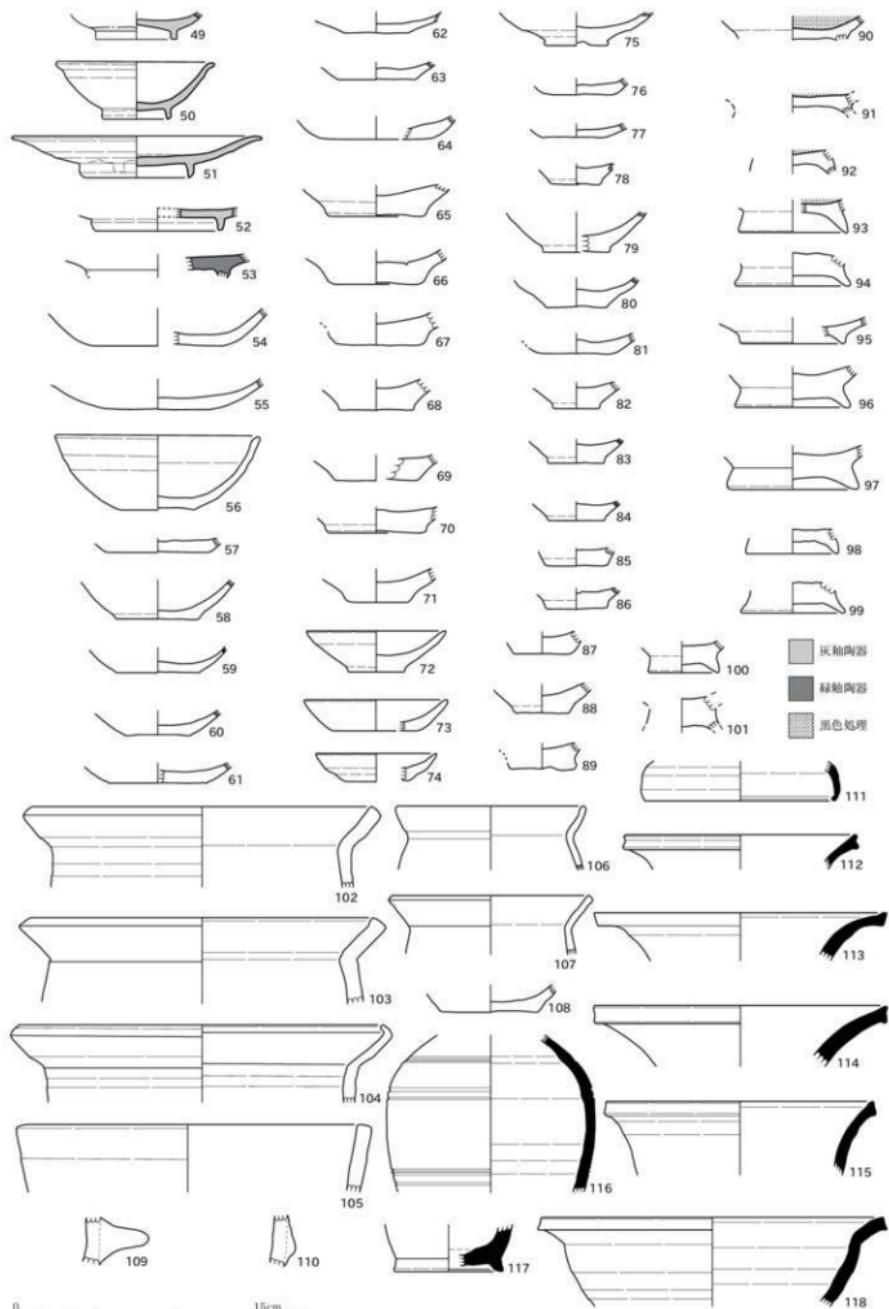
その他の遺構 (24~33)

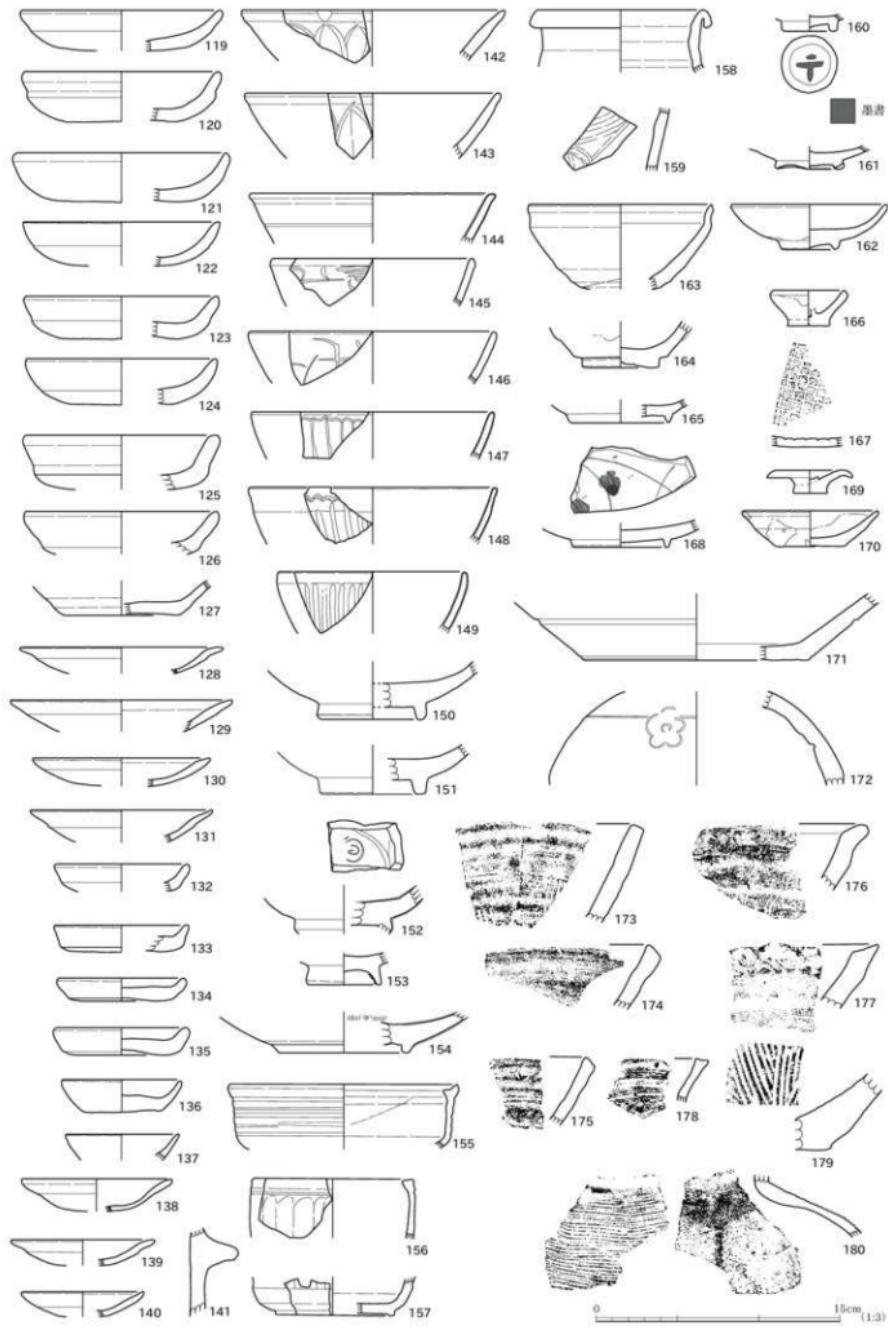


包含層ほか (34~211)

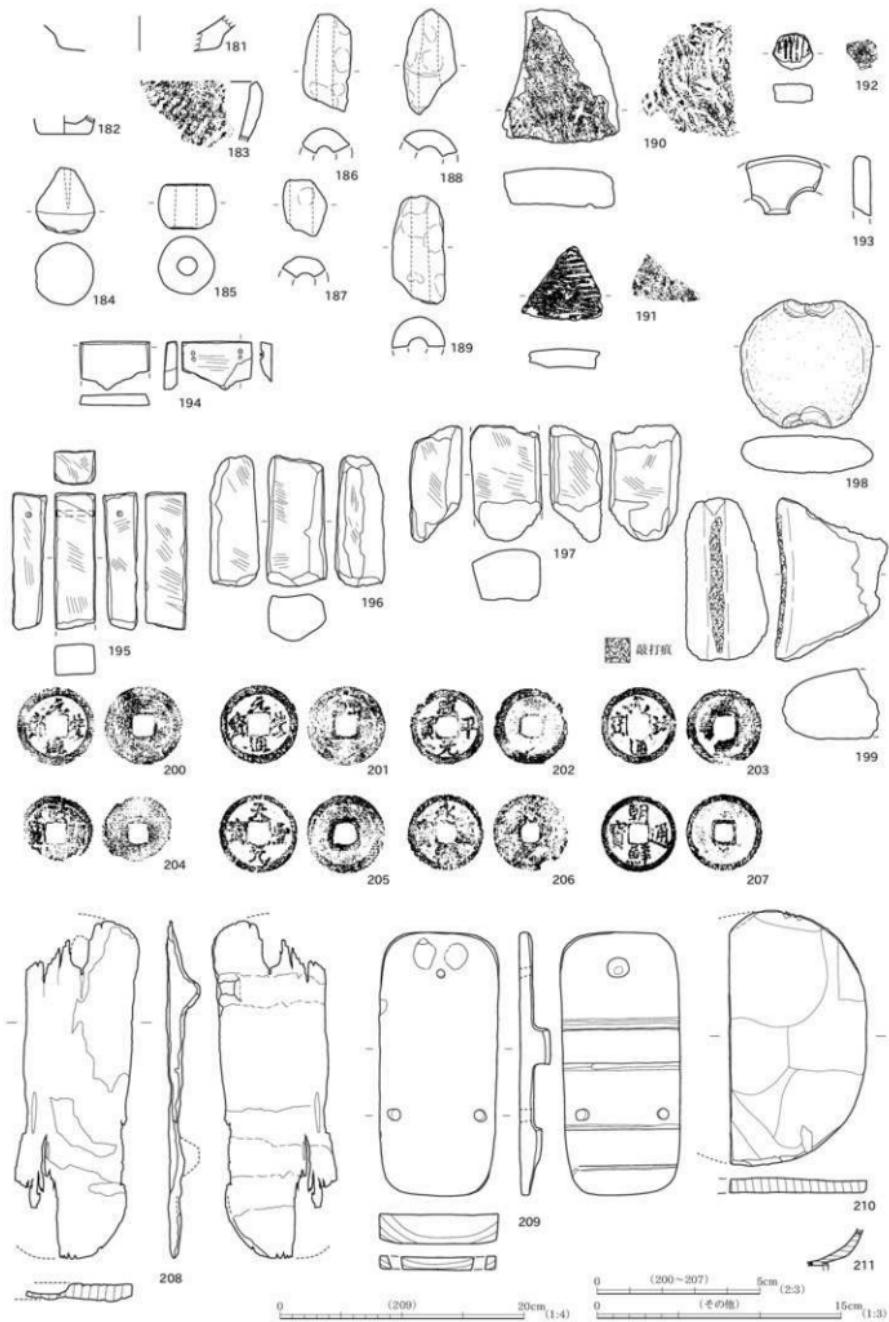


0 15cm (1.3)





0 15cm (1:3)





調査区近景（東から）



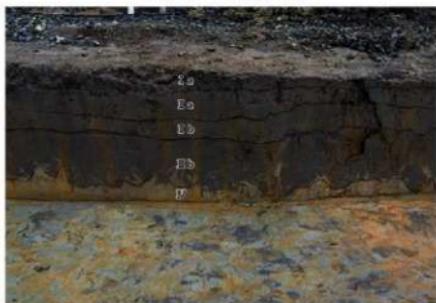
A 区全景（南東から）



A区南北ベルト断面(東から)



A区南西壁断面(北東から)



B区西壁断面(南東から)



B区南北ベルト断面(東から)



B区北西壁断面(南東から)



C1区南北ベルト(東から)



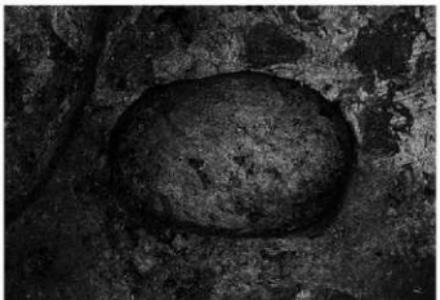
D1区南北ベルト断面(東から)



D2区北東断面(南西から)



SK1 断面（南から）



SK1 完掘（南から）



SK2 断面・土器出土状況（南から）



SK2 完掘（南から）



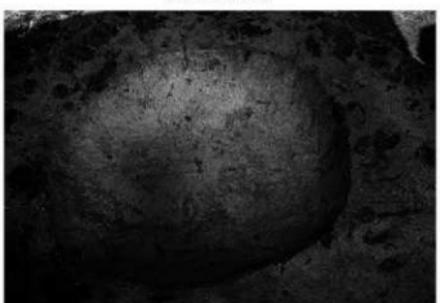
SK2 須恵器出土状況（北東から）



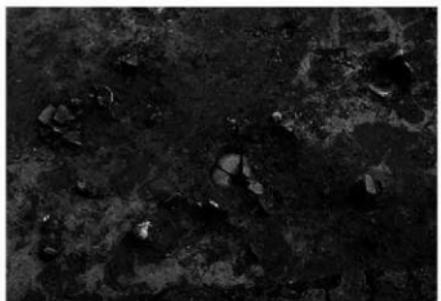
SK3 断面（南から）



SK3 墓化物出土状況（南から）



SK3 完掘（南から）



18E4 土器出土状況



SD4 断面（南から）



SD6 断面（南から）



SD12 断面（東南から）



SD13 完掘（北西から）



SD10 完掘（東から）



SD10-4 断面（東から）



SD10-5（東から）



SD7 剖面 (南から)



SD7 完掘 (南から)



SD11 畦畔 14 完掘 (南から)



SD36 完掘 (西から)



SD9・畦畔 18 検出状況 (北西から)



SD9 剖面 (北から)



SD9・畦畔 18 完掘 (西から)



畦畔 19 剖面 (南から)



SD8 検出状況 (南から)



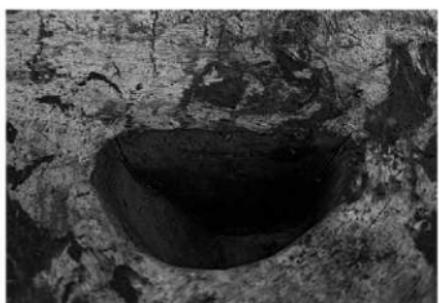
SD8 実掘 (北から)



SD8 断面 (南から)



P20 (SB85) 断面 (西から)



P21 (SB85) 断面 (西から)



P25 (SB85) 断面 (西から)



P26 (SB85) 断面 (西から)



P16 断面 (南から)



D1・D2区近景(北西から)



D1区完掘(北西から)



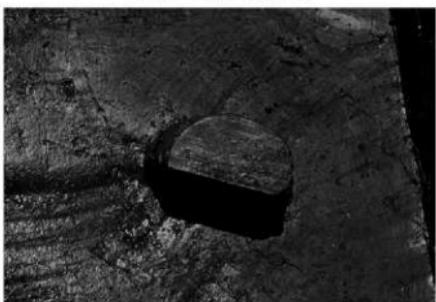
SD83 (D1区) 新面 (北西から)



SD83 (D1区) 完掘 (北西から)



杭 (D1区 SD83周辺) 検出状況 (南西から)



円形板出土状況 (東から)



SD83 (B区) 新面 (北西から)



SD83 完掘 (南東から)



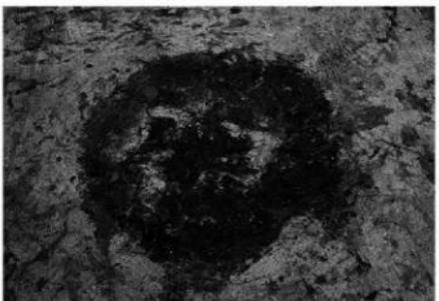
畦畔 84 (B区) 検出状況 (南から)



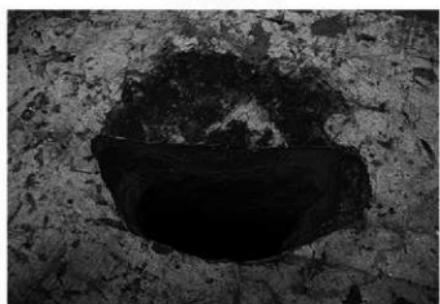
作業風景 (D1区)



B区近景（南西から）



SE48 検出状況（東から）



SE48 断面（東から）



SE48 完掘（東から）



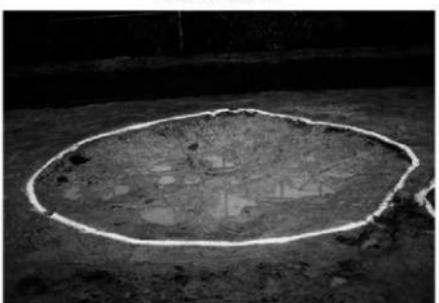
SE46 断面（東から）



SE46 完掘（東から）



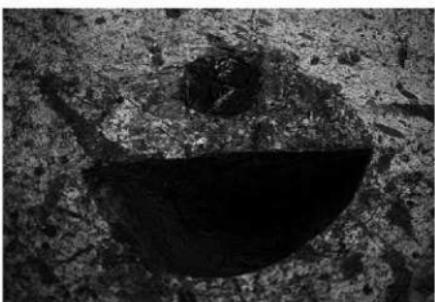
SK42 検出状況（南西から）



SK42 完掘（北東から）



SK50 断面（西から）



P52 新面・遺物出土状況（東から）



9・10JKL 周辺遺構検出状況（南から）



9・10JKL 周辺遺構完掘（南から）



9・10KL 周辺遺構検出状況（北西から）



9・10KL 周辺遺構完掘（北東から）



9K 周辺遺構完掘（北から）



SB86 完掘（南東から）



9・10JKL 遺構完掘（西から）



SD41 (B 区) 断面（東から）



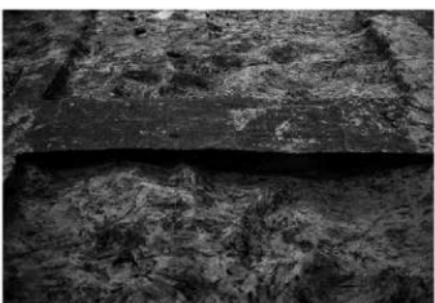
SD41 (B 区) 完掘（東から）



SD43 断面（北から）



SD44 断面（南から）



SD45 断面（南から）



SD47 断面（南から）



SD47 完掘（南から）



SD75 完掘（南から）



SD77 完掘（南から）



SD78 完掘（南から）



SD40・畦畔 49（B 区）検出状況（東から）



SD40（B 区）断面（東から）



SD40（B 区）完掘（東から）



SD40・畦畔 49（B 区）完掘（南から）



C2 区完掘（北から）



D2 区遺構検出状況（北西から）



D2 区完掘（北西から）



SD40 (D2 区) 断面（東から）



SD41 (D2 区) 断面



SD100 断面（東から）



SD101 断面（北西から）



SK105 断面（東から）



SK105 完掘（北から）



C2 区完掘（東から）



7KL・8JKL 造構検出（南東から）



7KL・8JKL 造構完掘（南東から）



8K 造構検出（東から）



8K 造構完掘（東から）



8JKL 遺構検出（北東から）



8JKL 遺構完掘（北東から）



BJK 遺構検出（東から）



BJK 遺構完掘（東から）



SK220 新面（北東から）



SK220 完掘（北東から）



SD40 (C1 区) 断面（東から）



SD40・201・202、畦畔 49・226 完掘（東から）



SD200 剖面 (西から)



SD201 剖面 (東から)



SD203・204 完掘 (東から)



SD207 剖面 (東から)



SD212・214 剖面 (東から)



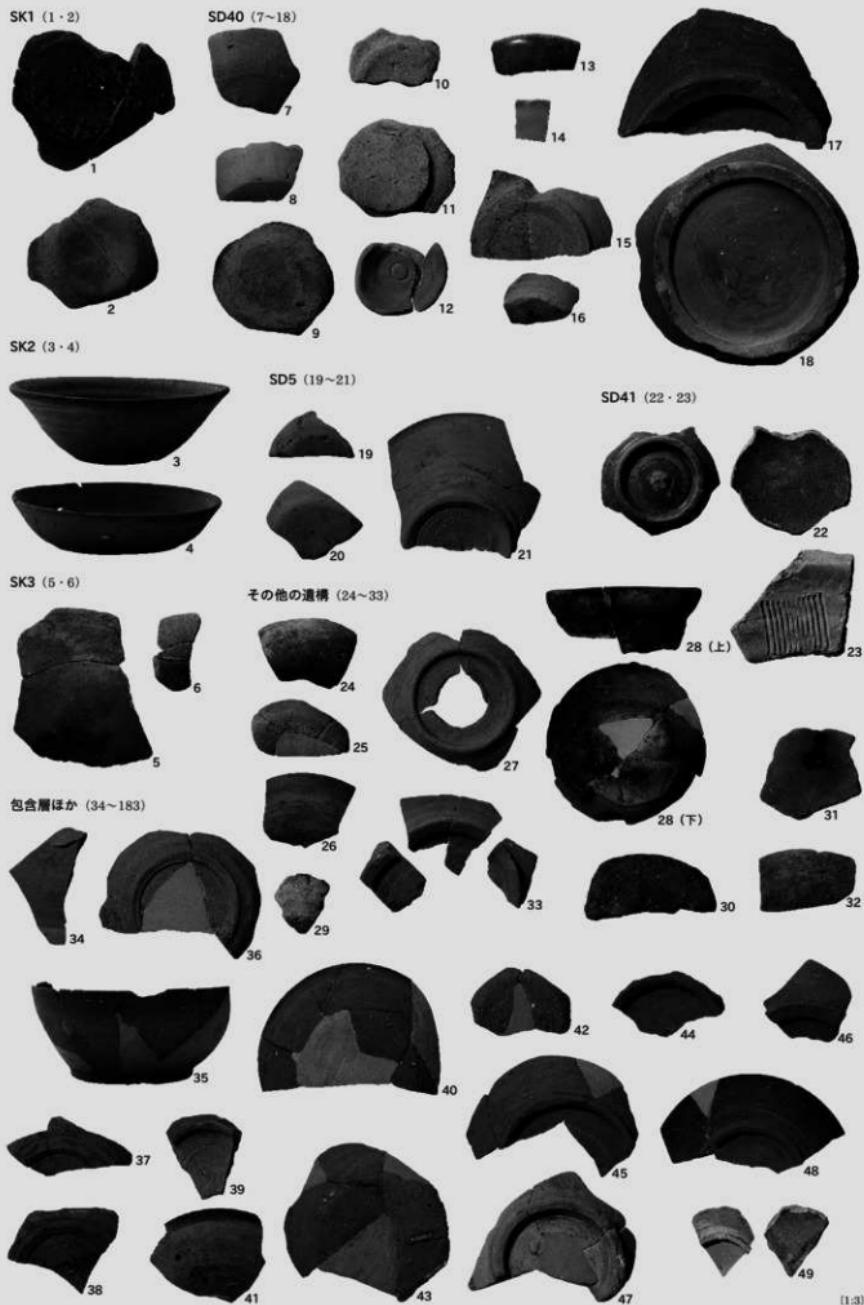
SD215 剖面 (北東から)

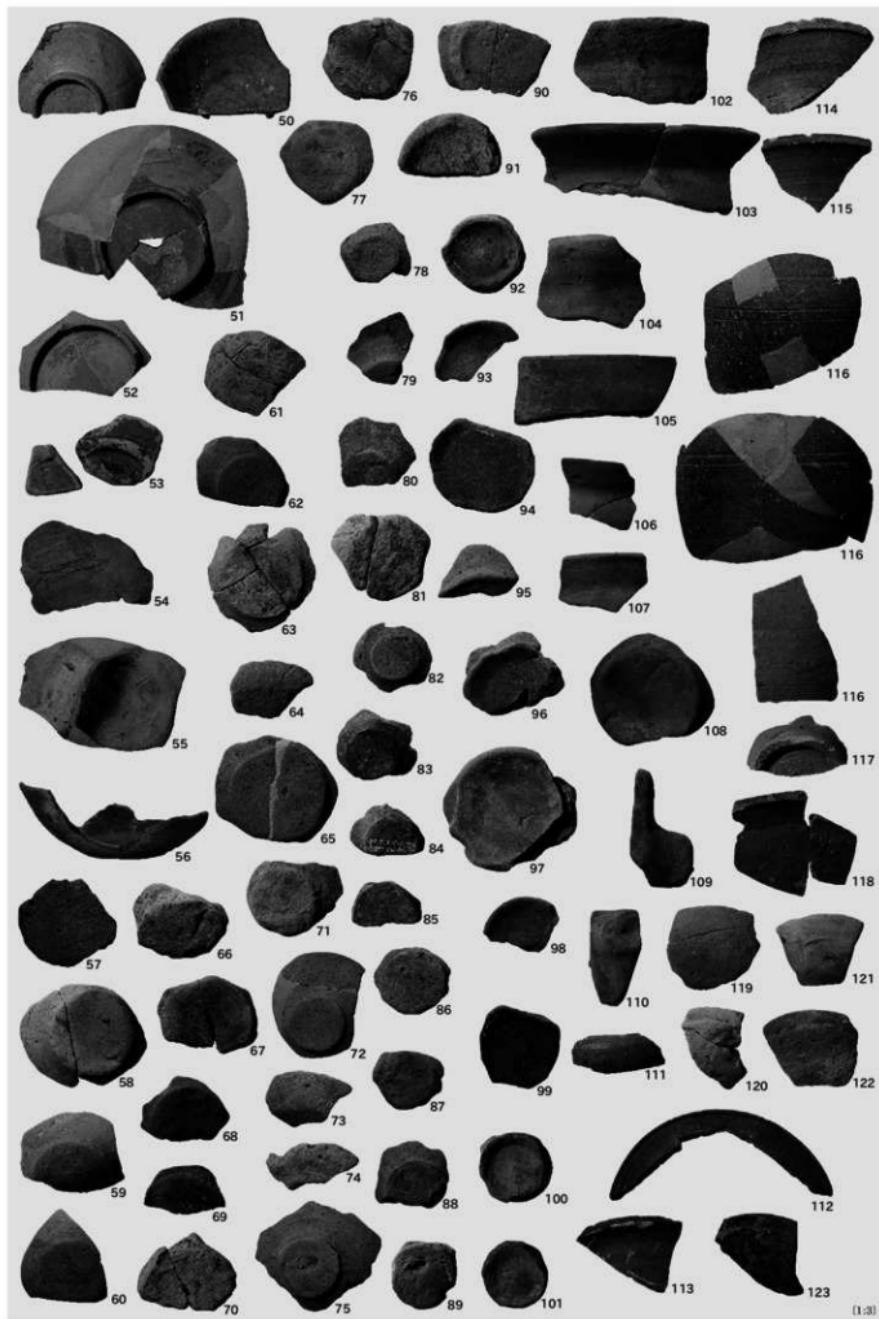


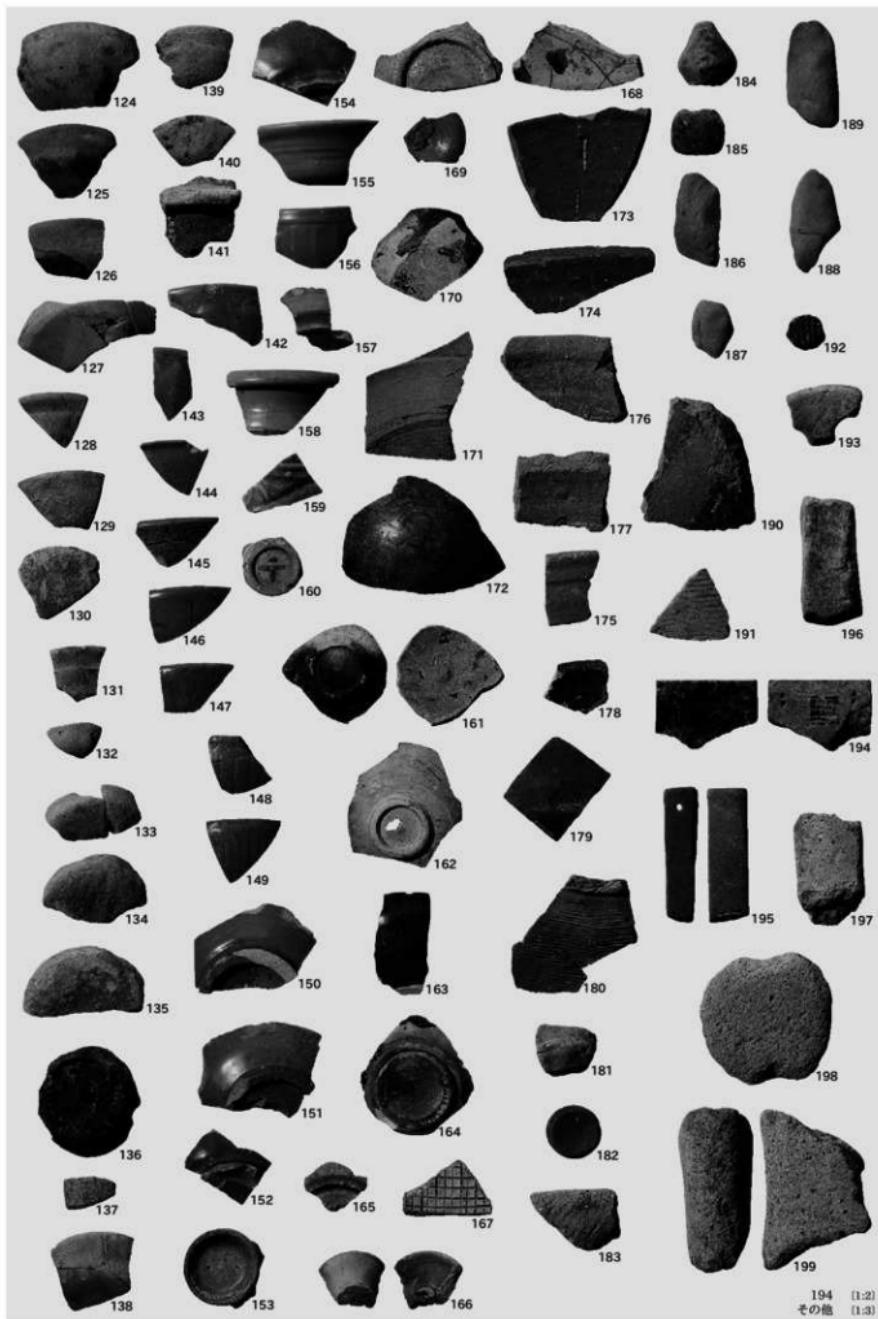
SD219 剖面 (東から)



SD221 剖面 (東から)









報告書抄録

ふりがな	こみねいせき								
書名	小峯遺跡								
副書名	一般国道8号柏崎バイパス報告書								
巻次	X								
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第259集								
編著者名	春日真実(公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団)、鈴木 茂(株式会社パレオ・ラボ)								
編集機関	公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団								
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981								
発行年月日	2015(平成27)年3月31日								
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東經	発掘期間	調査面積 (nf)	調査原因			
小峯遺跡 新潟県柏崎市 半田3丁目10 番地10	新潟県柏崎市 半田3丁目10 番地10	15205 347	37° 21' 36" 138° 34' 38"	19980610 ~ 19981216 19990419 ~ 19990803	9,000nf	一般国道8号 柏崎バイパス 建設			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	出土遺物	特記事項				
小峯遺跡	遺物包蔵地	縄文時代		縄文土器・石錐	縄文土器と縄文時代 の石器が少量出土した				
	集落・生産遺跡	平安時代~中世 (9 ~ 16世紀)	掘立柱建物2 戸戸3 土坑10 烟作溝 溝 ビット 杭	土師器・須恵器・灰釉陶器・ 輪転耳壺・土師質土器・珠洲焼・ 瀬戸焼・美濃焼・青磁・白磁・青 白磁・土製品(土鍋・劫鉗車・ 転用研削具)・石製品(造方・砥石・ 敲石)・金属製品(銭貨)・铁洋・ 木器(下駄・円形板・漆器椀・杭)	須恵器水瓶・灰釉陶器・皿・ 綠釉陶器皿・白磁西耳壺・青 磁盤・青炉・青白磁・梅瓶・ 瀬戸焼・美濃焼瓶子・燭台・石帶 などが出土した。				
要約	9世紀前葉から16世紀中葉まで連続と続く集落・生産遺跡(耕地)で、検出した2棟の掘立柱建物は小規模な建物だが、出土土器・陶磁器には優品があり、石帶の巡方も確認できる。遺跡は長期間存続した可能性が高く、貧しく不安定な村落ではなく、近隣に有力な集落が存在したか、有力な在地勢力(が所在する集落)の出村的な性格の可能性がある。								

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第259集

一般国道8号 柏崎バイパス関係発掘調査報告書X

小峯遺跡

2015(平成27)年3月30日印刷

編集・発行 新潟県教育委員会

2015(平成27)年3月31日発行

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

公益財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

電話 025(233)0321

第259集 小峯道勝 正額表

ページ	行など	額	正
奥付(抄録)	コード 遺跡番号	347	680